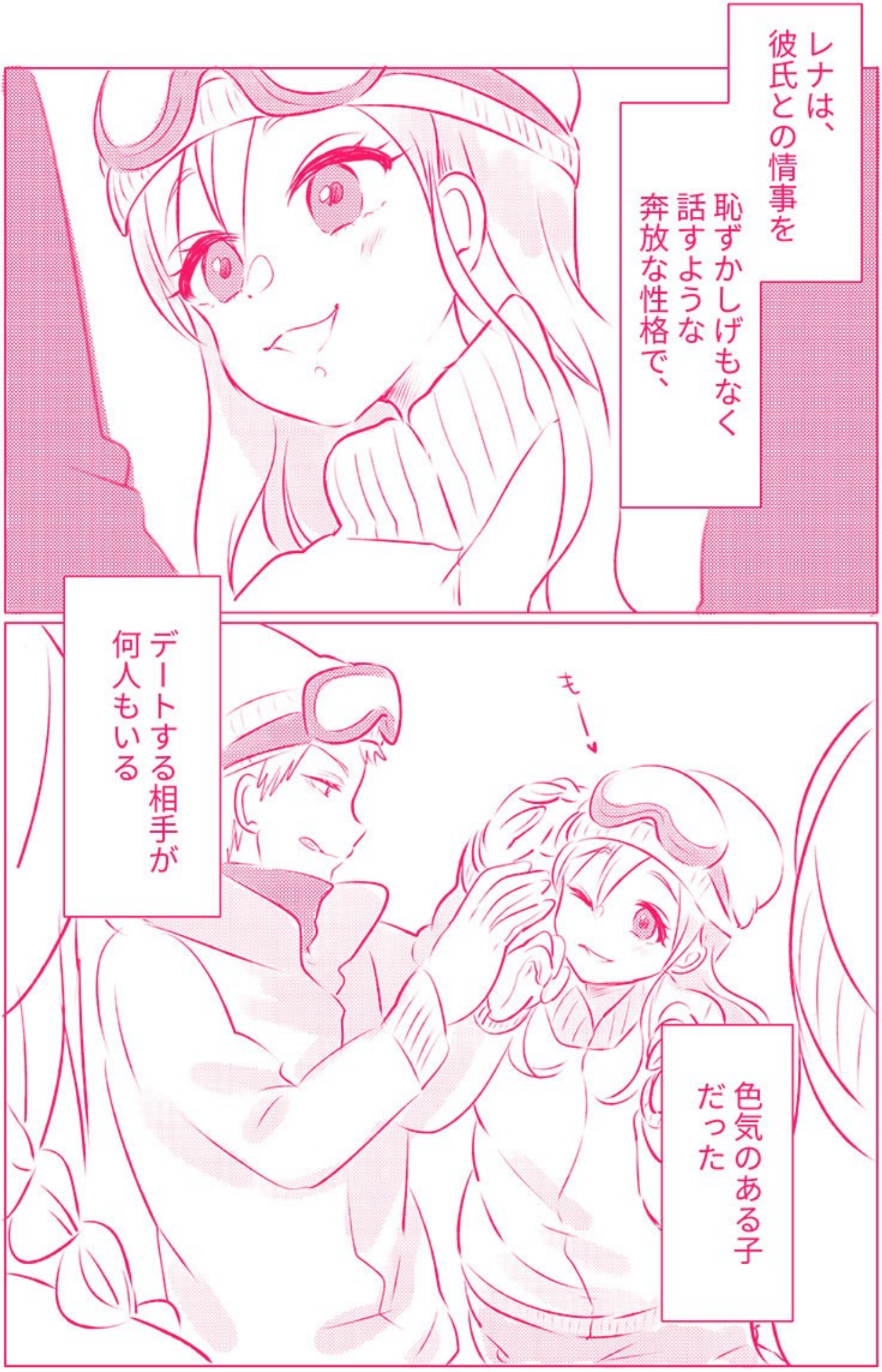
Vコミ

スノボ旅行で友人のSEXを覗いた話

漫画：鹿こぶちゃ
原作：ひつじ子

Hなエッセイシリーズ

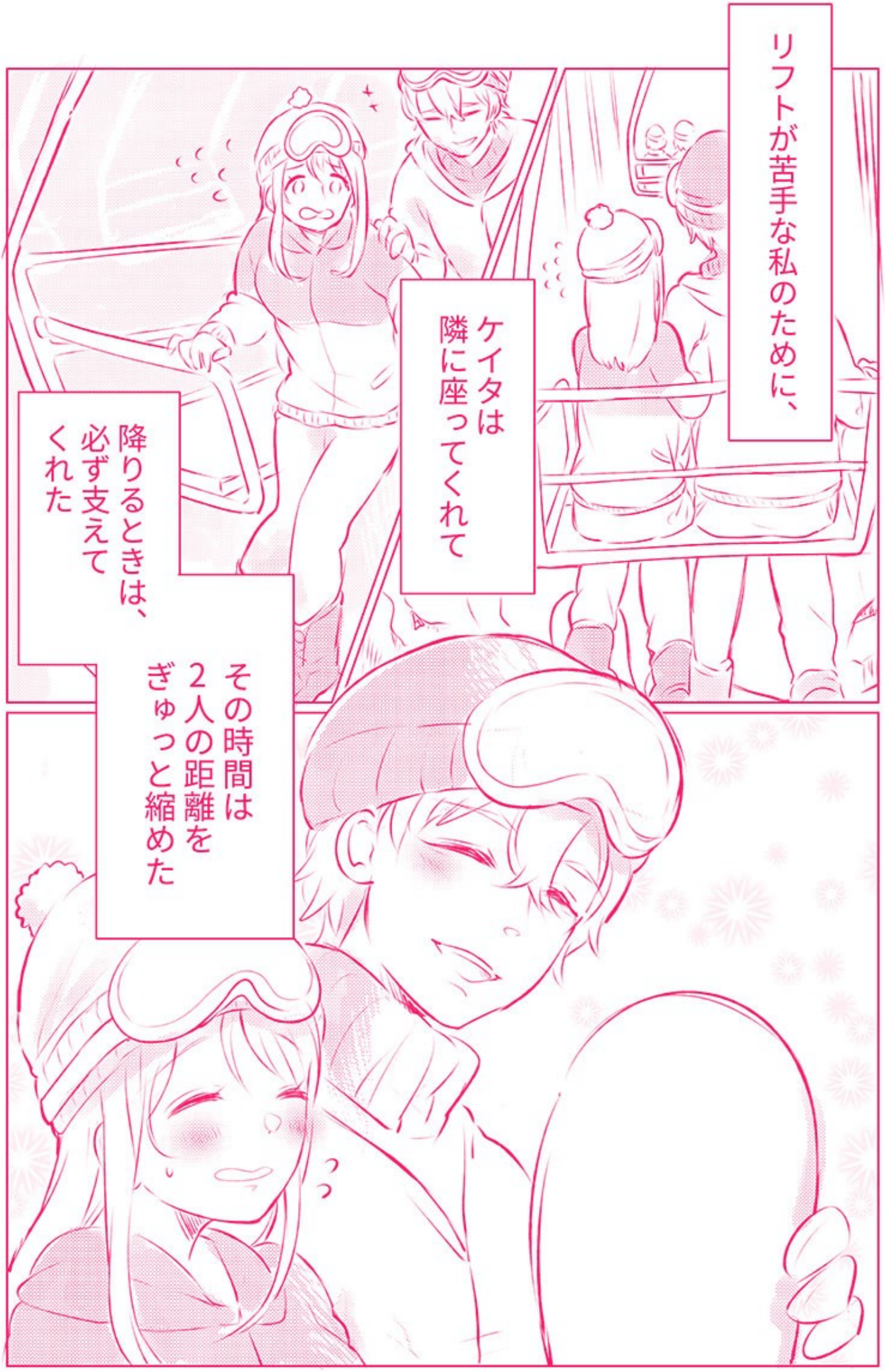
大学生の冬――
私は大学の同級生のレナに誘われて、
泊まりでスノーボードに来ていた


レナは、
彼氏との情事を
恥ずかしげもなく
話すような
奔放な性格で、
デートする相手が
何人もいる
キー
色気のある子
だった

スノボには、もう1人の
同級生・アヤミと、
レナの友人で
他大学のマサキ
その友達の
ケイタと
カイトが
来ていた
男の子たちとは
初対面
つまり
スノボの
名を借りた合コンの
ようなものだった

みんなは、何度もスノボに来ているらしく上手だったが、
ちょっと滑ってくる
すぐ戻るね
ひゃ
ドヤ
私は1人苦戦していた…
～っ…
ざっ
マイちゃん下手だなー

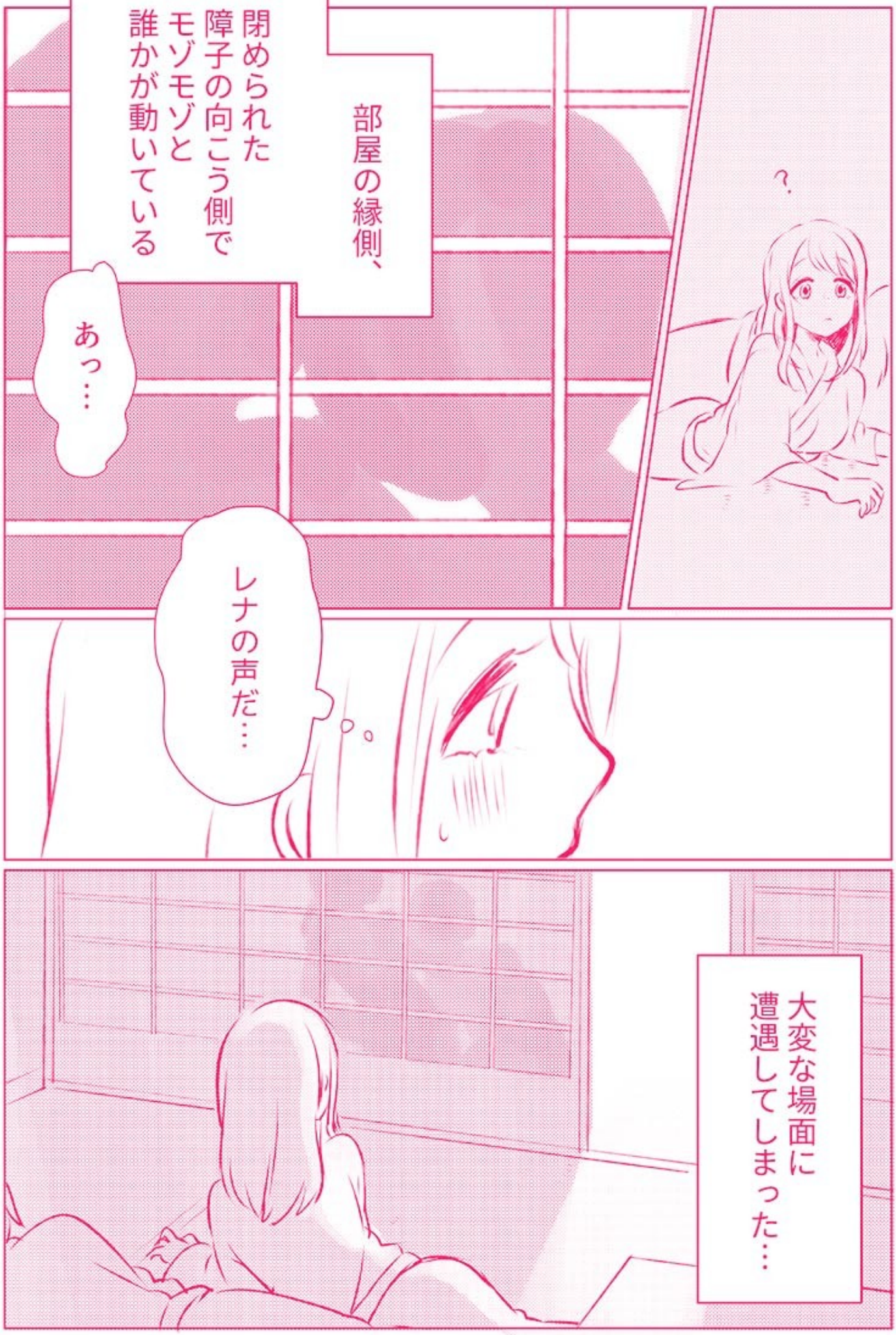
そんな私に、
ケイタは
からかいながらも
手を差し伸べてくれた


リフトが苦手な私のために、
ケイタは
隣に座ってくれて
降りるときは、
必ず支えて
くれた
その時間は
2人の距離を
ぎゅっと縮めた

古い言葉だけど
ゲレンデマジック
とはよく言った
もので…
颯爽と雪山を滑る
男の子たちは、
とてもかっこよく見える
いつのまにか私は、
ケイタの姿を
目で追っていた

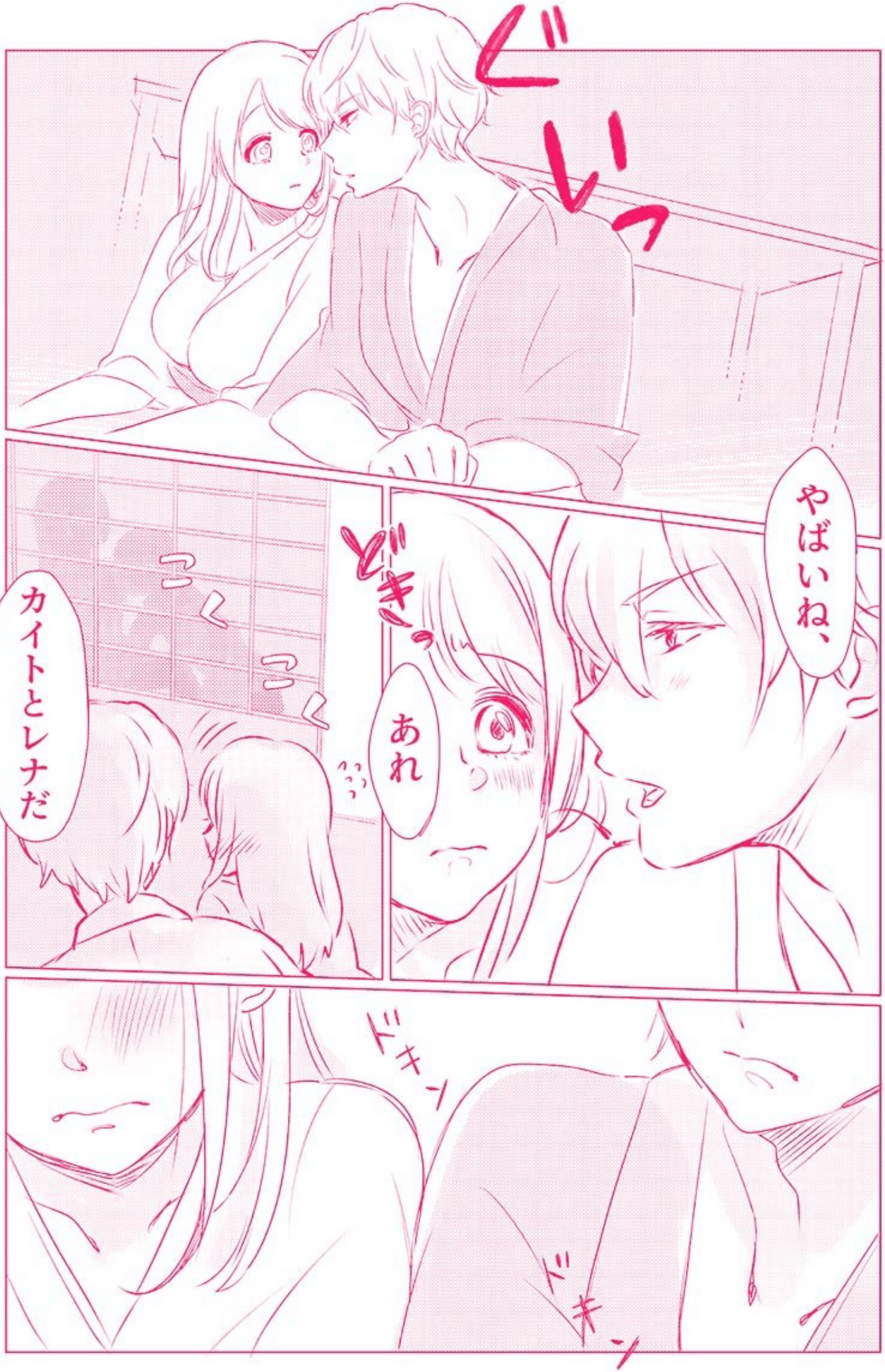
夜
みんなで旅館の
一部屋に集まり、
宴会がはじまったー

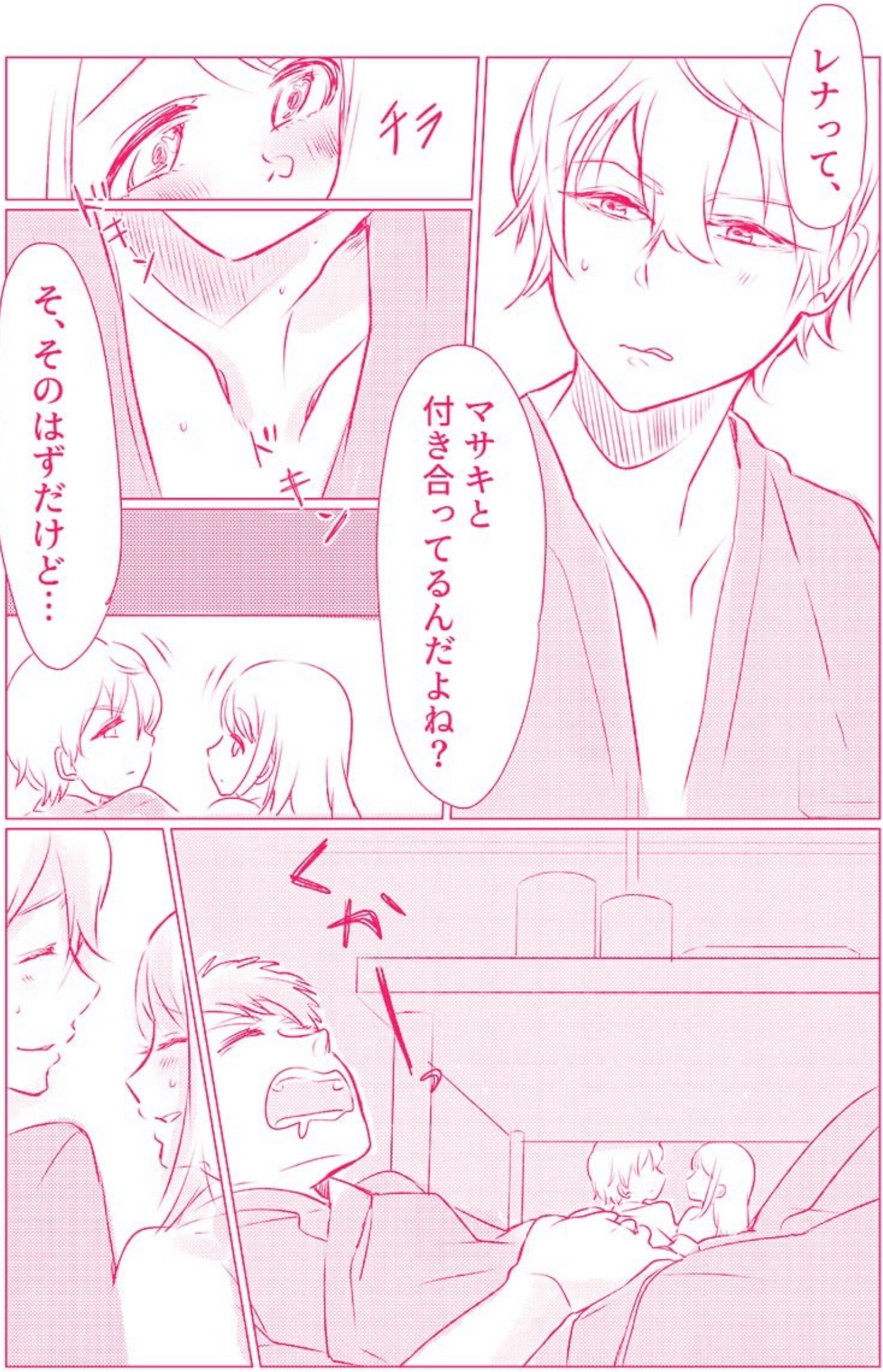
すー
しかし、
スノボの疲れで、
みんなあっという間に
雑魚寝してしまった
夜中、
物音でふと
目が覚めた…

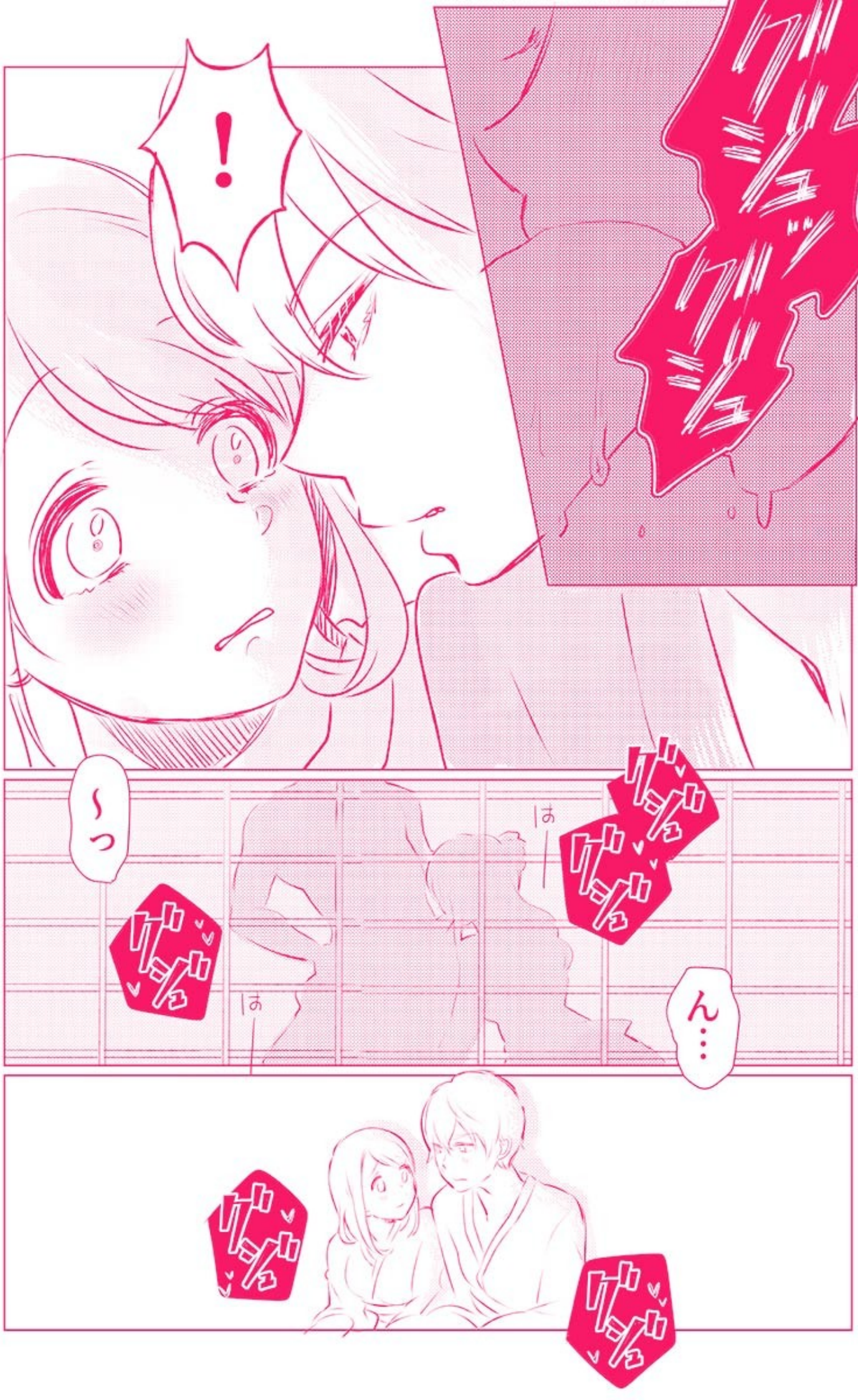

？
部屋の縁側、
閉められた
障子の向こう側で
モゾモゾと
誰かが動いている
あっ…
レナの声だ…
大変な場面に
遭遇してしまった…

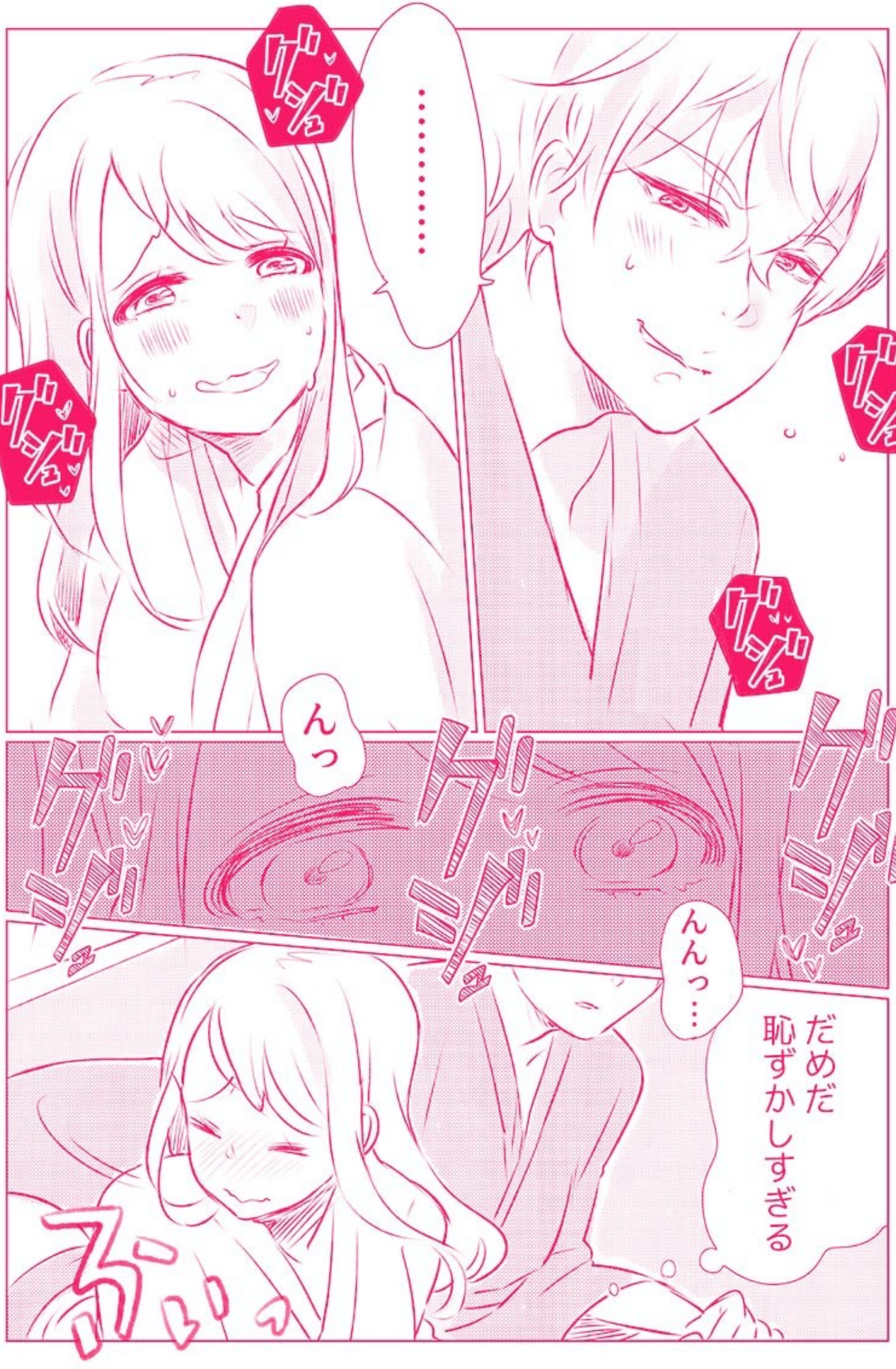
あ…
障子にわずかな
影が映り、
レナと誰かが
もつれ合っているのが
わかった
んっ
っ…
はぁ
ちゅ
ちゅ

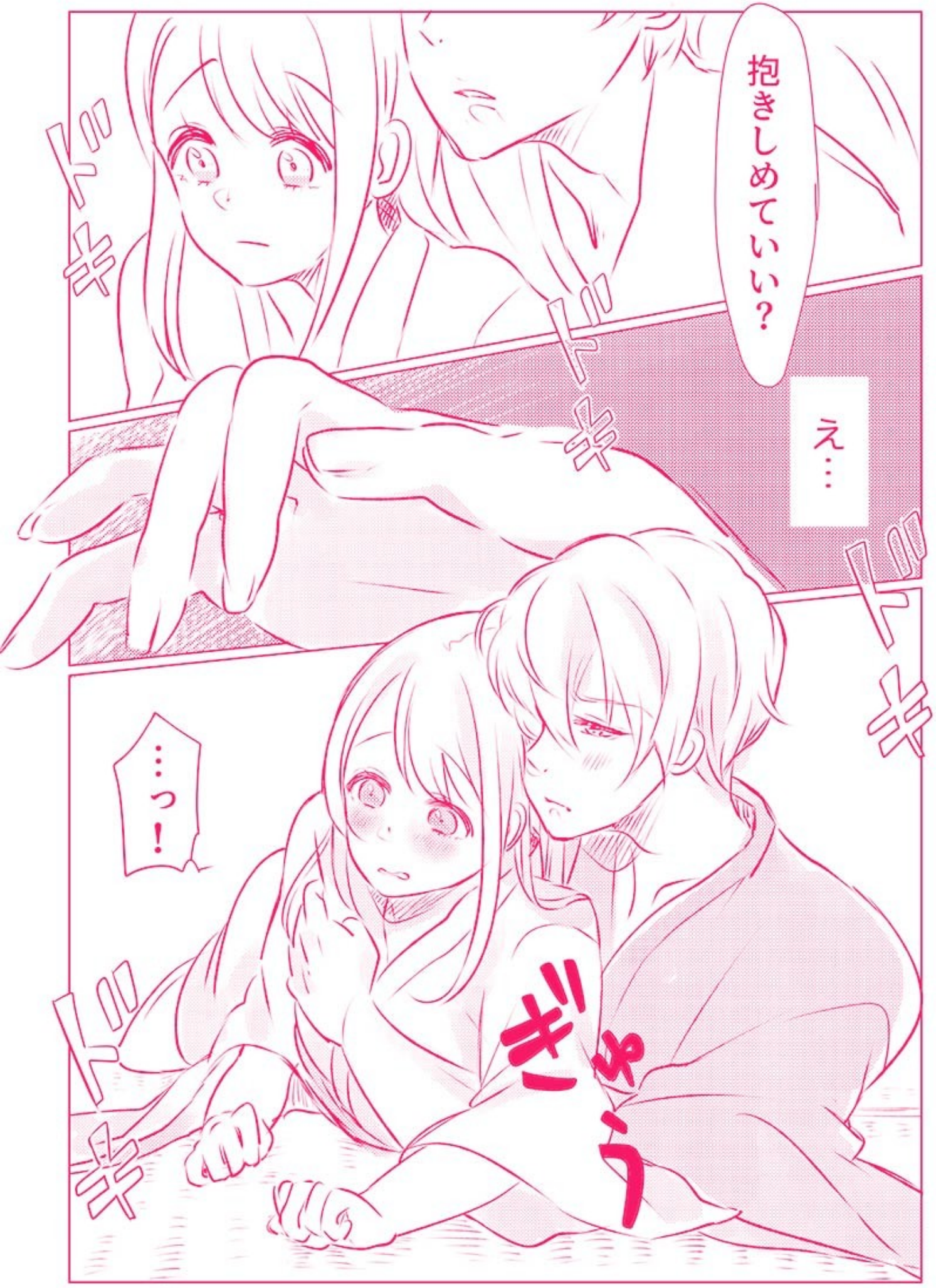
えっ
!
はぁ
はぁ
んあっ
はぁ
あんっ
くちゅくちゅ
はぁ
はあっ
……

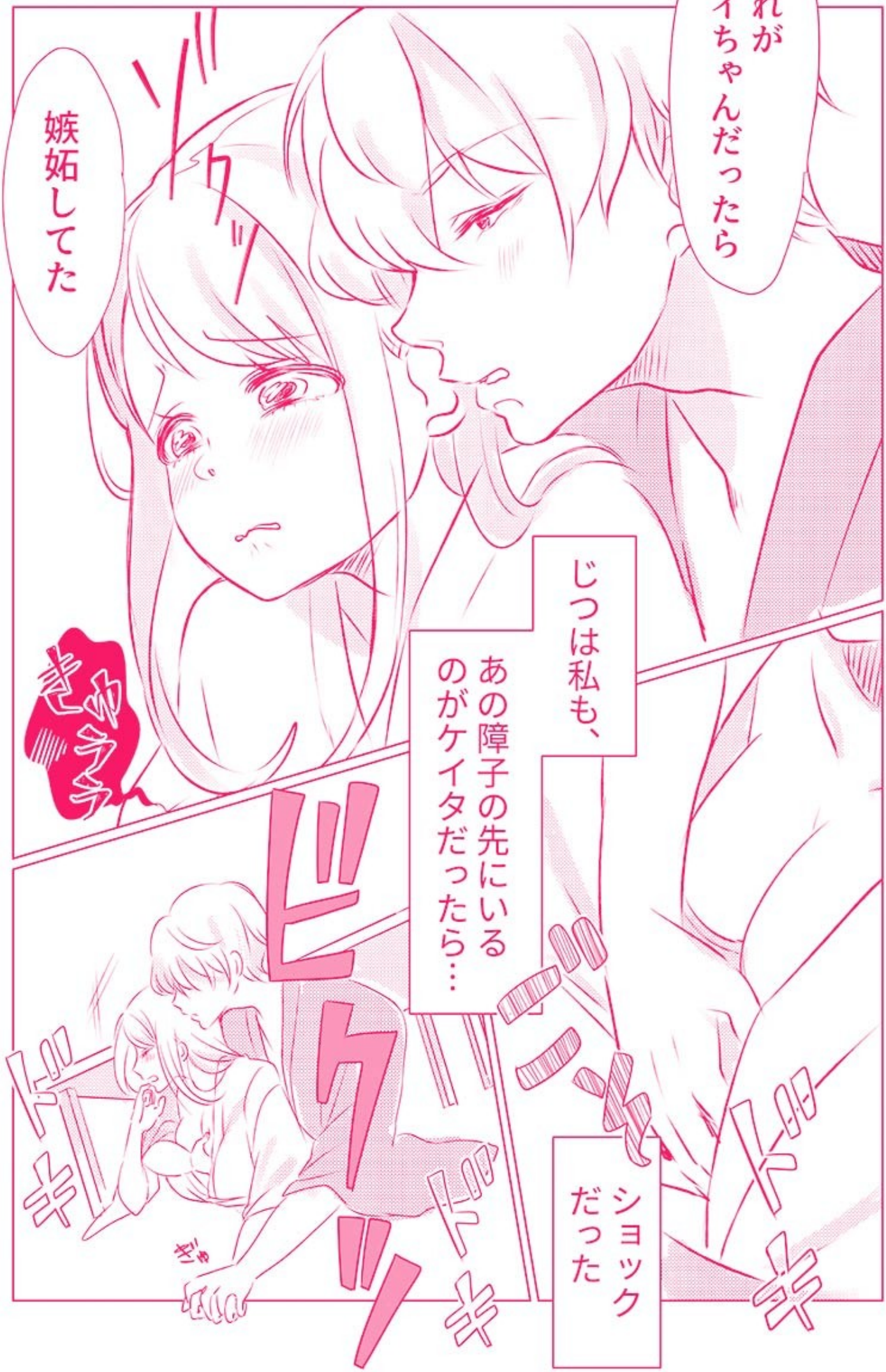

ぐいっ
やばいね、
どきっ
あれ
こそこそ
カイトとレナだ
ドキーン
ドキーン

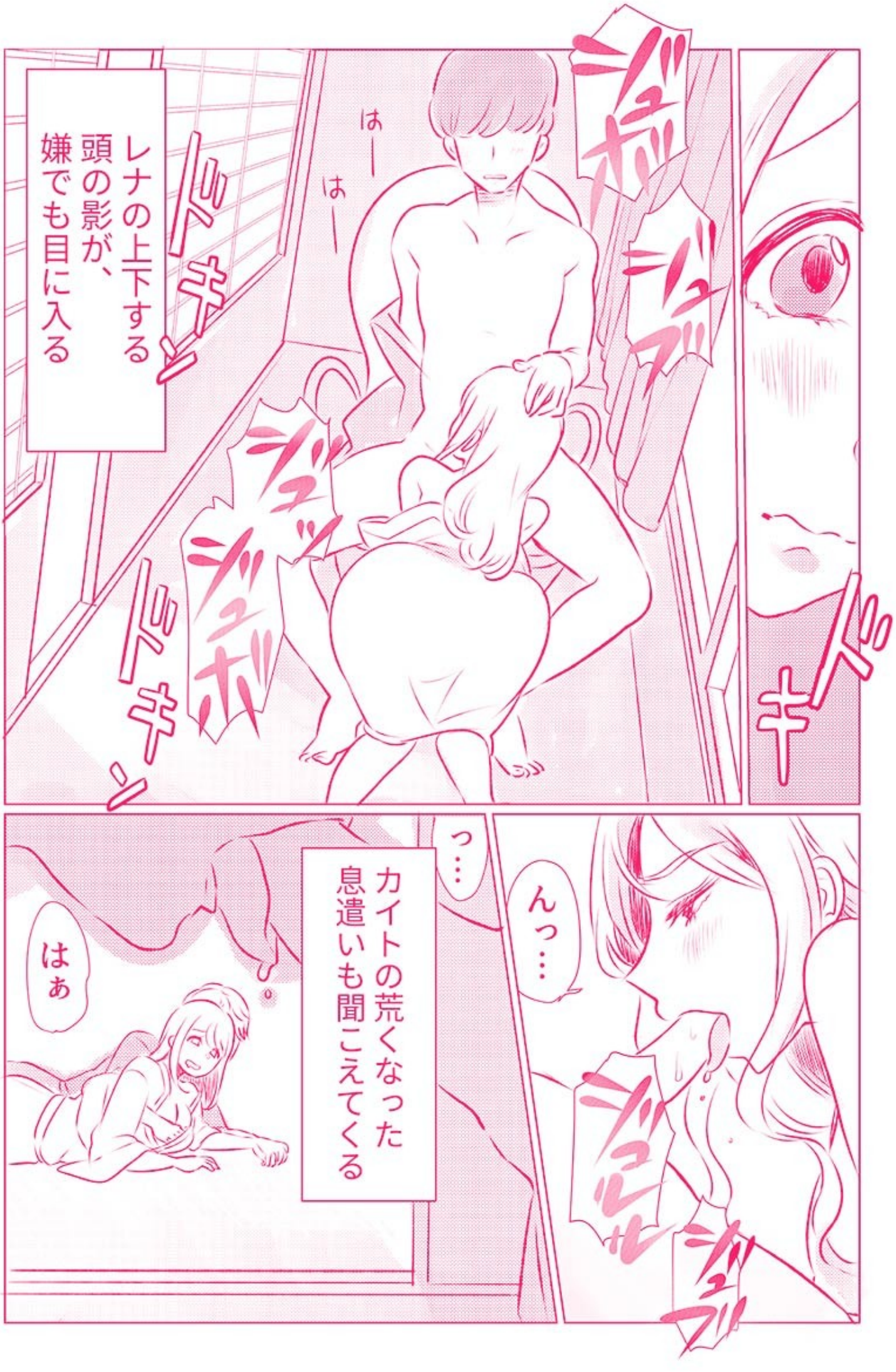

レナって、
マサキと
付き合ってるんだよね？
そ、そのはずだけど…
チラ
ドキン
ドキン
くが

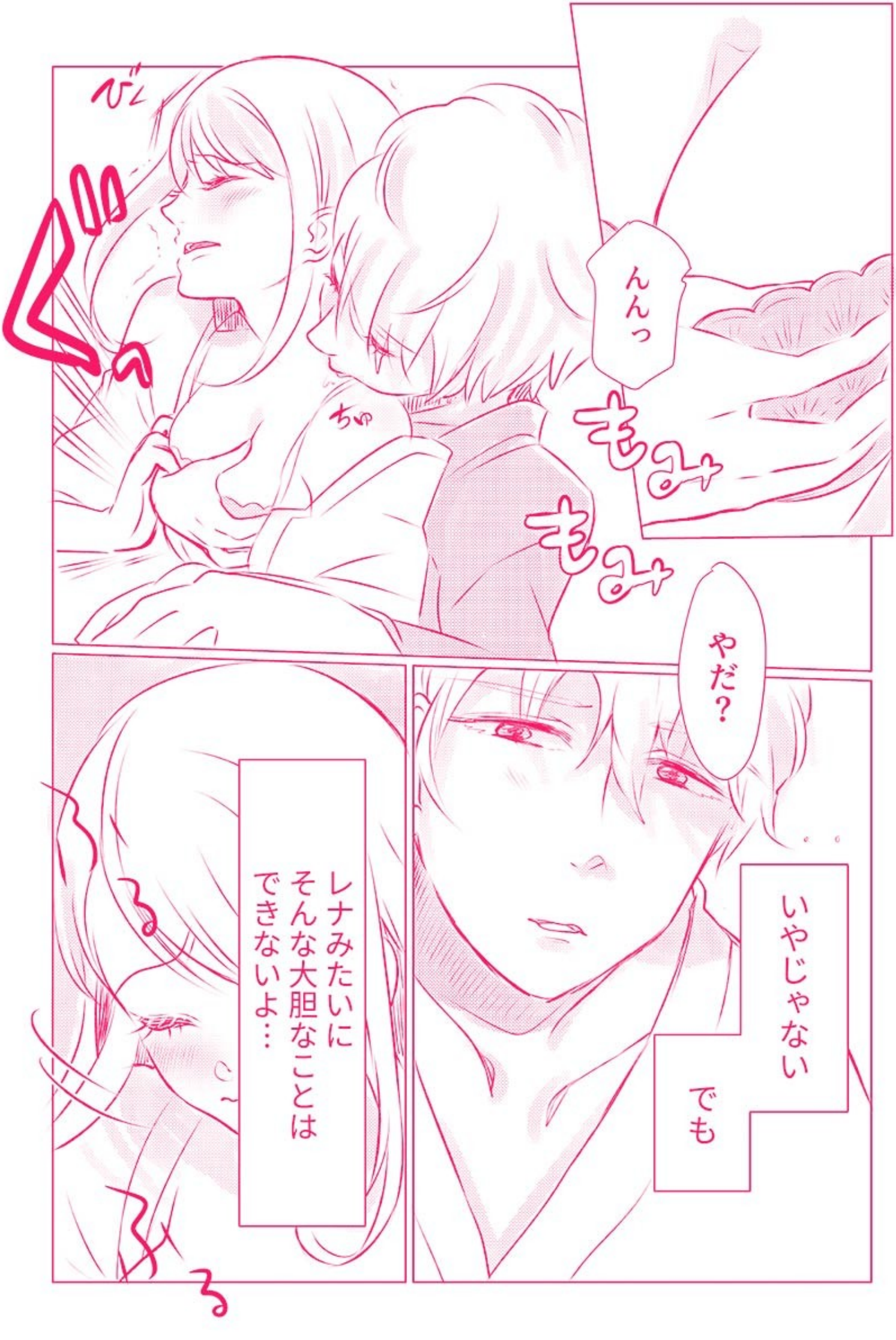

！
ゲシゲシ
ゲシゲシ
ゲシゲシ
ゲシゲシ
ゲシゲシ
ほ
ほ
〜っ
ん…

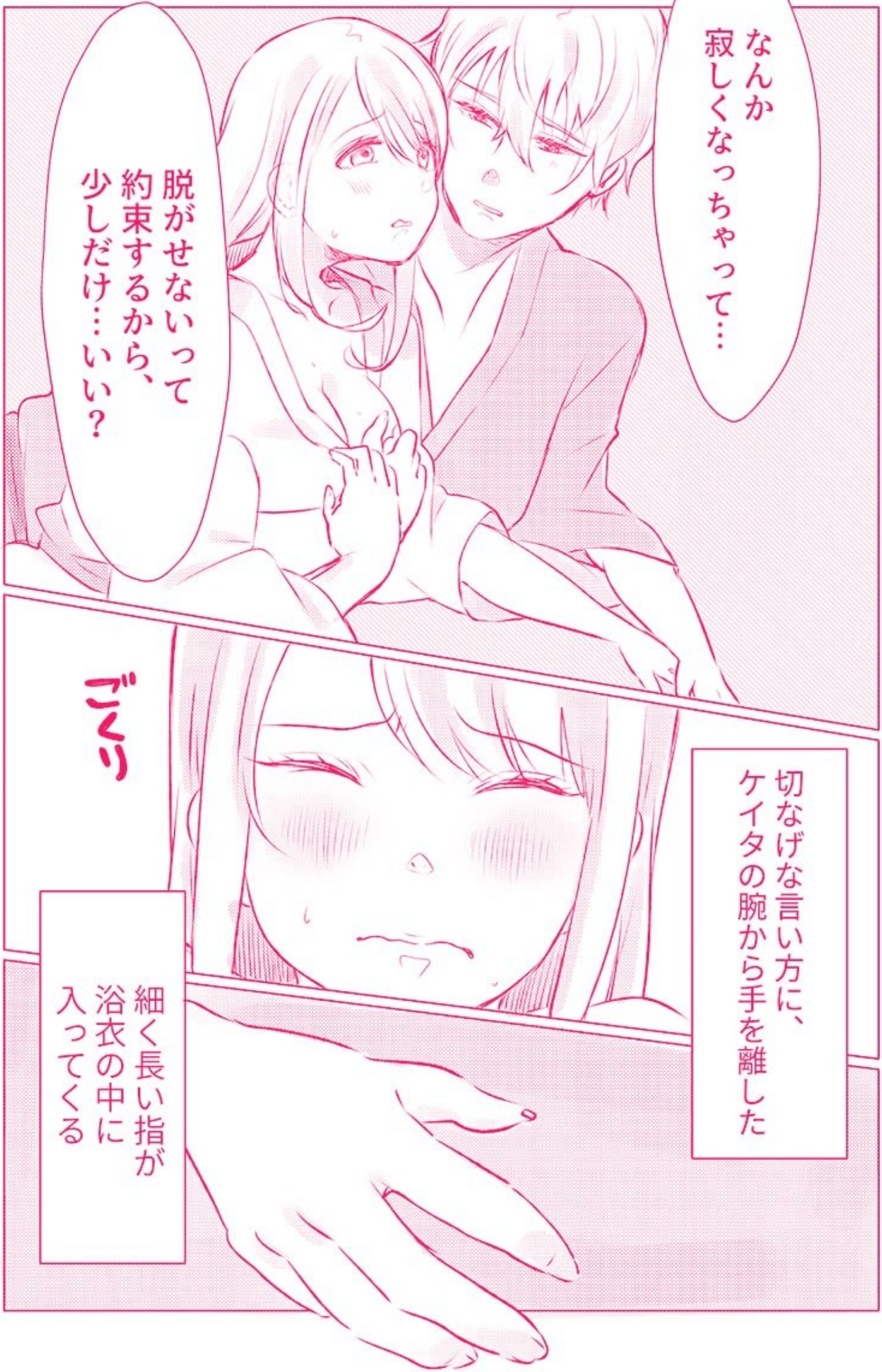

……
ドクドク
ドクドク
ドクドク
ドクドク
んっ
ドクドク
ドクドク
んんっ…
だめだ
恥ずかしすぎる
ふぅっ


抱きしめていい？
え…
ドキ
ドキ
ドキ
…っ！
ぎゅう
ドキ


あれがマイちゃんだったら
嫉妬してた
ゾクッ
きゅうう
じつは私も、
あの障子の先にいるのがケイタだったら…
ビクッ
ショックだった
ドキドキ


ズボ
ズボ
はー
はー
ズボ
ズボ
ズボ
ズボ
レナの上下する
頭の影が、
嫌でも目に入る
ズボ
ズボ
ズボ
ズボ


んんっ
もみ
ちゅ
もみ
やだ？
いやじゃない
でも
レナみたいに
そんな大胆なことは
できないよ…

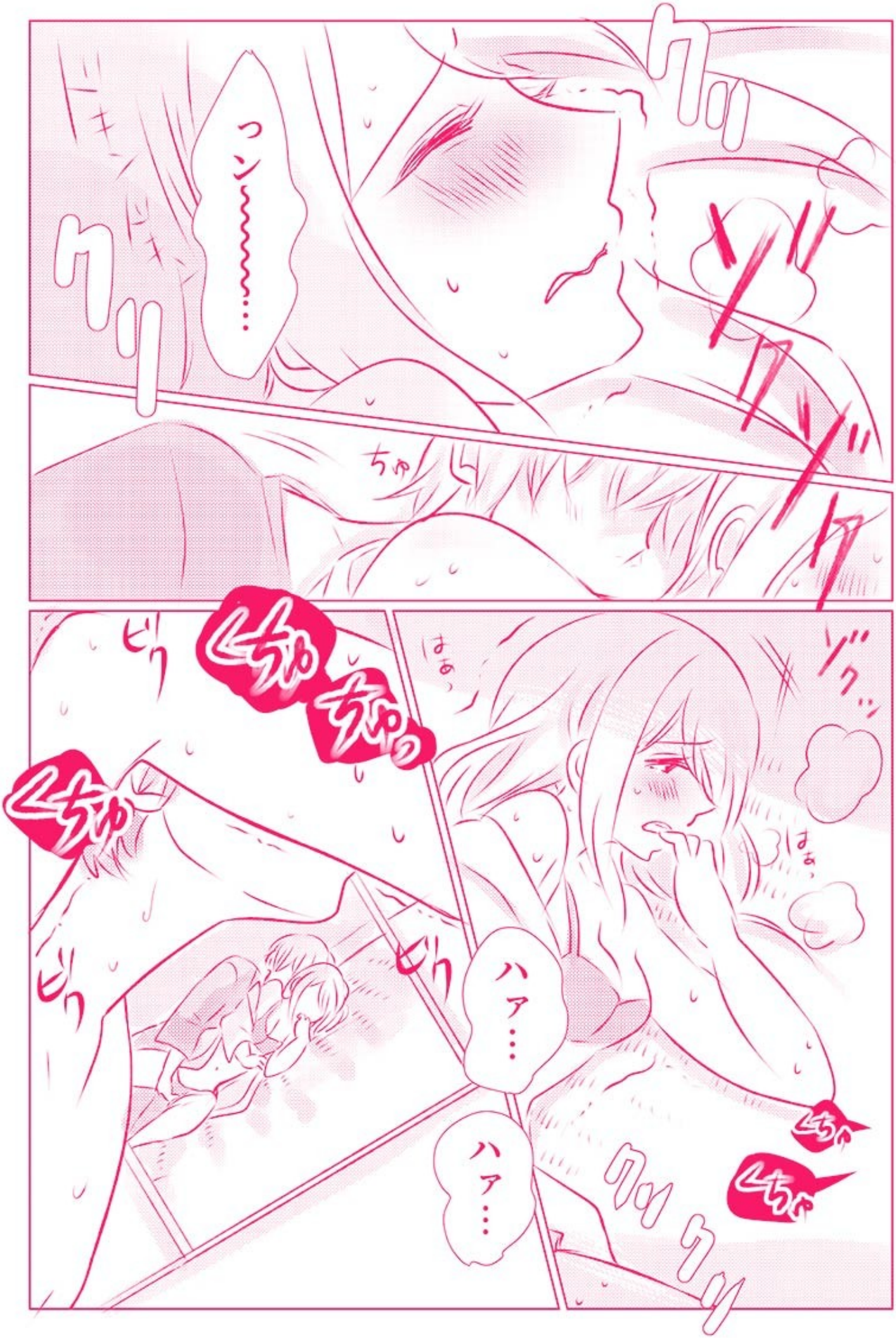

なんか
寂しくなっちゃって…
脱がせないって
約束するから、
少しだけ…いい？
ごくり
切なげな言い方に、
ケイタの腕から手を離した
細く長い指が
浴衣の中に
入ってくる

ブラジャーの上から
優しく胸を包み込む、
その温度が心地よい
はだけた浴衣の隙間から
足の付け根に伸びてくる
思わず力が入るが、
首筋に優しいキスをされて
ほだされてしまう
んっ

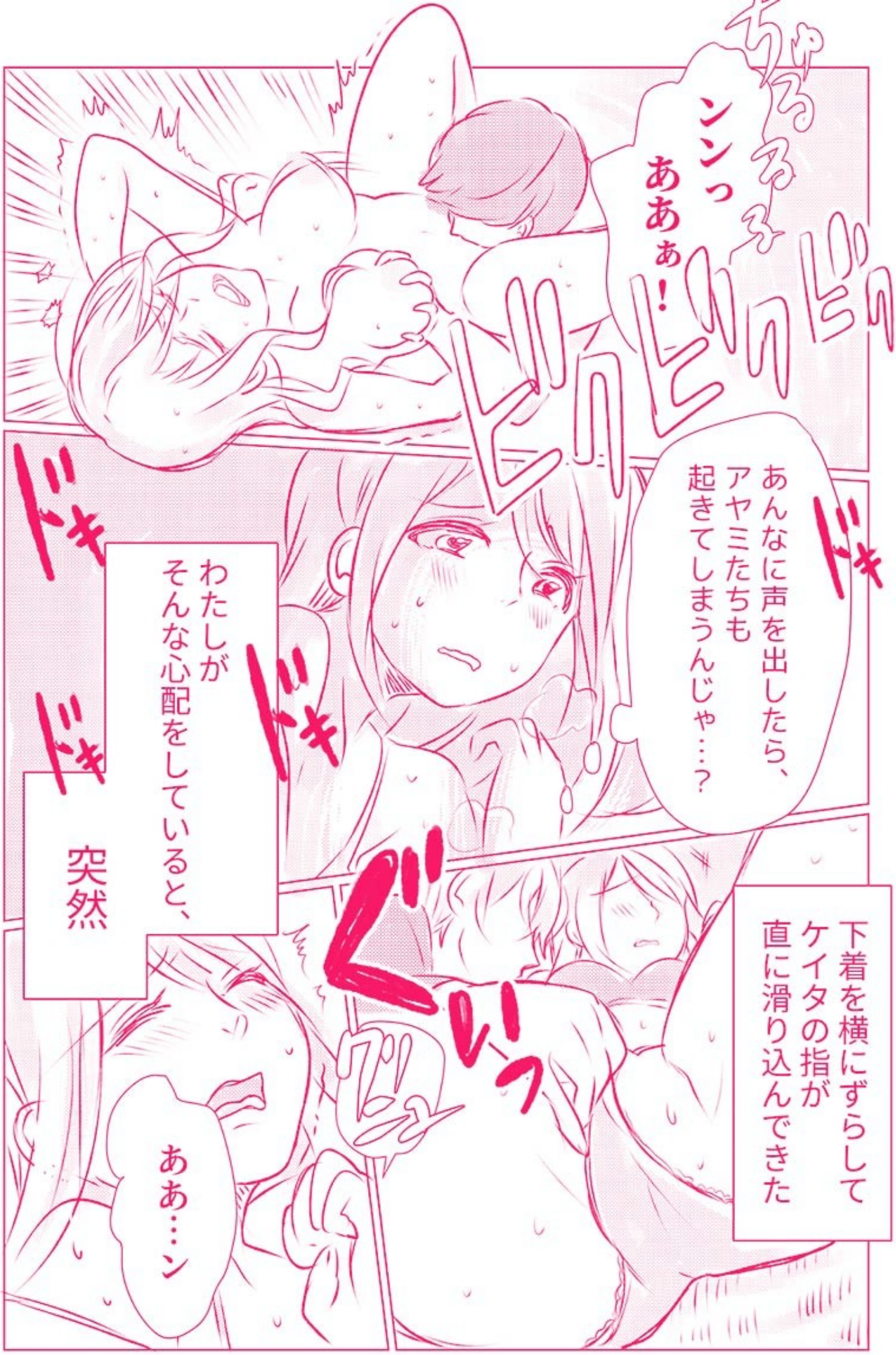
障子の向こうで、
2人が体勢を変えた
はぁ
はぁ
チュッ
びくびく
今度は、レナが
舐められているようだ
クチュ
はぁ
はぁ
ドキドキ
チュ
ルル
チュ
ルル
いやらしい音と、
レナの吐息が
聞こえる

2人の動きに合わせるように、
ケイタの指が下着の上から
割れ目をそっと撫でる…
はぁ
はぁ
はぁ
くりっ
ビクッ
ビクン
触れているのかいないのか
焦らすようなその触り方に、
足からは力が抜け、
しっとり濡れていく感覚がする
じわぁ

私の反応を
楽しむかのように…
ケイタは
ゆっくり優しく
突起の場所を
さぐるように撫でる
はぁ
はぁ


ンンンンン……
ちゅ
ビク
くちゅ
ちゅっ
くちゅ
ビク
ビク
はぁ
ゾクッ
はぁ
ハァ…
ハァ…
くちゅ
くちゅ

くちゅ
っあ…
っンあ
くちゅ
ビク
ビク
くちゅ
ビク
はぁ
はぁ
ドキ
ドキ
くちゅ
ビク
ンン…
くちゅ
ビク
は
は
くちゅ


ちゅるるる
ンンっ
ああぁ！
ビクビクっ
あんなに声を出したら、
アヤミたちも
起きてしまうんじゃ…？
ドキ
下着を横にずらして
ケイタの指が
直に滑り込んできた
ぐいっ
ドキ
わたしが
そんな心配をしていると、
ドキ
突然
ああ…ン

すごいよ…
ボソ
ドキ
自分でもわかる…
すごい濡れてる…
トロォ…
ぎゅっ

はぁっ
はぁっ
脱がさないって
言ったのに…
ぴちゃ
ぴちゃ
っ
…ン
ぴちゅ
ぴちゅ

ないよ
脱がして
ンンッ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

ビクン ビクン
くちゅ
くちゅ
くちゅ
確かに脱がしてはないけど…
…ああっ…ケイタのいじわる…
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
エロ
人のを見てこんなに濡れちゃったの？

っ…
はぁ…
いや、違う…
ケイタがこんなにしたくせに…
ドキン
ドキン
ドキン
ゴソ…
しかし反論する余裕はなかった

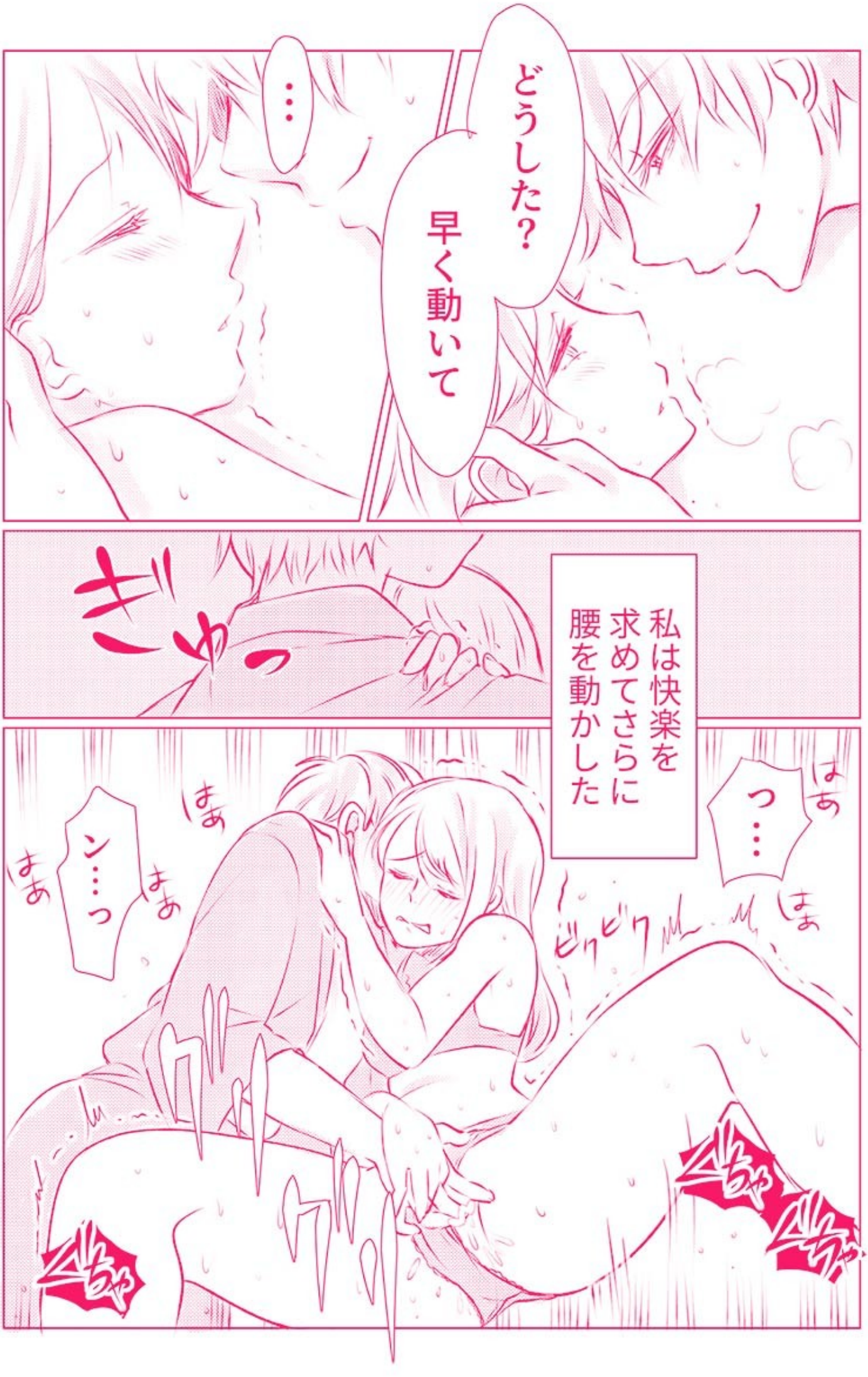
クニュ
クリュトロ～ン
ンンッ
…ん
ぴちゃ
ぴちゃ
ぬり
ぬり
ビリビリ
ビクン
クリュ
ビクン
クリュ
ビク
まあ
まあ
ビク
ビク
ビク
ううっ…
声…出ちゃうよ…

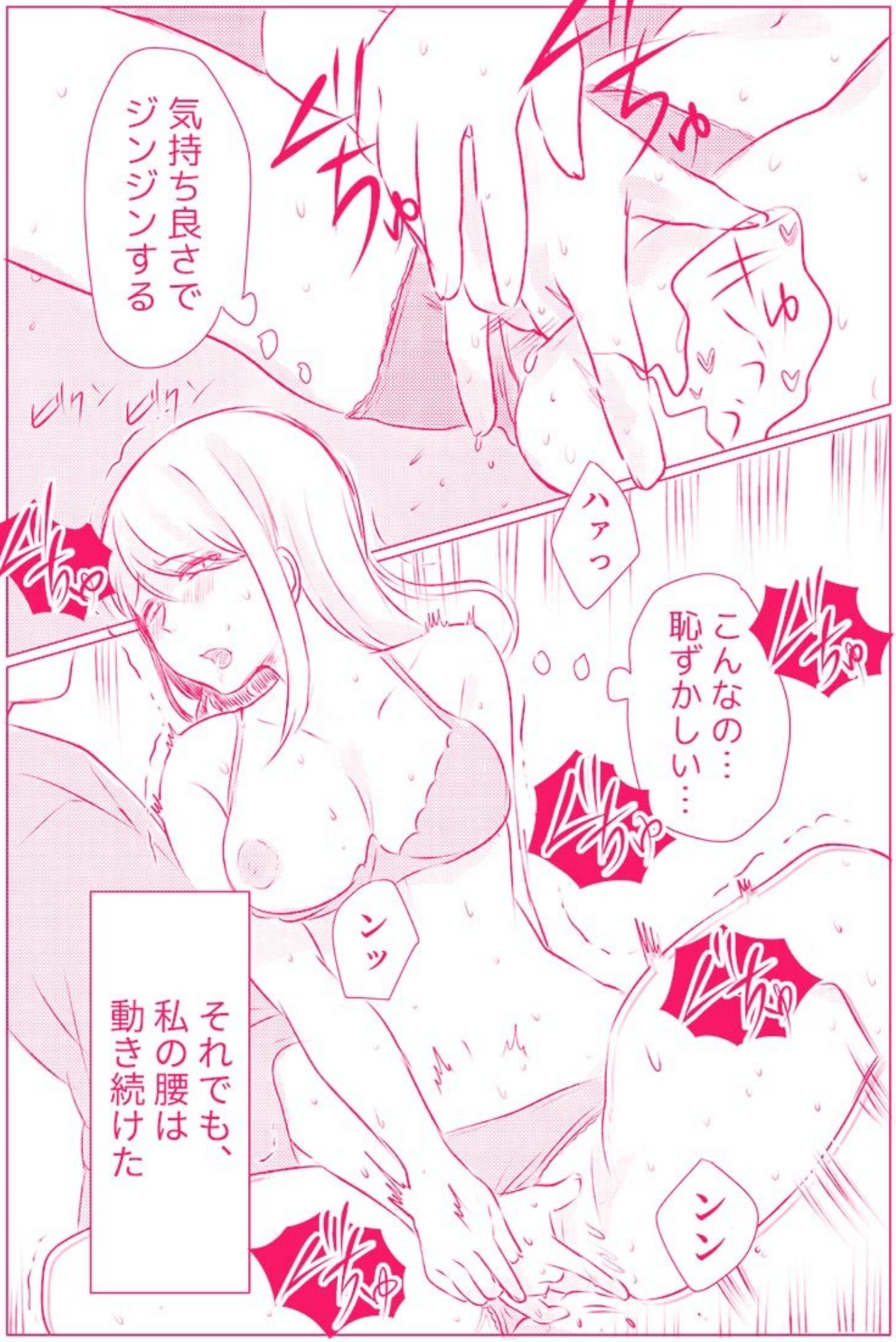
ムク…
！
ぽろん
あっ
はぁ
はぁ
はぁ

乳首を刺激されると、
気持ち良さで
頭が真っ白になった
っ…
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
クリクリ
もみ
もみ
もみ
押さえた手からは
力が抜け、
あ…っ
はぁ
はぁ
腰が自然に
動いてしまう
はぁ
はぁ
はぁ
ビクビク
どうしたの？
腰、動いてるよ？

声を抑えるので
必死だった
くちゅ
…んっ…
でも、
いじわるなケイタは
まだ私を
許してくれない
くちゅ
くちゅ
ピロン
…？

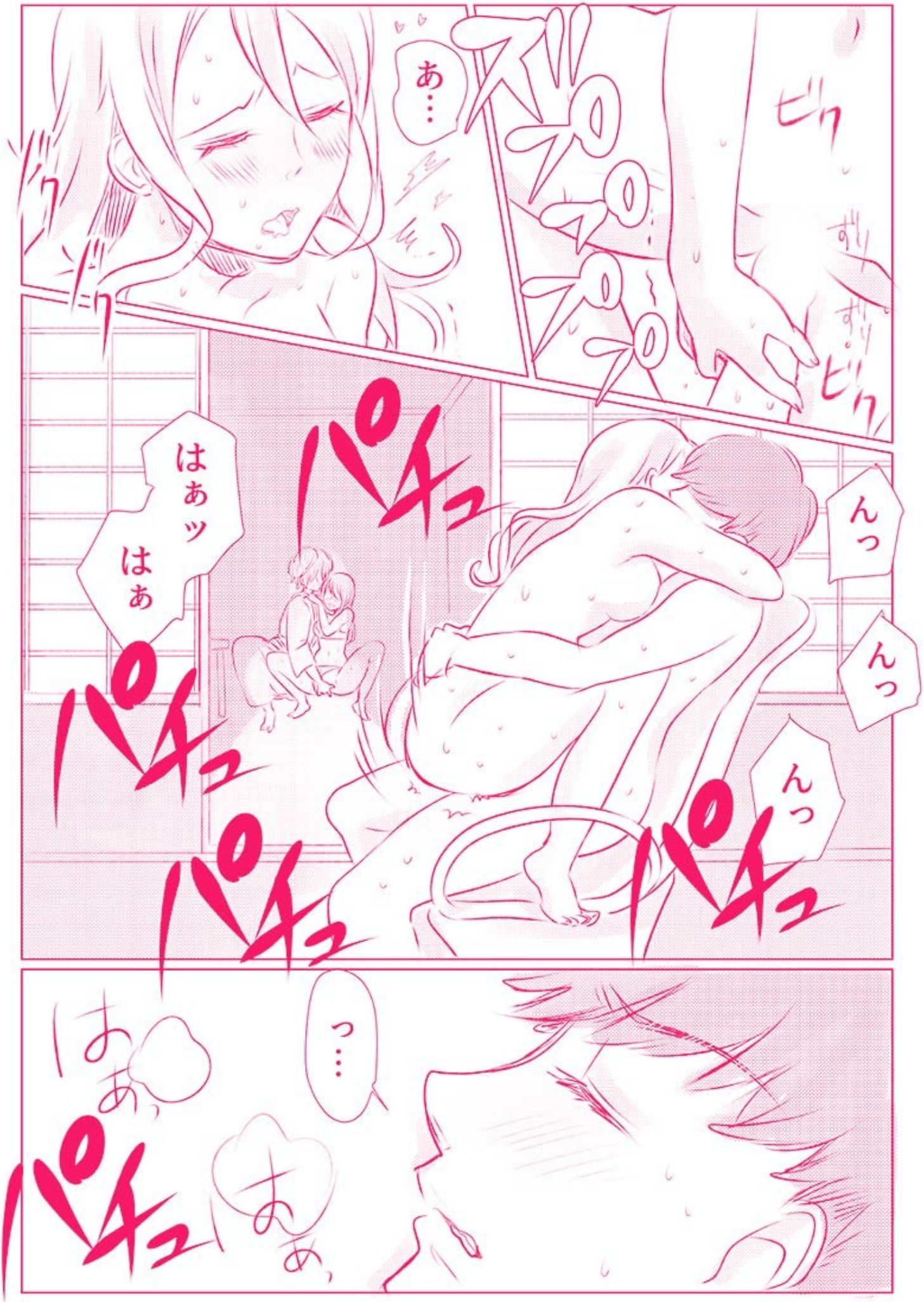
いじわる
ホラ…
はぁ
はぁ
自分で
気持ちいいところに
こすりつけて
！

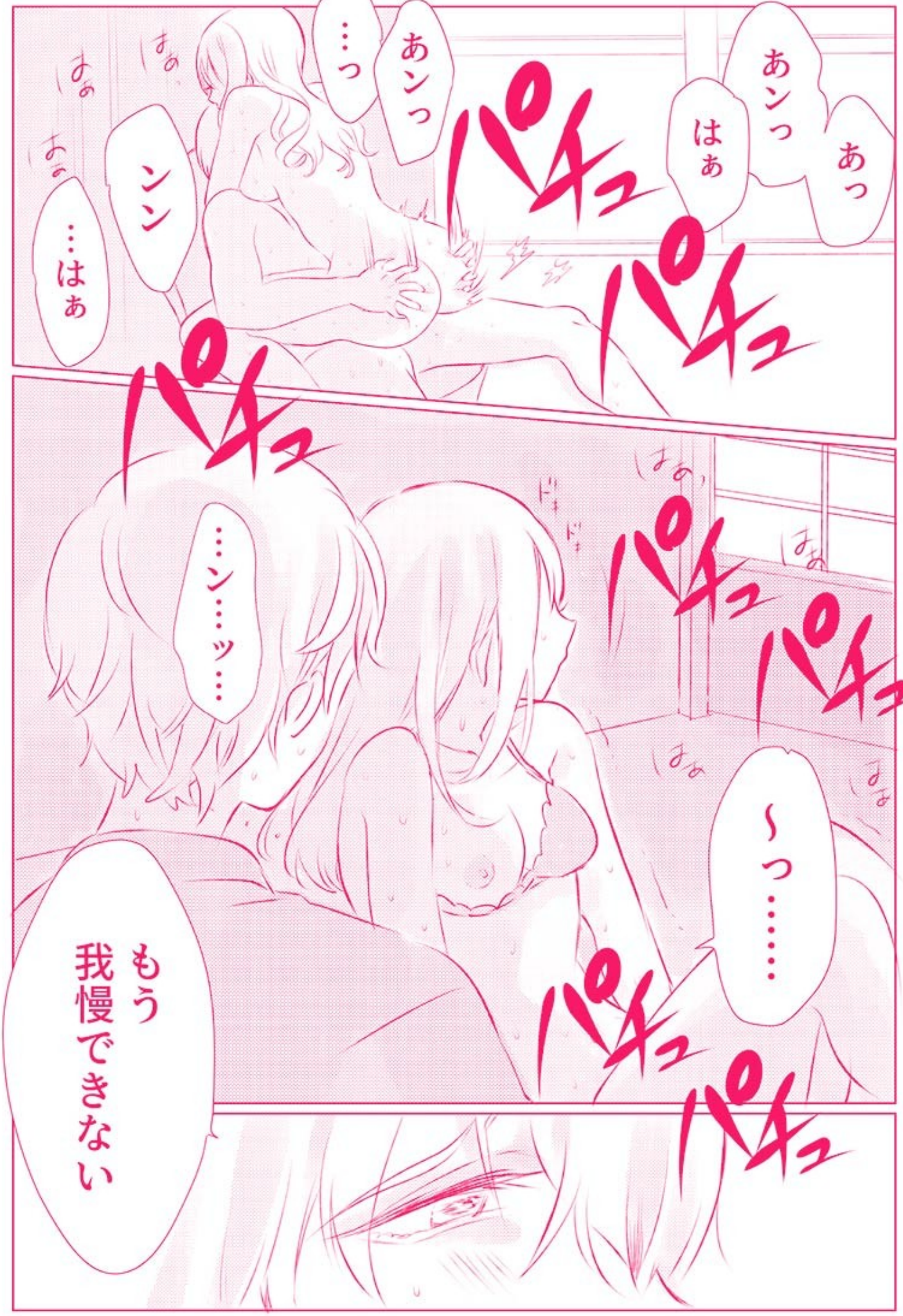

…
どうした？
早く動いて
ぎゅっ
私は快楽を
求めてさらに
腰を動かした
はあっ…
はぁ
ビクビク
ンっ…
はあ
はあ
はあ
ハァハァ
ハァハァ
ハァハァ


ぴちゃ
ぴちゃ
気持ち良さで
ジンジンする
ビクン ビクン
ハァっ
こんなの…
恥ずかしい…
ンッ
それでも、
私の腰は
動き続けた
ンン

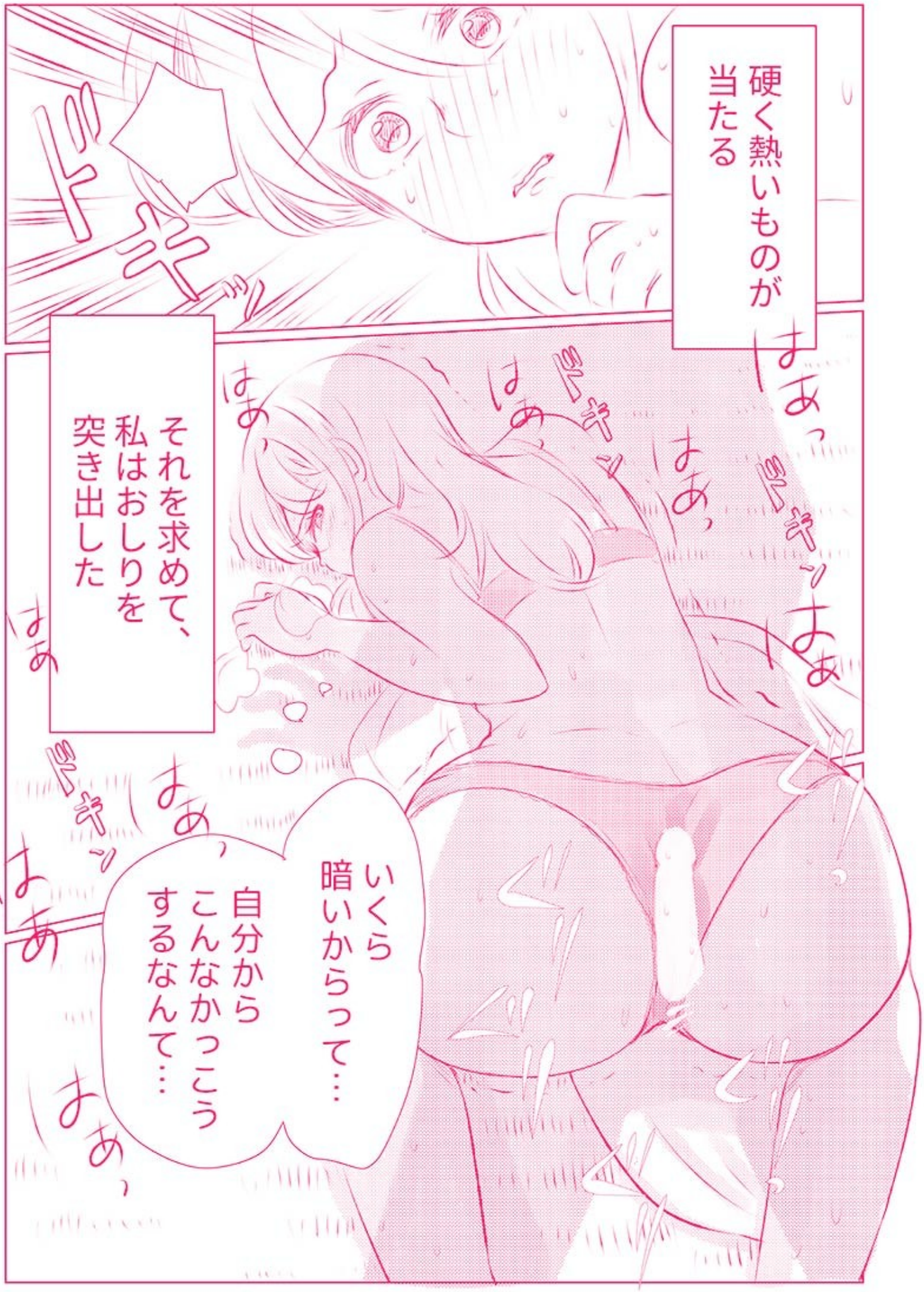
どうしちゃったんだろ…私…
ンン
はぁ、はぁ、
あンッ
変になっちゃった…
クチュ
ビクンッ
クチュクチュ
とろ～ん♥
頭では分かっていても、
ケイタの指に触って欲しくてたまらなかった
はぁ、はぁ、

ンっ
本当はもっと
奥まで触ってほしいのに、
はぁ
はぁ
ぴちゃ
ぴちゃ
ぴちゃ
はぁ
ケイタの指は
動いてくれない
ハァ…
ハァ…
ぴちゃぴちゃ
沈黙のなかで、
私だけが腰を
動かし続ける
んン…
ぴちゃぴちゃ

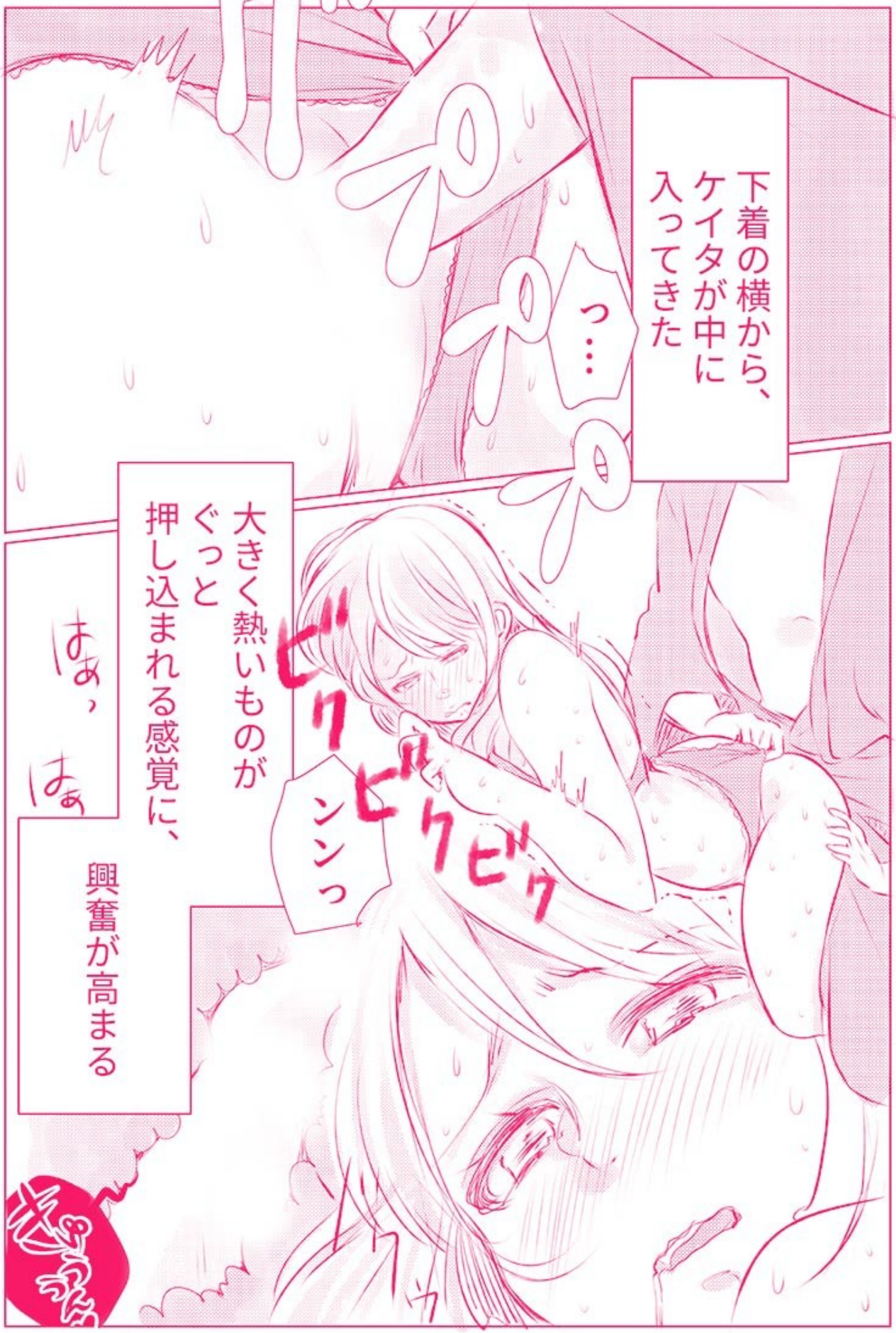

あ…
ビク
ずり
ずり
ビク
はぁッ
はぁ
パチュ
パチュ
パチュ
パチュ
パチュ
んっ
んっ
んっ
っ…
はぁ…
はぁ…
パチュ


あっ
あンっ
はぁ
パチュ
パチュ
あンっ
…っ
ンン
…はぁ
パチュ
パチュ
パチュ
パチュ
…ン…ッ…
ドドドド
パチュ
パチュ
パチュ
パチュ
〜っ……
もう
我慢できない

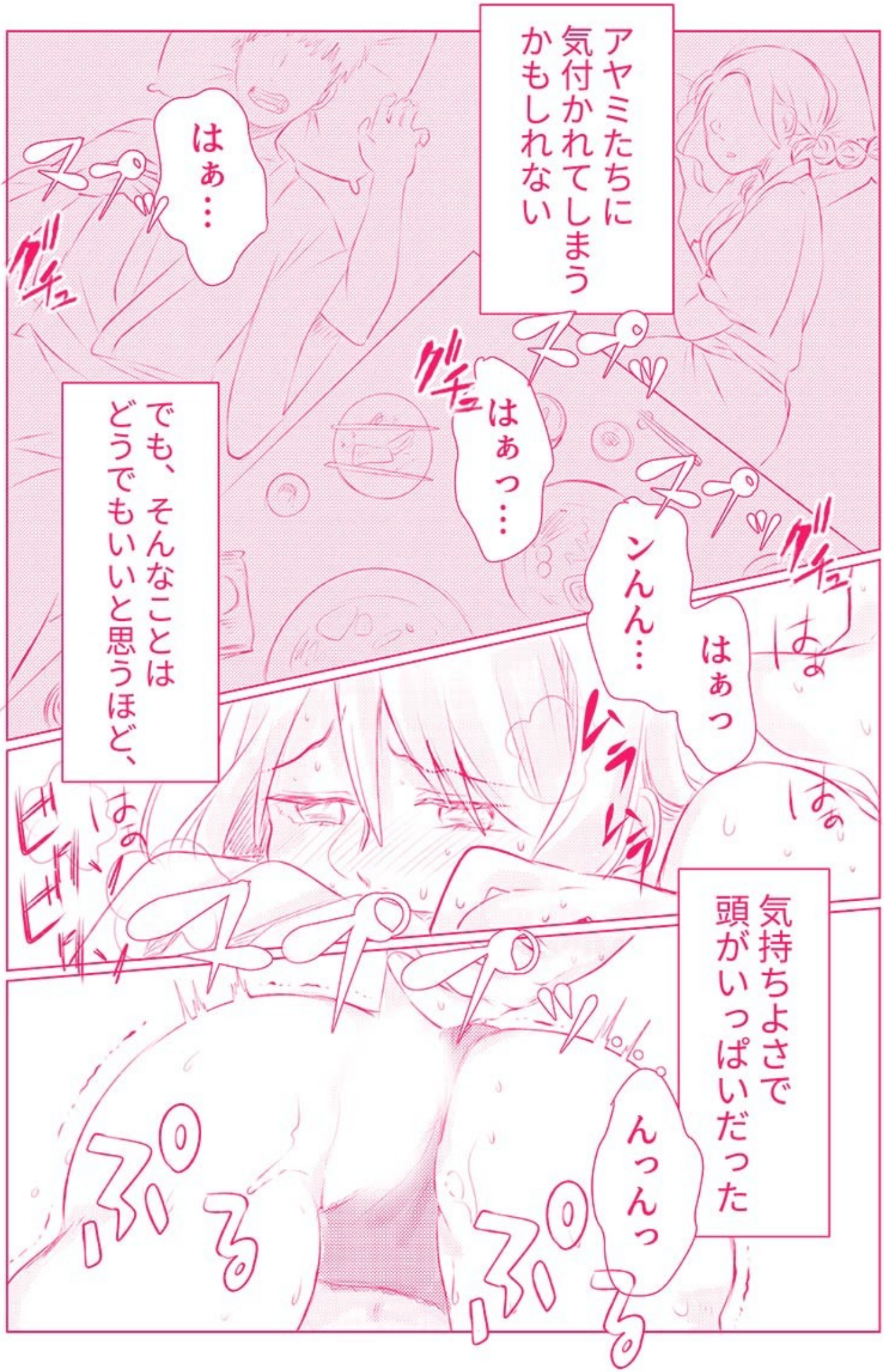
…？
ケイタは
私をうつ伏せにして、
ゴロ…
私の上に乗った


硬く熱いものが
当たる
それを求めて、
私はおしりを
突き出した
いくら
暗いからって…
自分から
こんなかっこう
するなんて…
はあ
ドキン

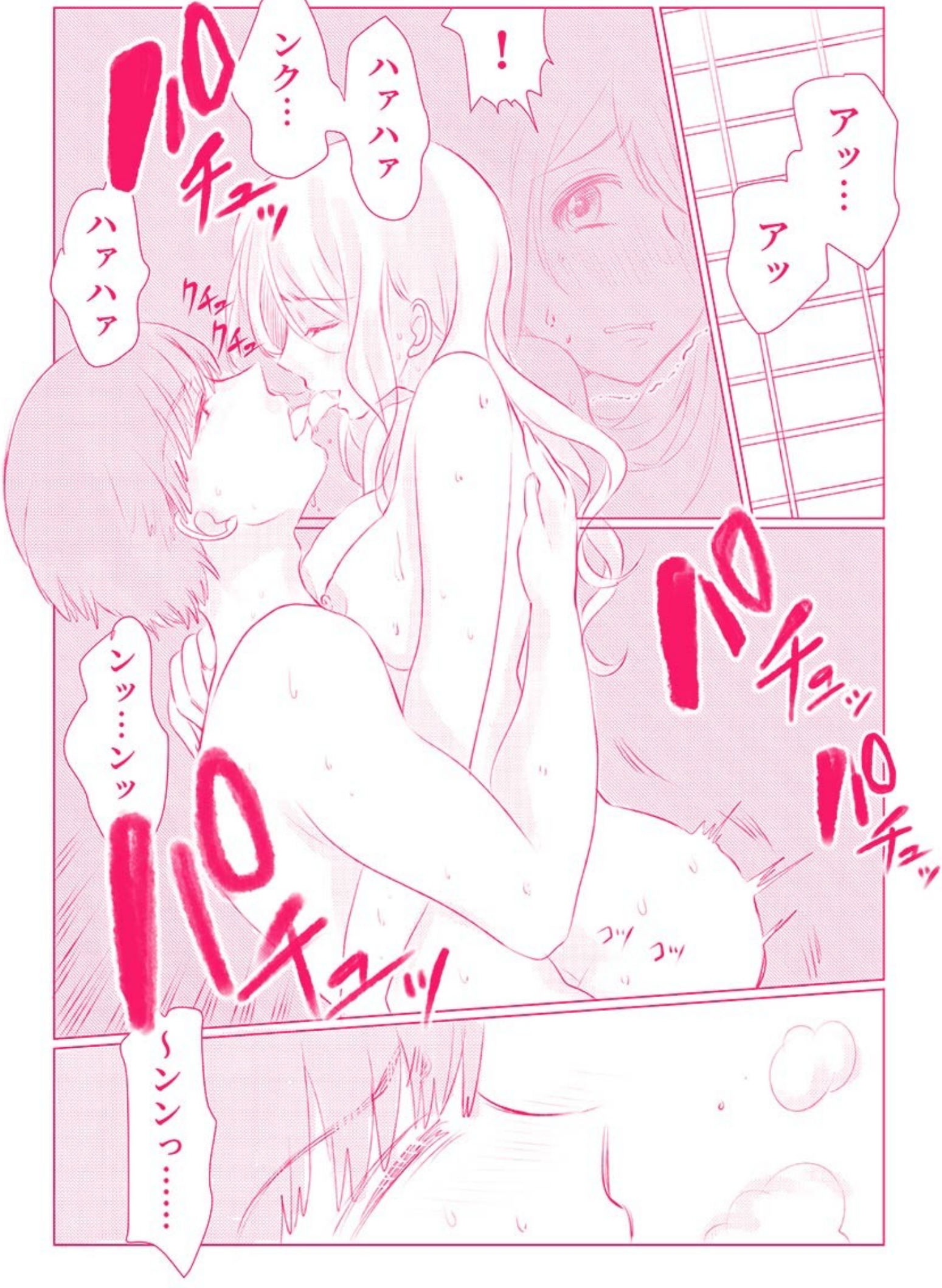
恥ずかしい格好
でも、
早く
ほしい
おあっ
おあ
おあ
おあ
おあ
おあ

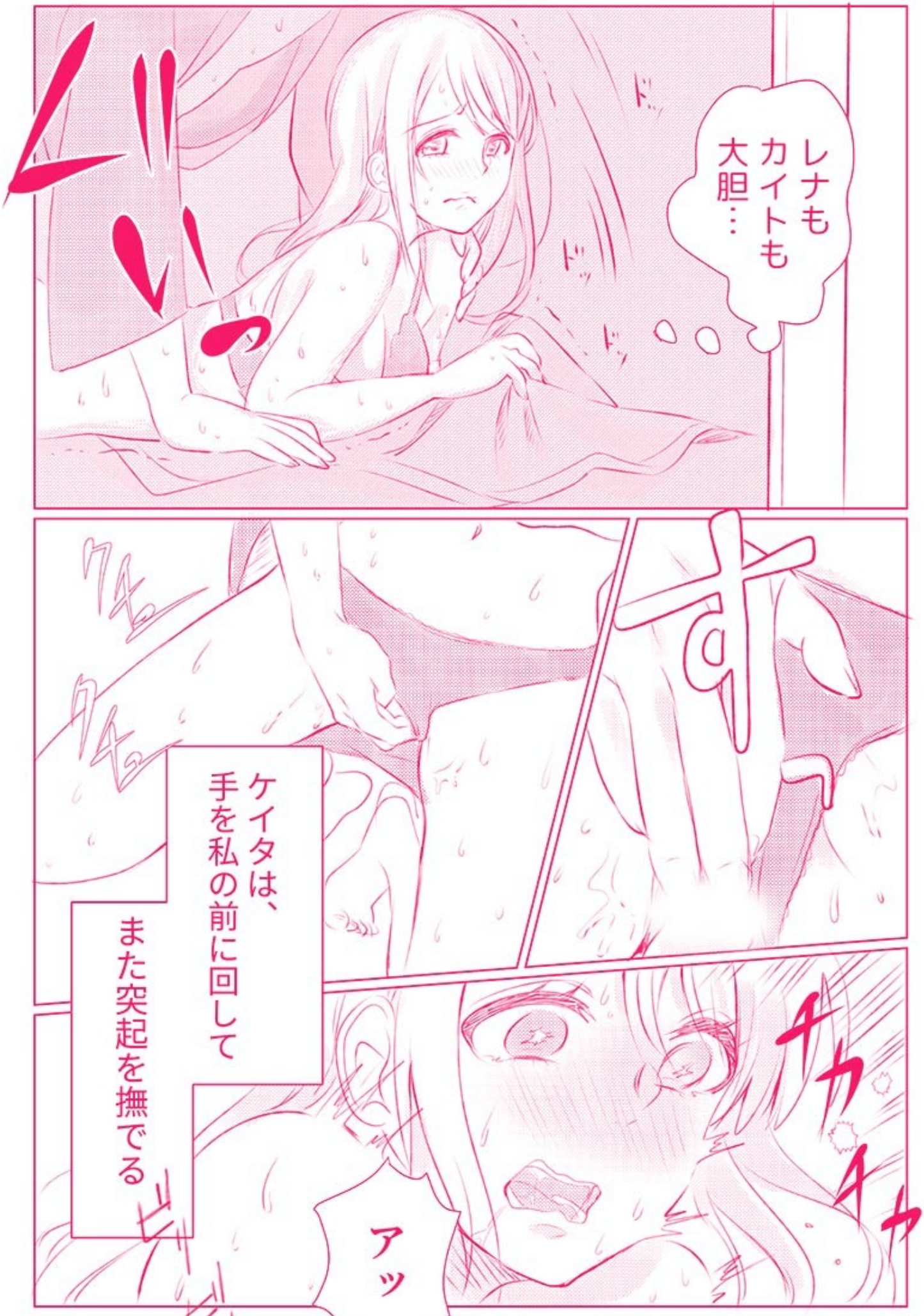

下着の横から、
ケイタが中に
入ってきた
っ…
ビクビクビク
ンンっ
大きく熱いものが
ぐっと
押し込まれる感覚に、
興奮が高まる
はぁ、
はぁ

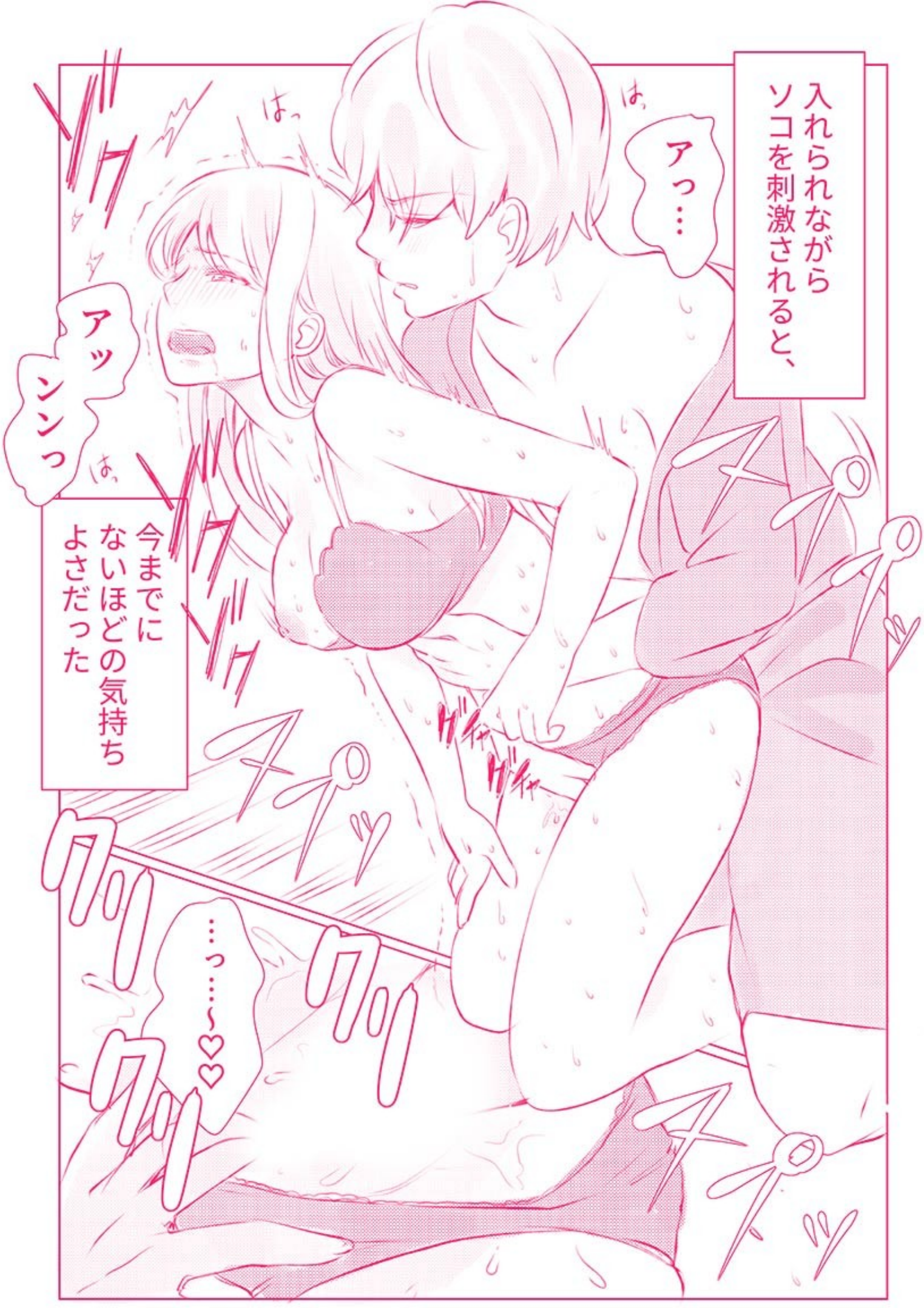
ああん…
だめだ…
声我慢しなきゃ…
はあ
はあ
はあ
グチュ
グチュ
グチュ
っ
うっ
ぎゅっ
んンっ
浴衣に口を
押しつけて
声が漏れないように
しても、
ケイタが動くたび、
繋がった部分は
いやらしい
音を立てた


アヤミたちに
気付かれてしまう
かもしれない
はぁ…
グチュ
はぁっ…
グチュ
んんん…
はぁっ
グチュ
でも、そんなことは
どうでもいいと思うほど、
気持ちよさで
頭がいっぱいだった
んっんっ

バレないように
しようとしてるのか、
ケイタは
ゆっくり
ねっとりと動く
きもちい…
ンっ

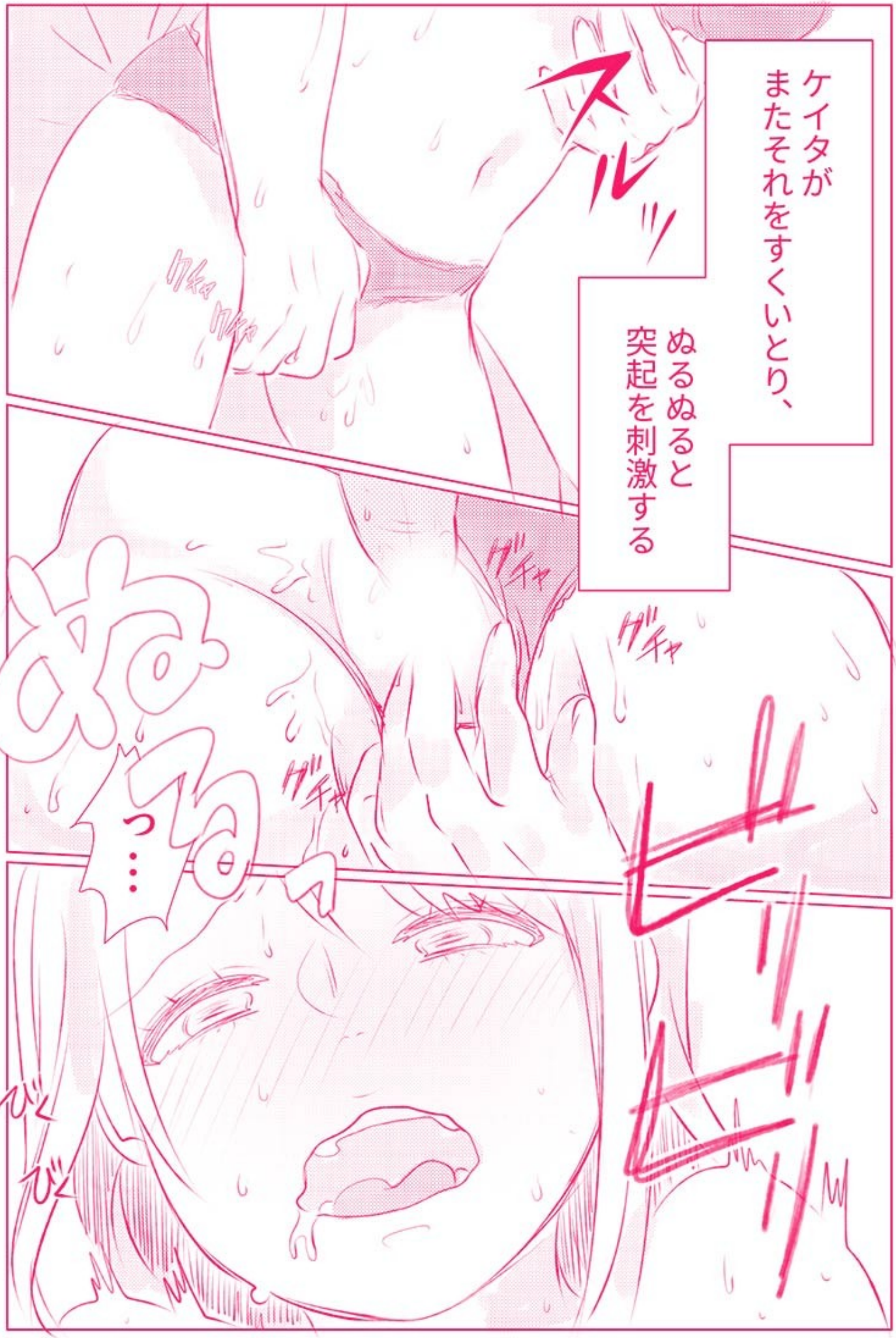

アッ…
アッ
！
ハァハァ
ンク…
チュッ
ハァハァ
クチュ
クチュ
チュッ
チュッ
チュッ
チュッ
ンッ…ンッ
コッ
コッ
～ンンっ……

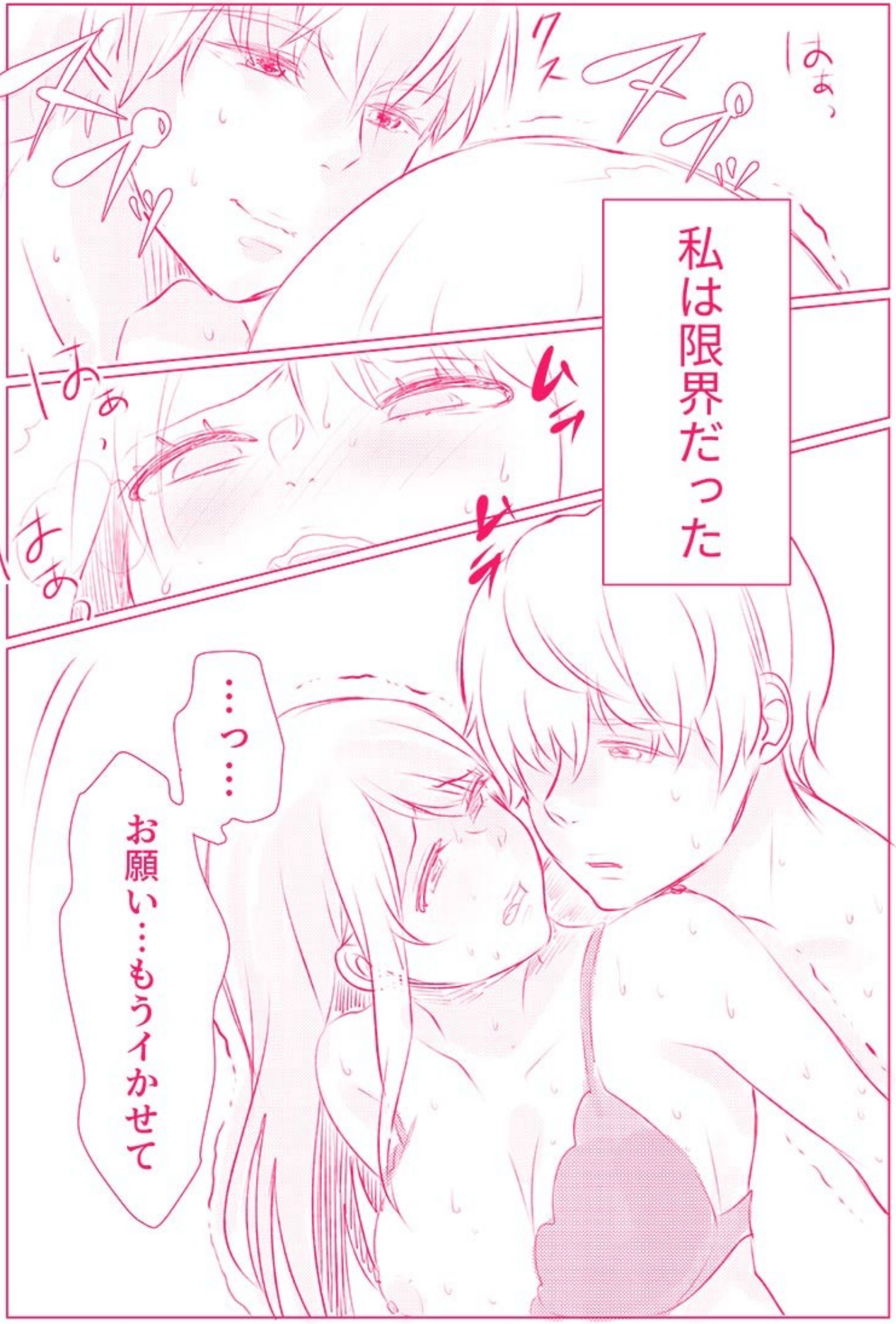

レナも
カイトも
大胆…
ケイタは、
手を私の前に回して
また突起を撫でる
アッ

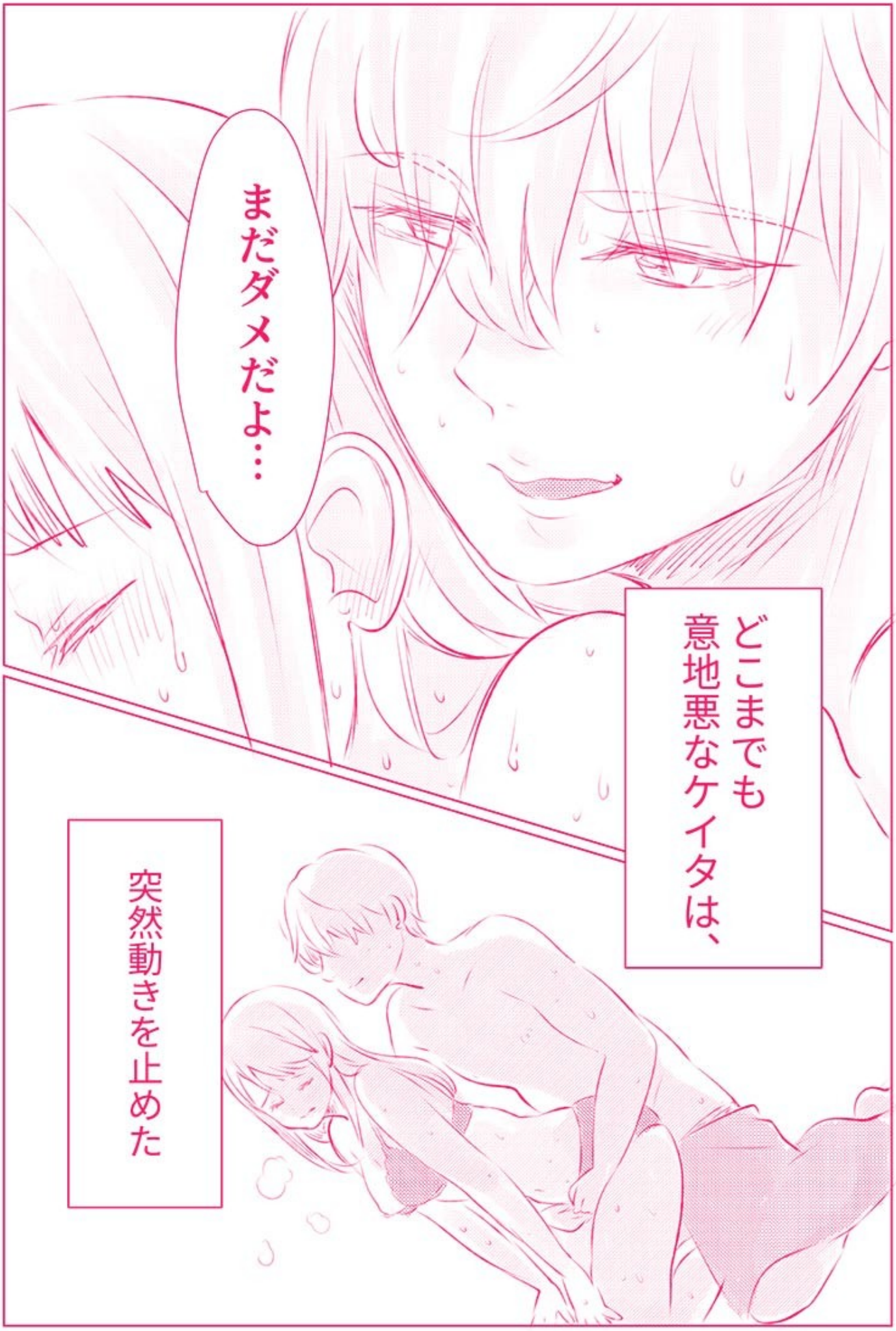

入れられながら
ソコを刺激されると、
はっ
アっ…
はっ
アッ
ンンっ
今までに
ないほどの気持ち
よさだった
…っ…~♡

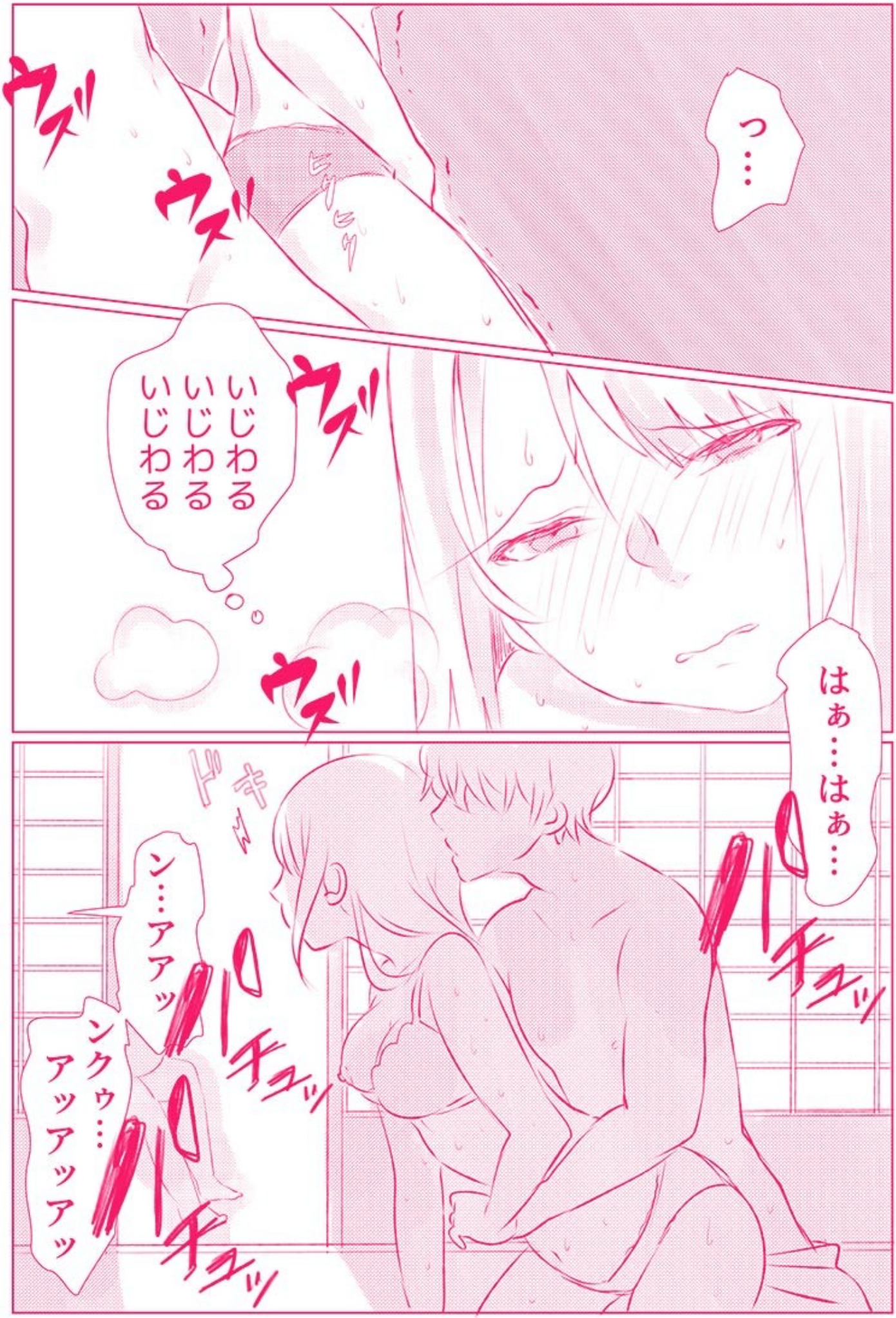
ハァ…ハァッ…
アッアッアッ
アッ…ンンンっ
はぁ
んっ
はぁッ
はっ
アッアッ…ンク

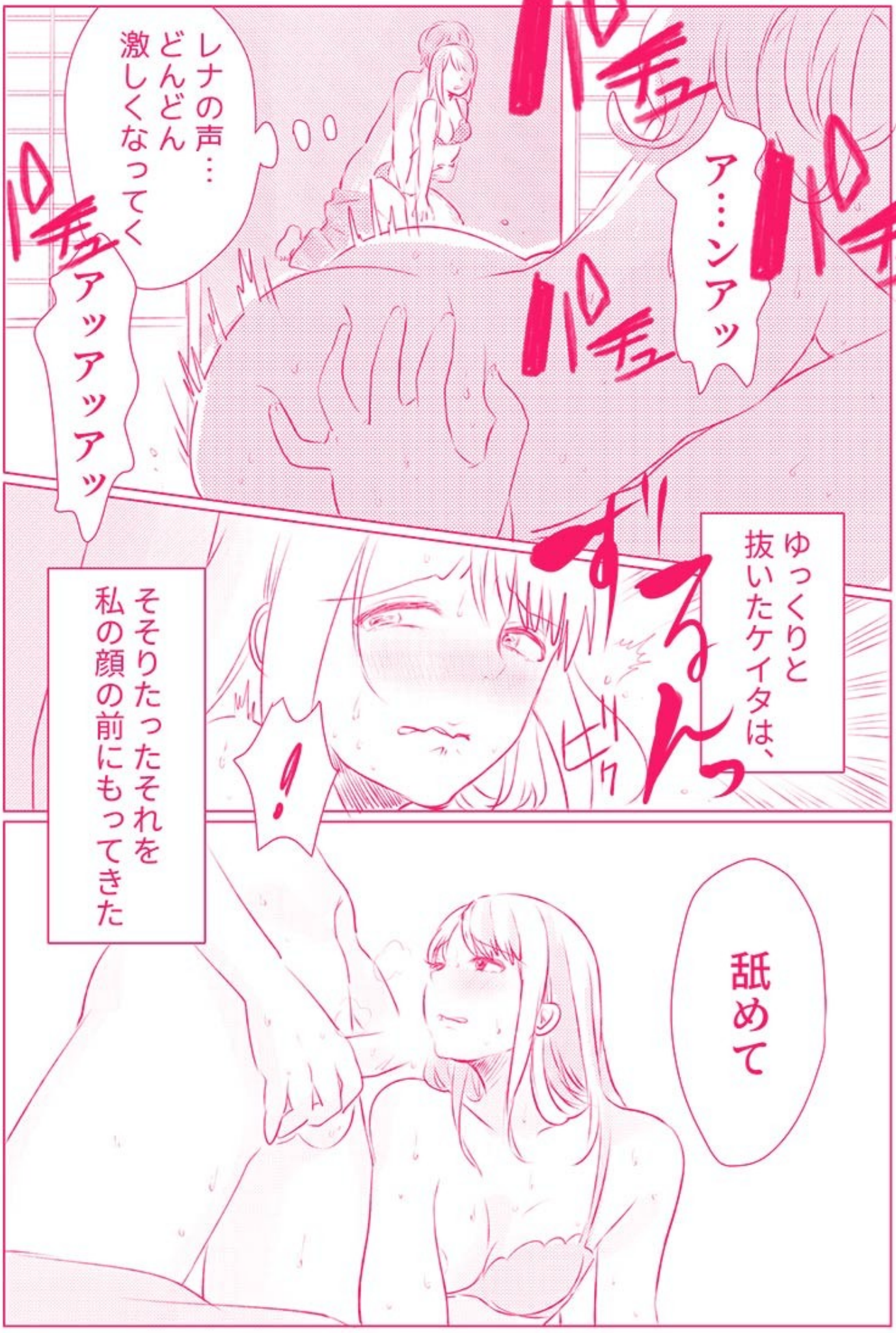
レナみたいに
感じたい…
ンッンッ…アン
ゆっくりしか
動いてくれない
もっと、激しく
動いて欲しいのに
アッアッアッ
焦らされて
私の奥からは
どんどん
水が溢れてきた
はぁ
はぁ
はぁ
ポタポタ

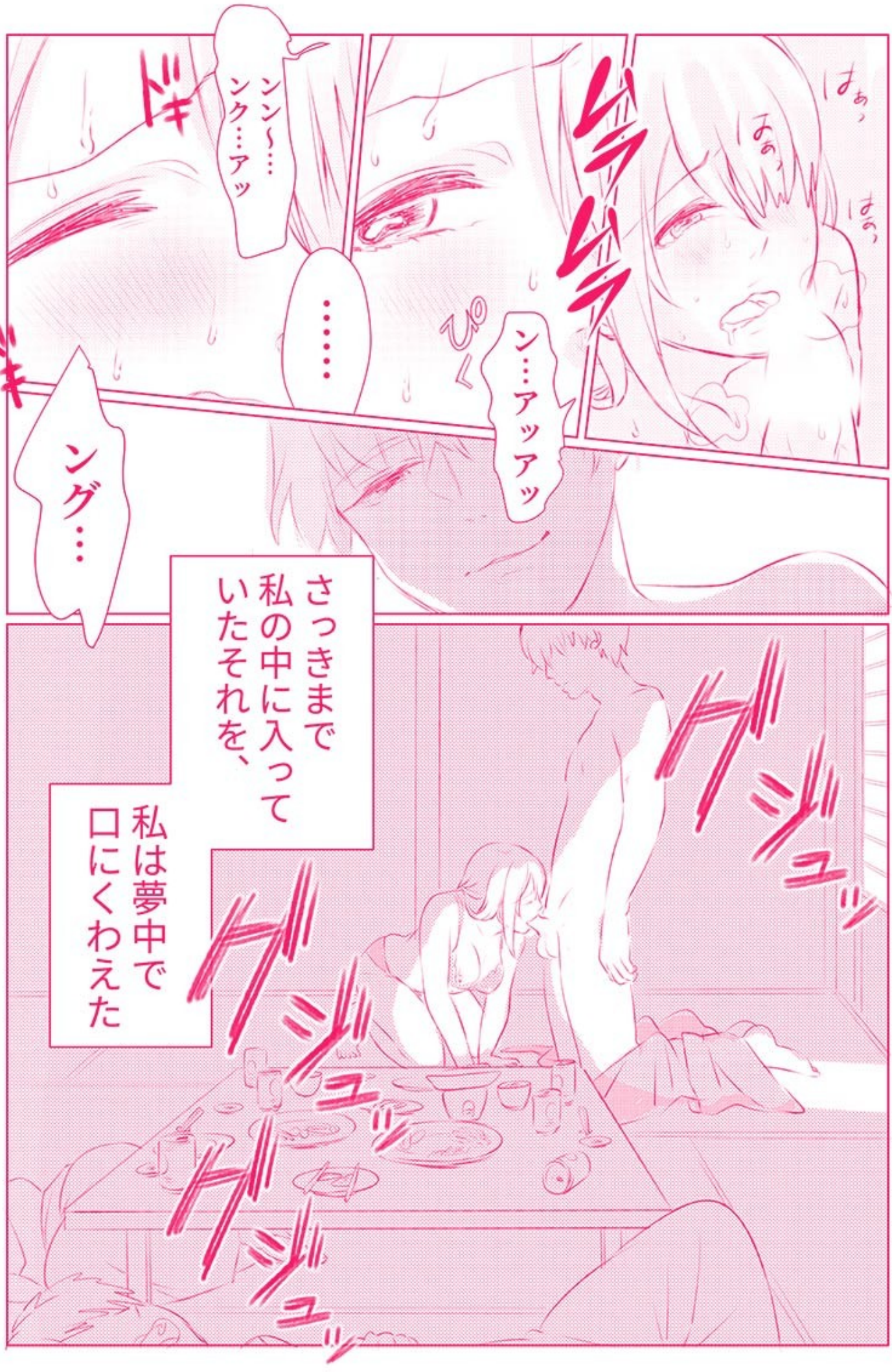

ケイタが
またそれをすくいとり、
ぬるぬると
突起を刺激する
スル〃
ヌルヌル
グチャ
グチャ
グチャ
っ…
びくびく


はぁ、
クスー
私は限界だった
はぁ、
はぁ、
ハァ
ハァ
…っ…
お願い…もうイかせて

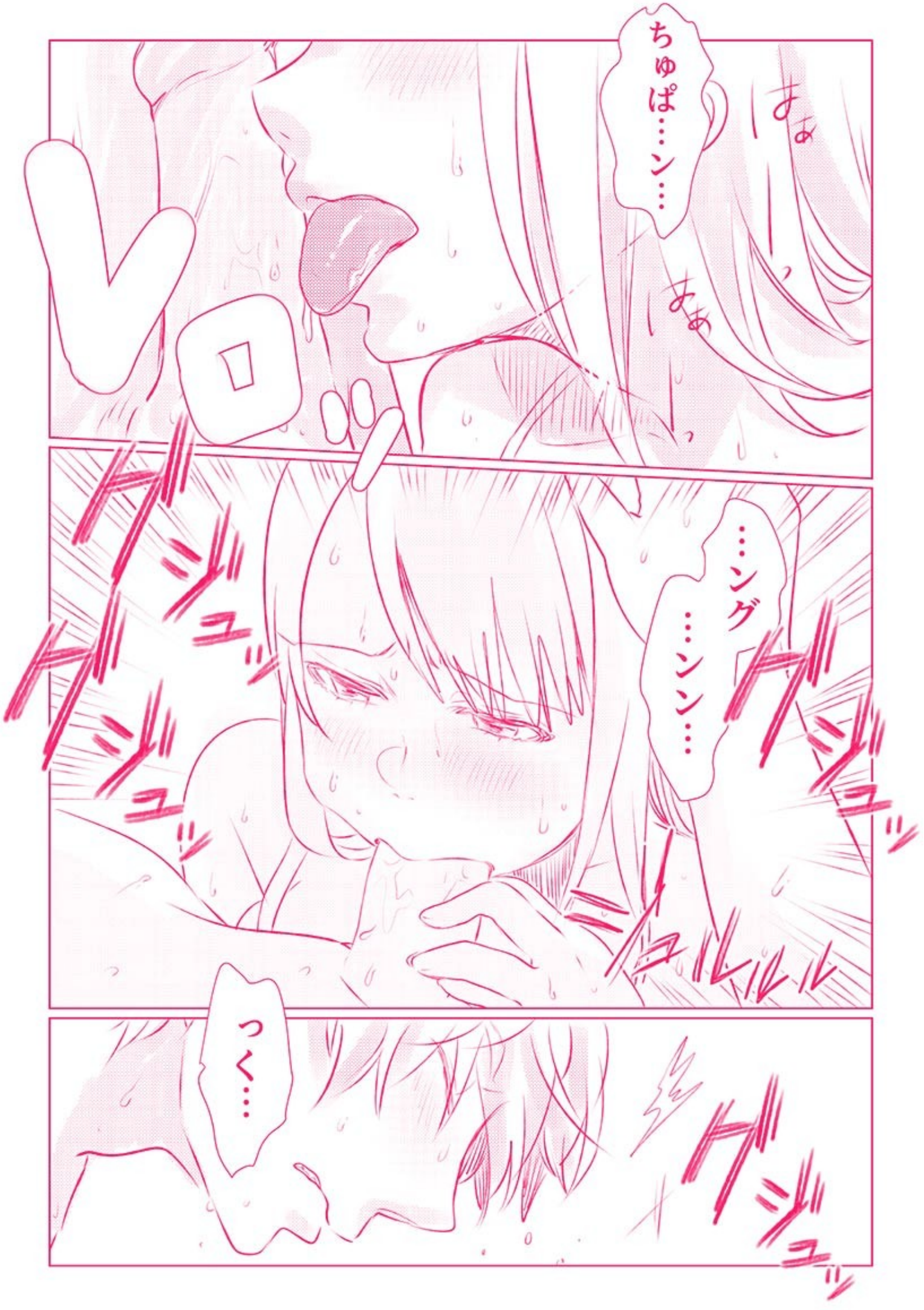

まだダメだよ…
どこまでも
意地悪なケイタは、
突然動きを止めた


っ…
ヒクヒク
ウズ
ウズ
いじわる
いじわる
いじわる
ウズ
ウズ
はぁ…はぁ…
チュッ
ドキ
ン…アアッ
チュッ
ンクゥ…
アッアッアッ
チュッ

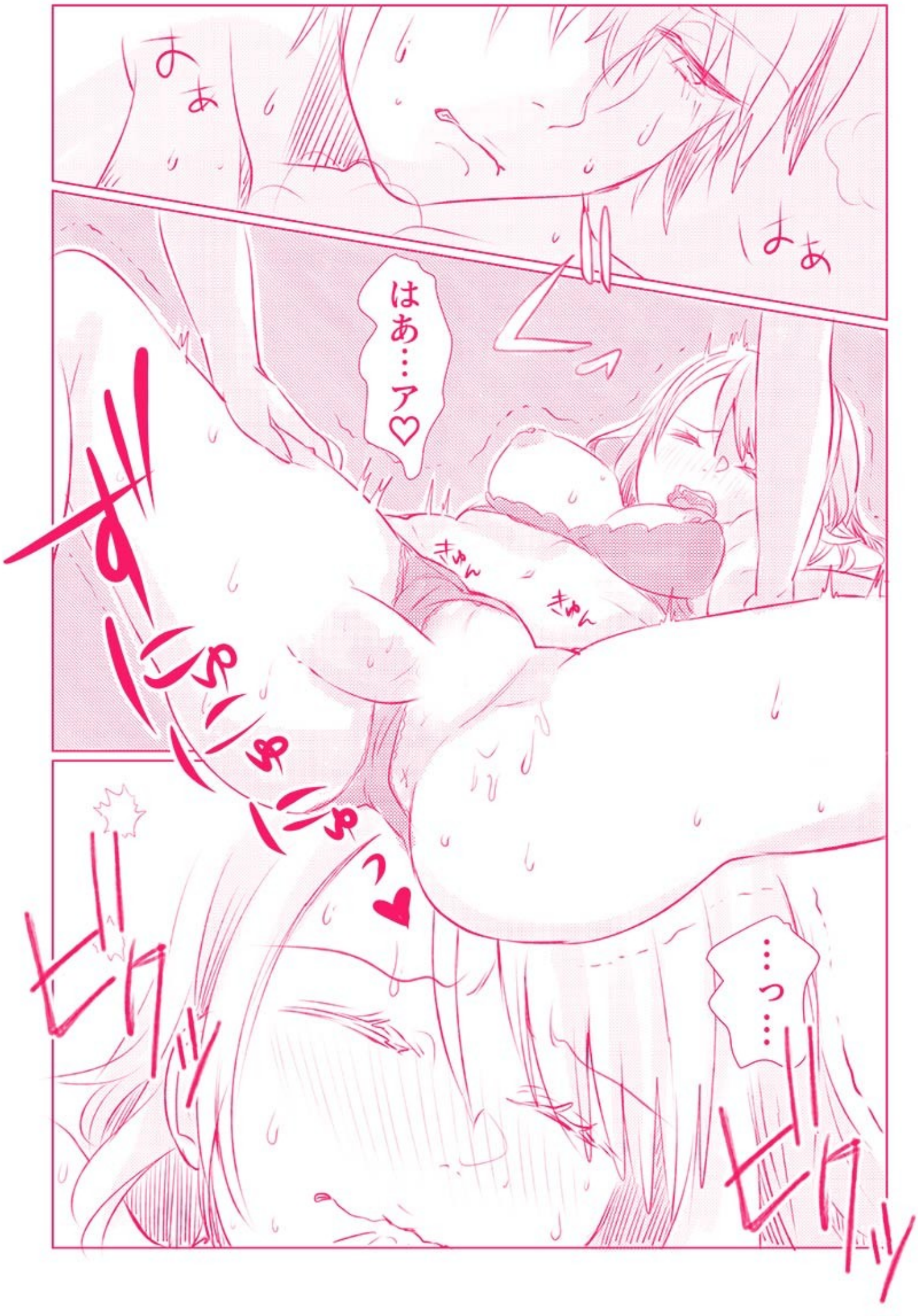

パチュ
パチュ
パチュ
ア…シアッ
レナの声…
どんどん
激しくなってく
パチュ
アッアッアッ
ゆっくりと
抜いたケイタは、
ずるん
そそりたったそれを
私の顔の前にもってきた
！
舐めて


はぁっ
はぁっ
はぁっ
ムラムラ
ン…アッアッ
ひく
……
ドキ
ンン～…
ンク…アッ
ドキ
ング…
さっきまで
私の中に入って
いたそれを、
私は夢中で
口にくわえた
ジュッ
ジュッ
ジュッ
ジュッ

自分でも
思ってもみなかったほど、
大胆になっていた
ンっ…ハ…ン…ッ
苦しそうな
ケイタの表情が、
私を
さらに興奮させた
ンン

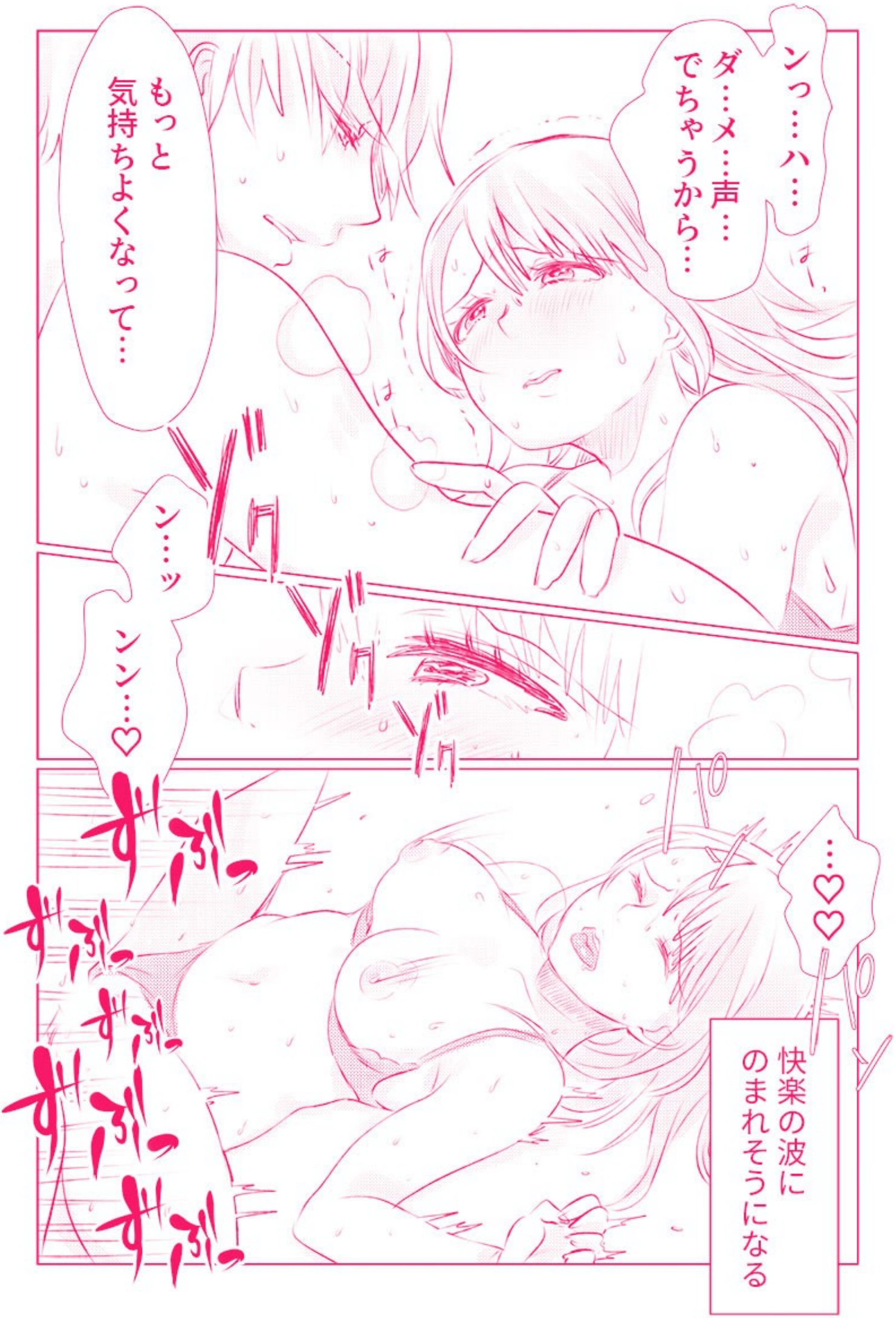

ちゅぱ…ン…
はぁ
はぁ
…シグ…ンン…
つく…

ちゅぱっ
ン…
そのまま、
私の身体を抱えて
横たわらせた
そっと


はあ
はあ
はあ…ア♡
きゅん
きゅん
ずぶぶぶぶぶっ♥
ヒクヒク
…っ…
ヒクヒク

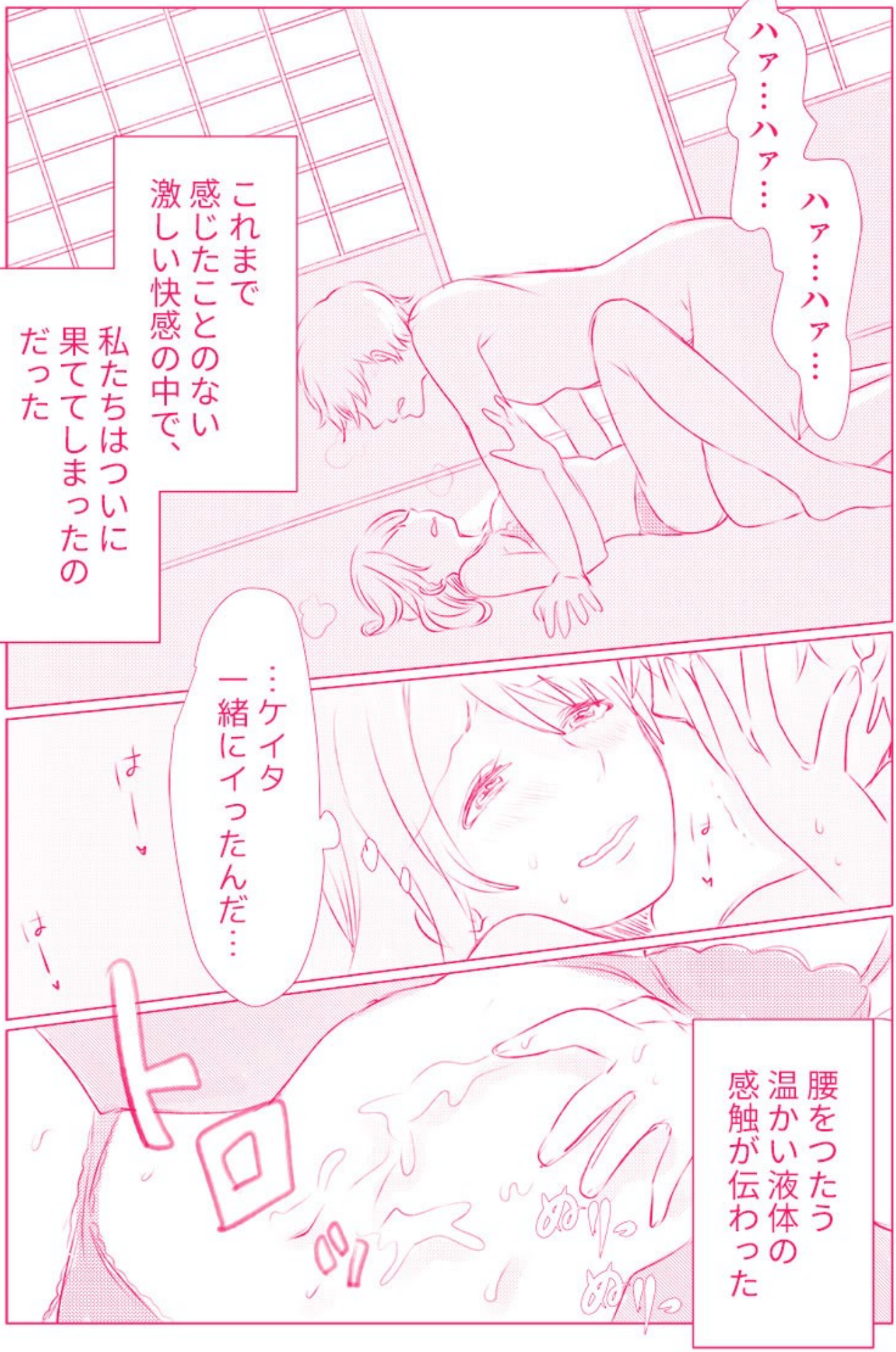
ぬゅん。
ぬゅん。
ヒクヒク
ヒクヒク
声…
がまんできる？
入れただけなのに…
身体がビクビク
しちゃう…
はぁ
はぁ
ムリ無理
自信ない…

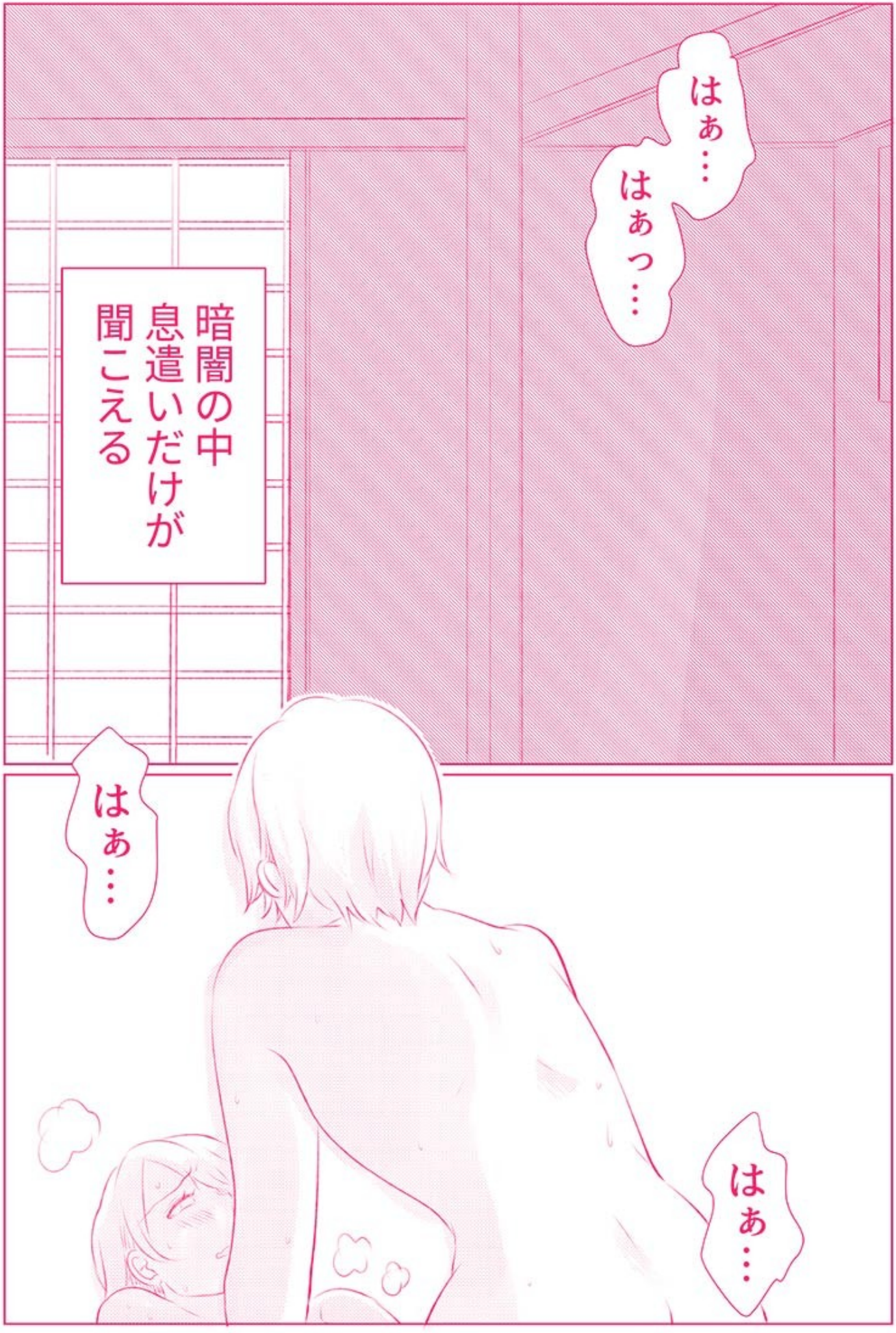
ずずず…
激しい快感に
突き上げられ
必死に声を我慢する
すごっ
ア!?
ビクビク
アッ…シ
は、
は、
ずぶっ
ずぶっ
ンン…
は、
ケイタは
どんどん激しく
動く
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ

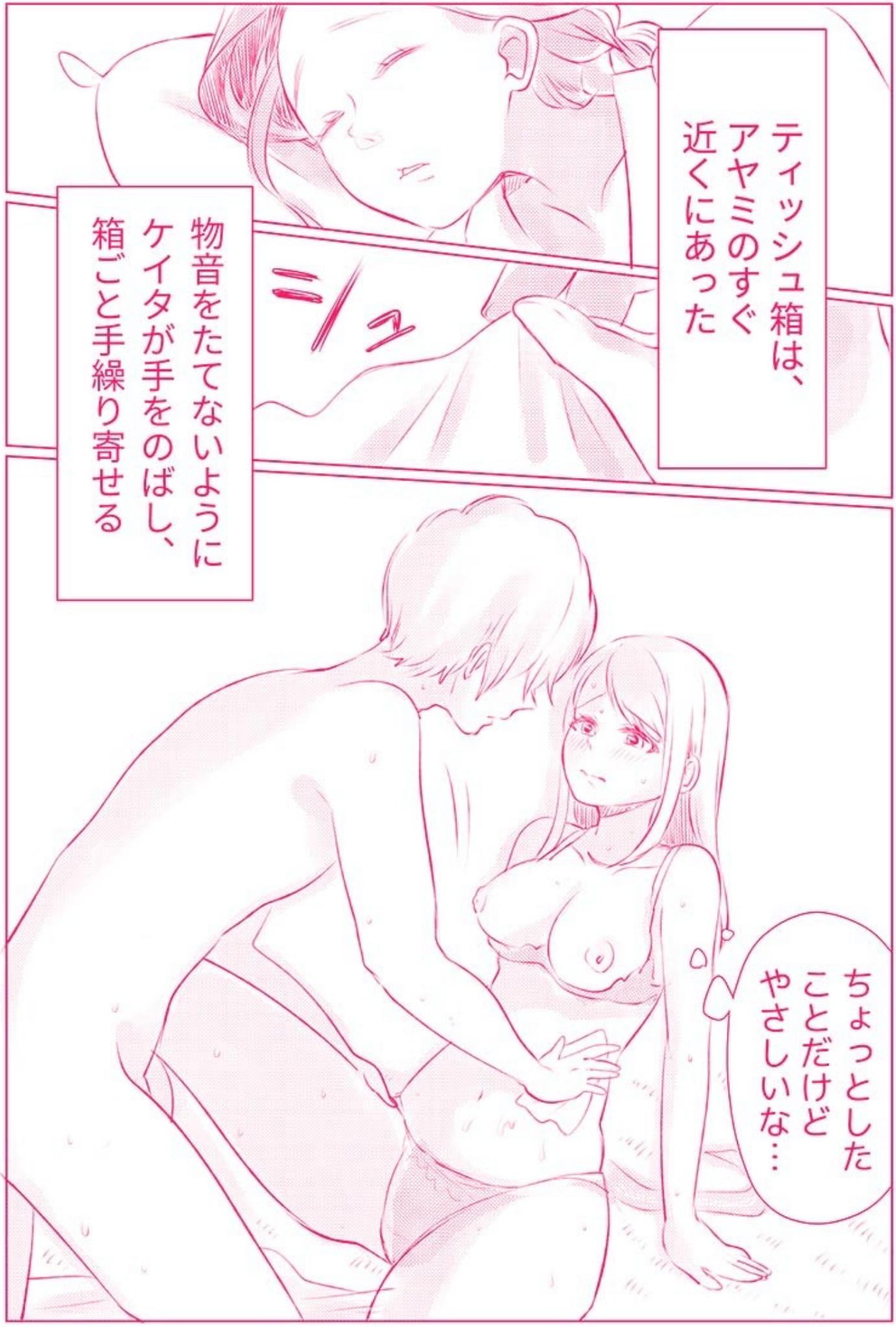

ンっ…ハ…
ダ…メ…声…
でちゃうから…
はー
はー
もっと
気持ちよくなって…
ン…ッ
ン…♡
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
ずぶっ
…♡♡
快楽の波に
のまれそうになる

コッ
コッ
シっ…
ンっ…♡
ッンっ…
ヌゅっ

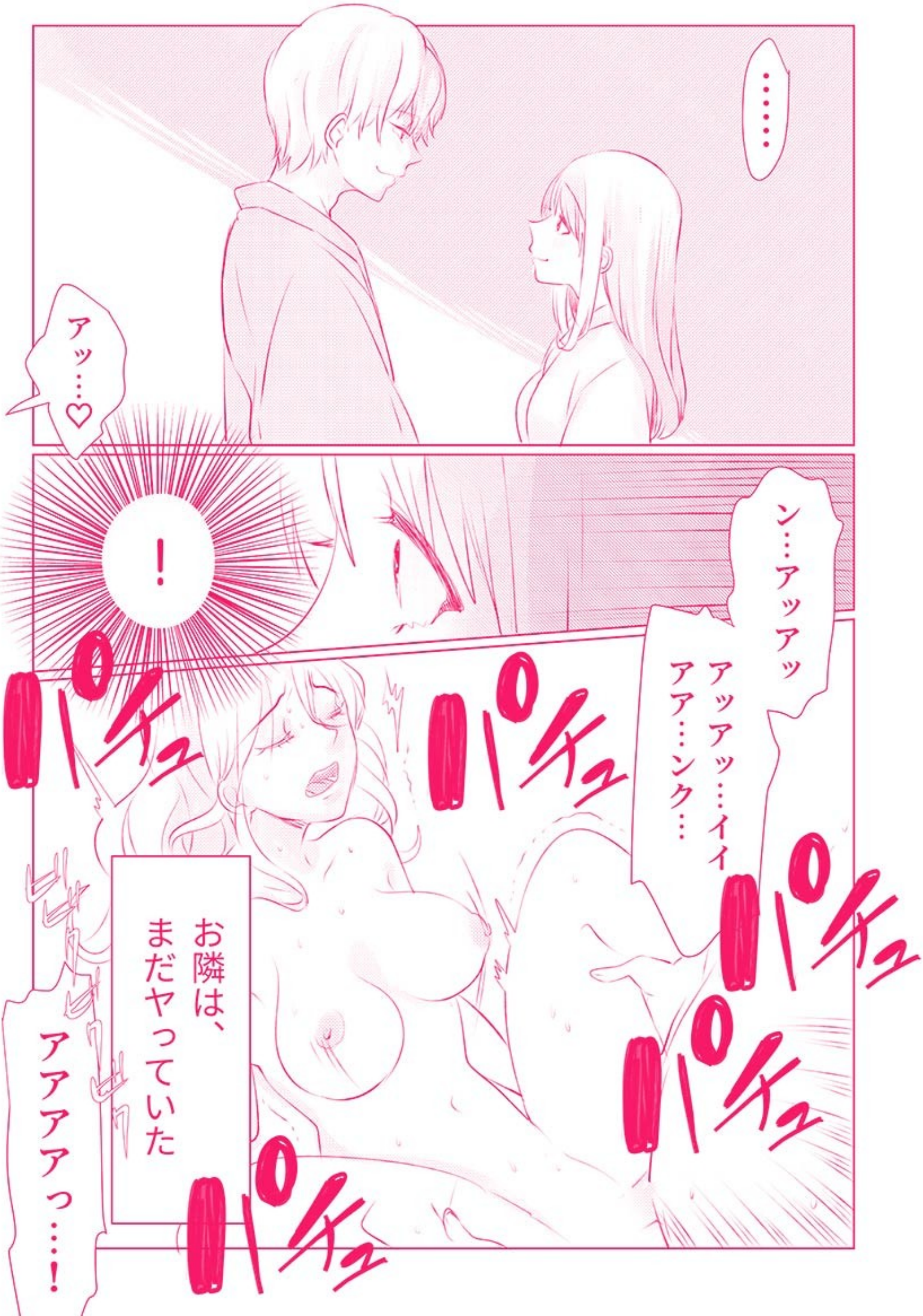
すりすり
すりすり
すりすり
すりすり
ンンッ♡
ンア…ッ♡
イく…
イっちゃう…
はぁ♥
あっ♥
コッ
コッ
ビクビクビク
ガチャガチャ
…ぺ…
ンアアアッ♡
どく
どく
どく

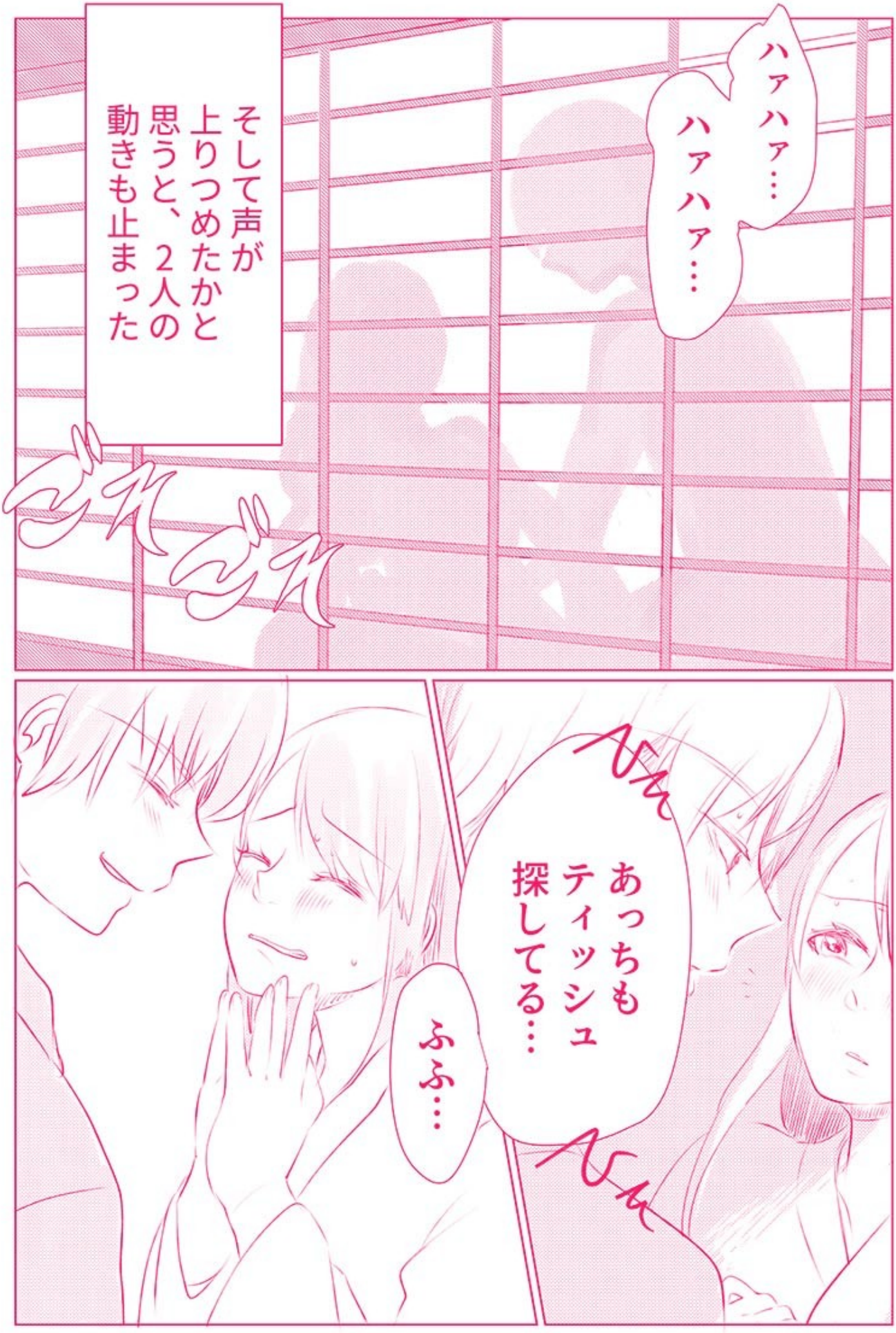

ハァ…ハァ…
ハァ…ハァ…
これまで
感じたことのない
激しい快感の中で、
私たちはついに
果ててしまったの
だった
…ケイタ
一緒にイったんだ…
はー
はー
はー
ヒロ
ぬりっ
ぬりっ
腰をつたう
温かい液体の
感触が伝わった

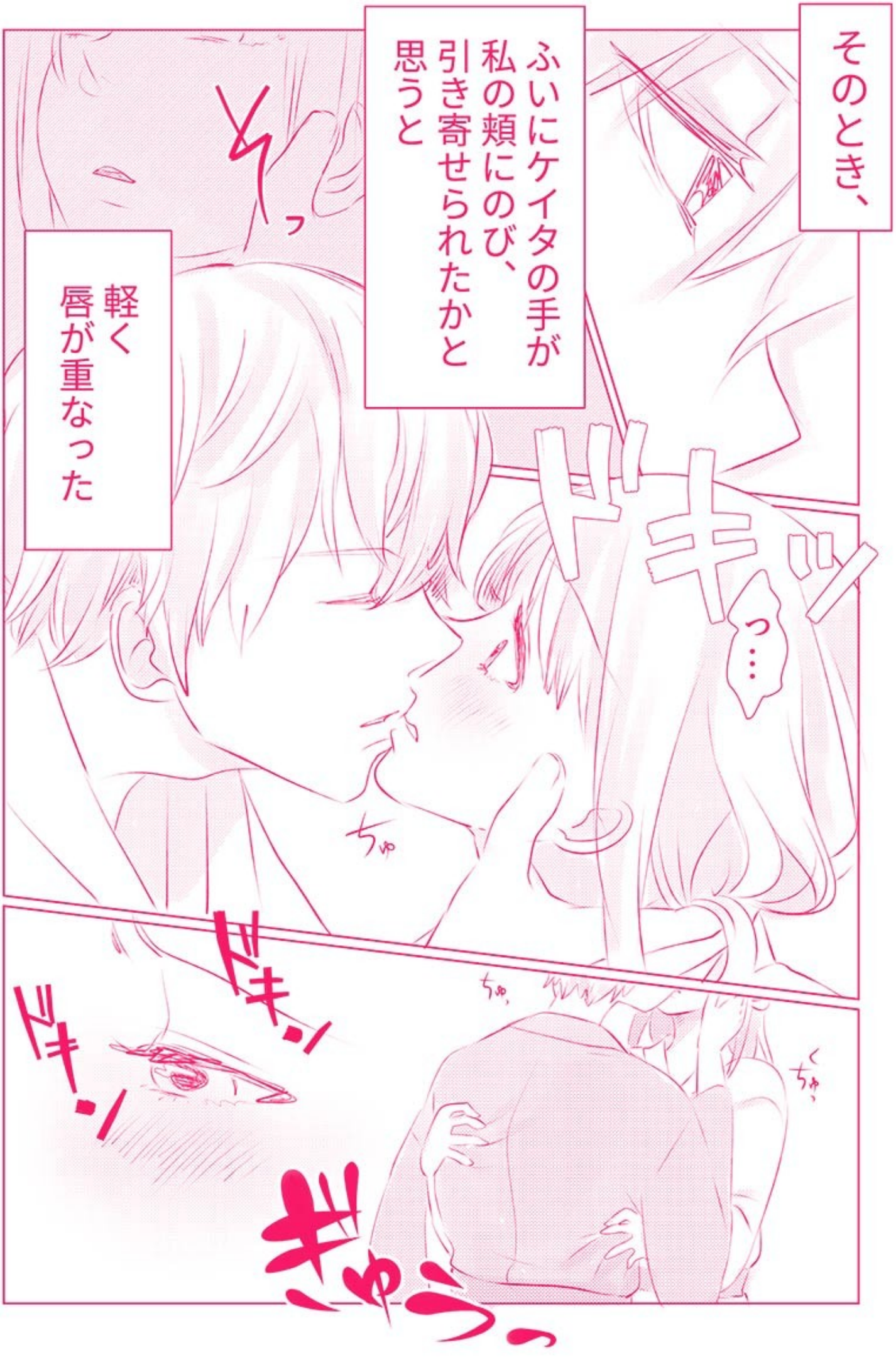

はぁ…
はぁっ…
暗闇の中
息遣いだけが
聞こえる
はぁ…
はぁ…

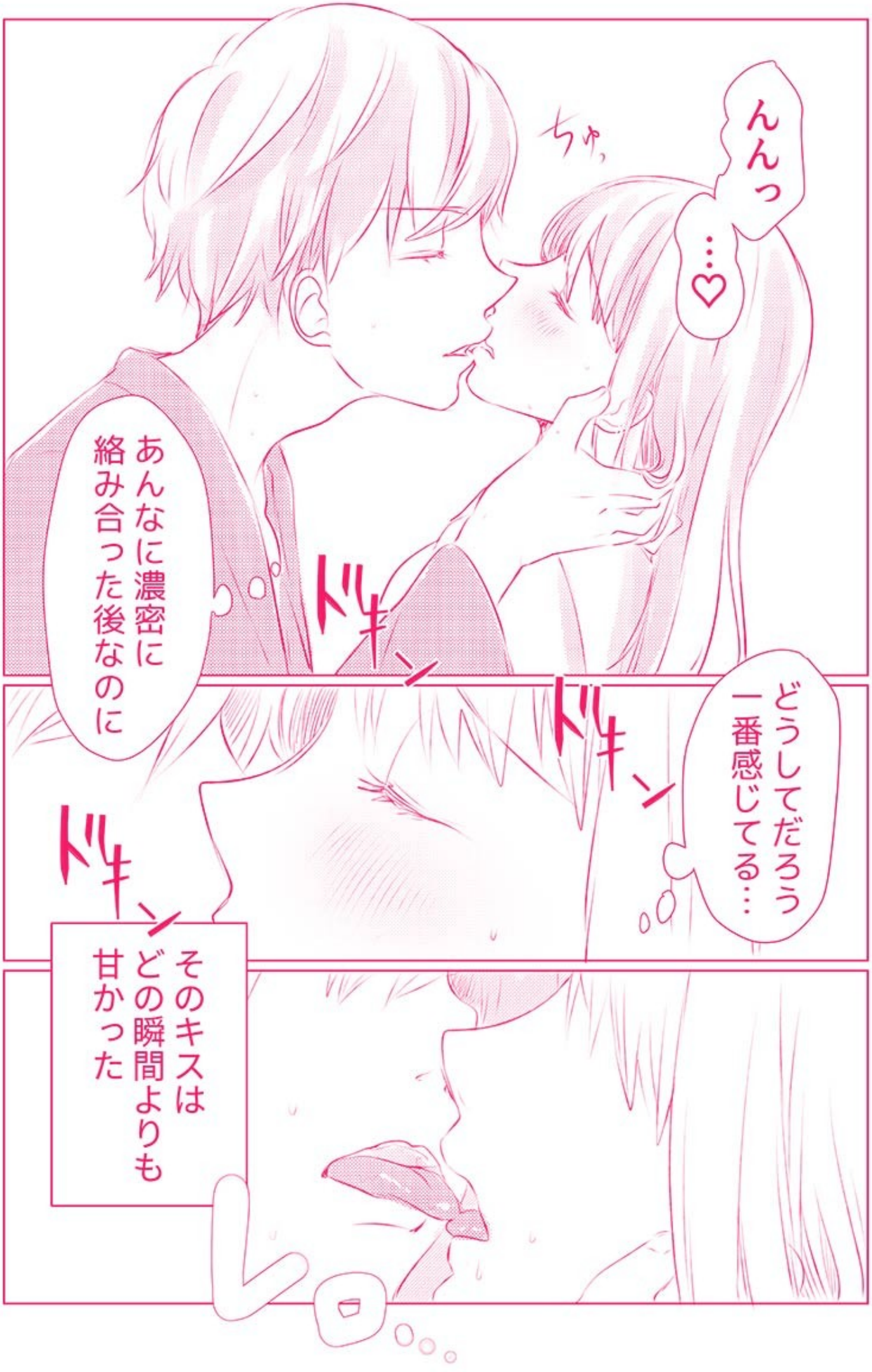

ティッシュ箱は、
アヤミのすぐ
近くにあった
ミシュ
物音をたてないように
ケイタが手をのばし、
箱ごと手繰り寄せる
ちょっとした
ことだけど
やさしいな…

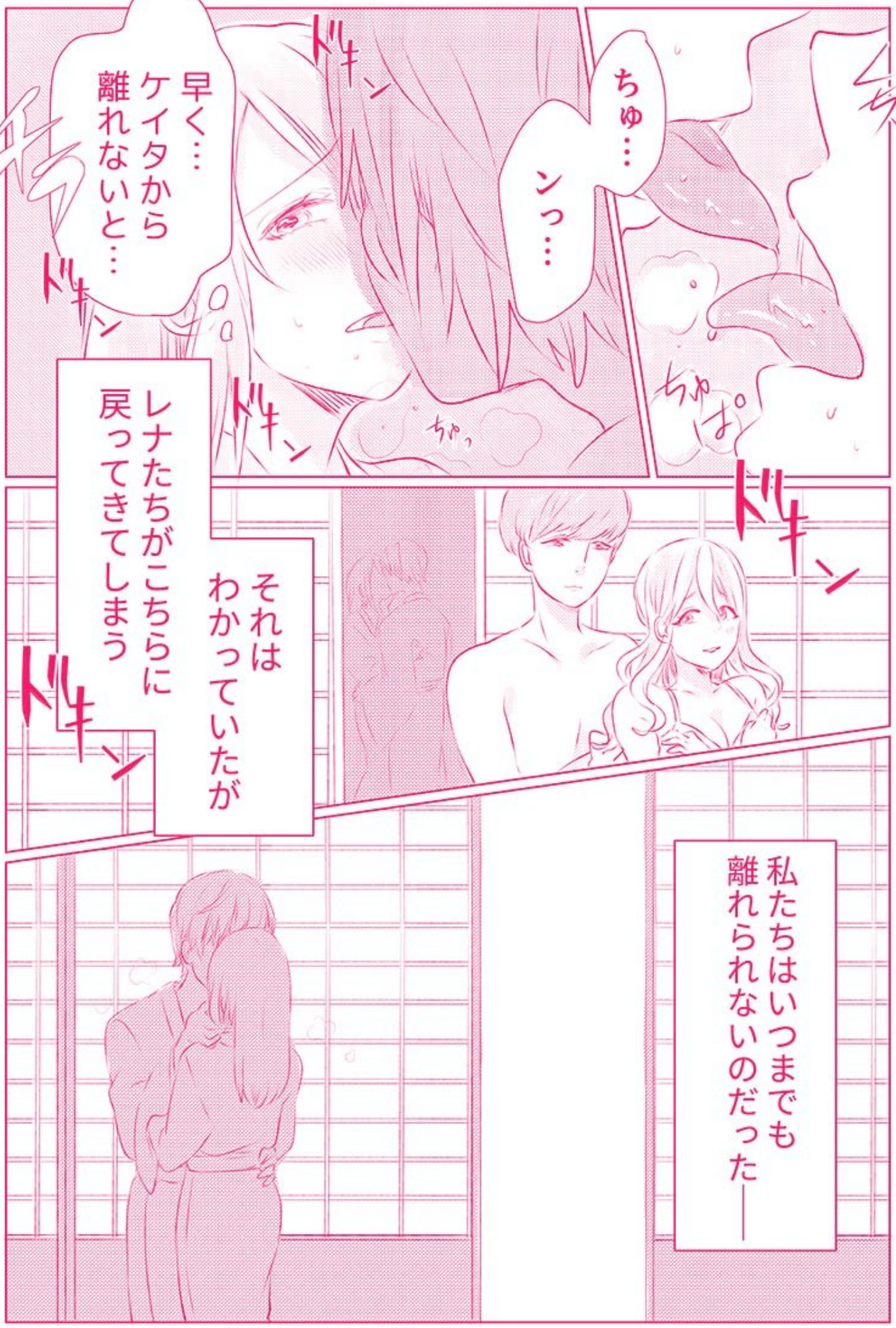
乱れた浴衣を
なおしながら、
私はまだ
ドキドキしていた
ドキ
ドキ
ドキ

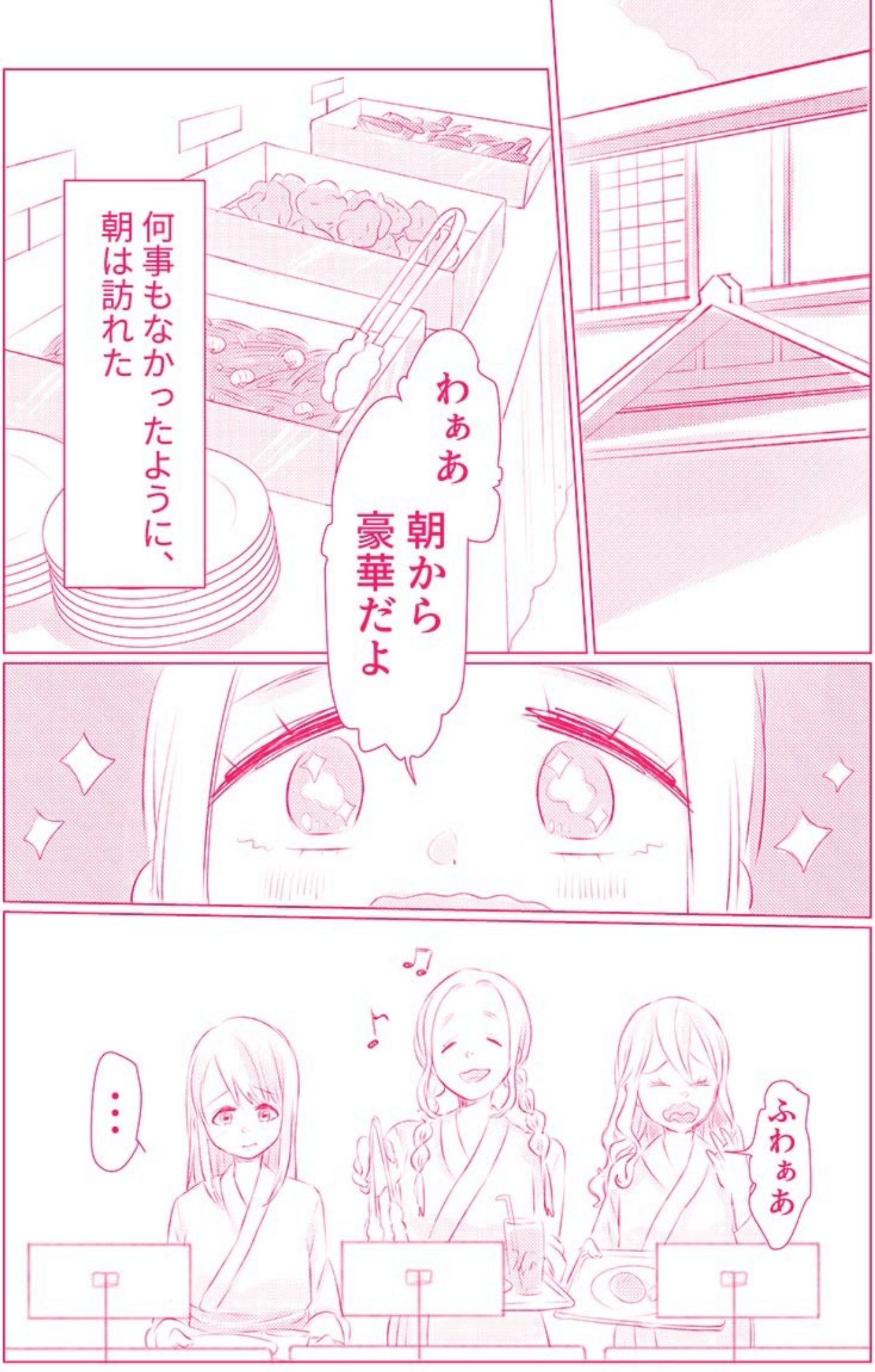

……
アッ…♡
！
ン…アッアッ
アッアッ…イイ
アア…ンク…
パチュ
お隣は、
まだヤっていた
アアアアっ…！

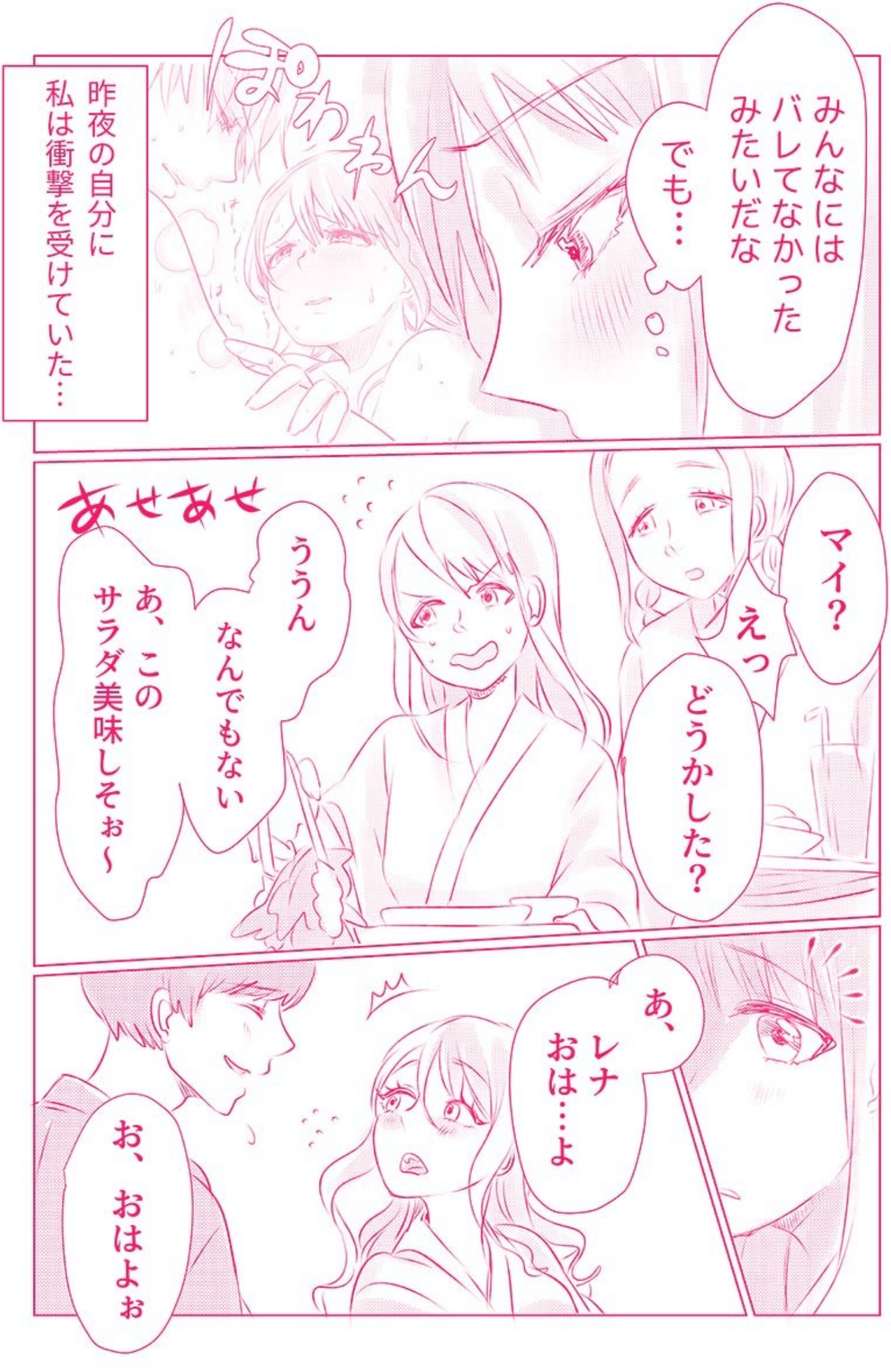

そして声が
上りつめたかと
思うと、2人の
動きも止まった
ハァハァ…
ハァハァ…
あっちも
ティッシュ
探してる…
ふふ…

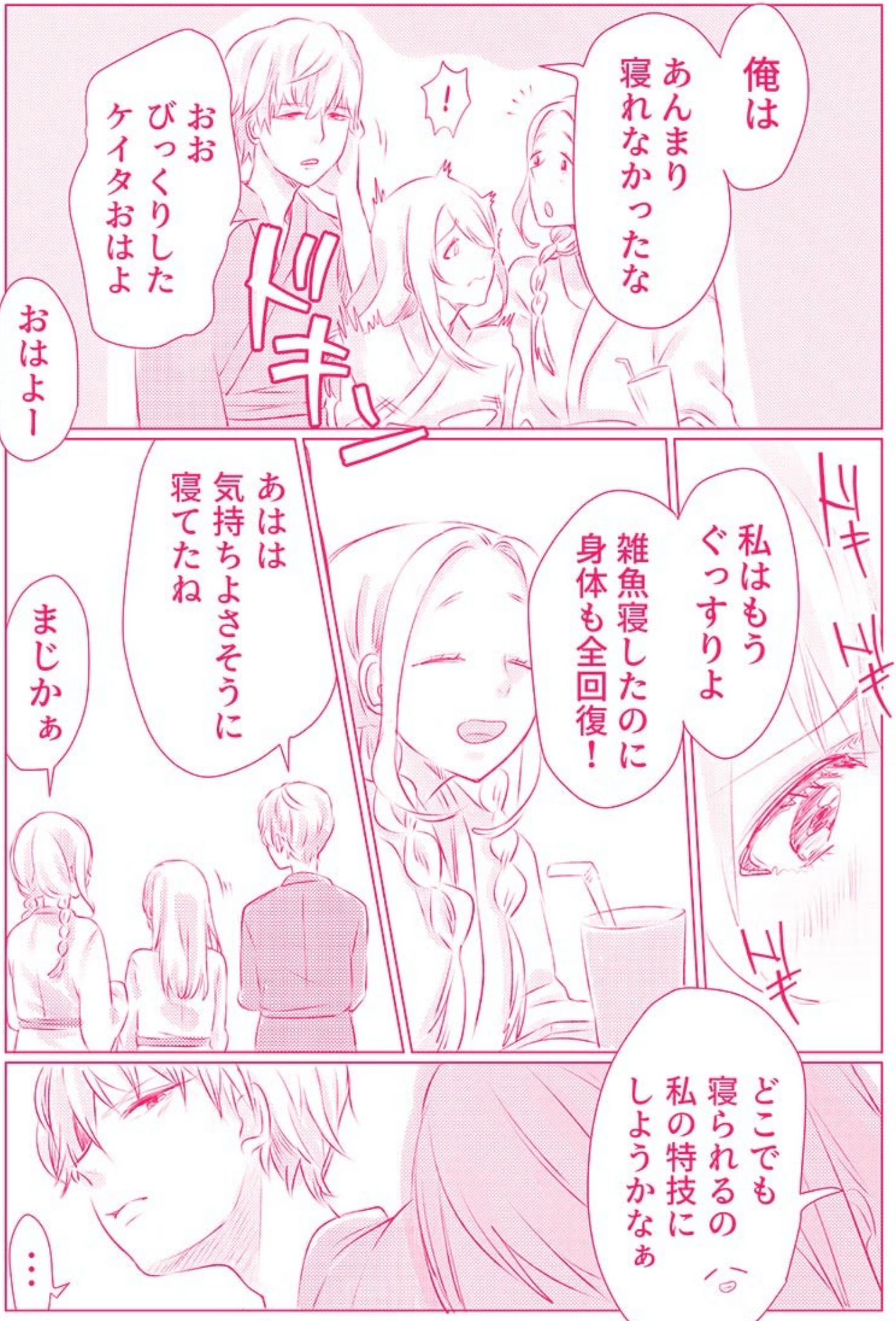

そのとき、
ふいにケイタの手が
私の頬にのび、
引き寄せられたかと
思うと
軽く
唇が重なった
そっ
ドキッ
っ…
ちゅ
ドキン
ドキン
ちゅ
くちゅ
ぎゅう〜

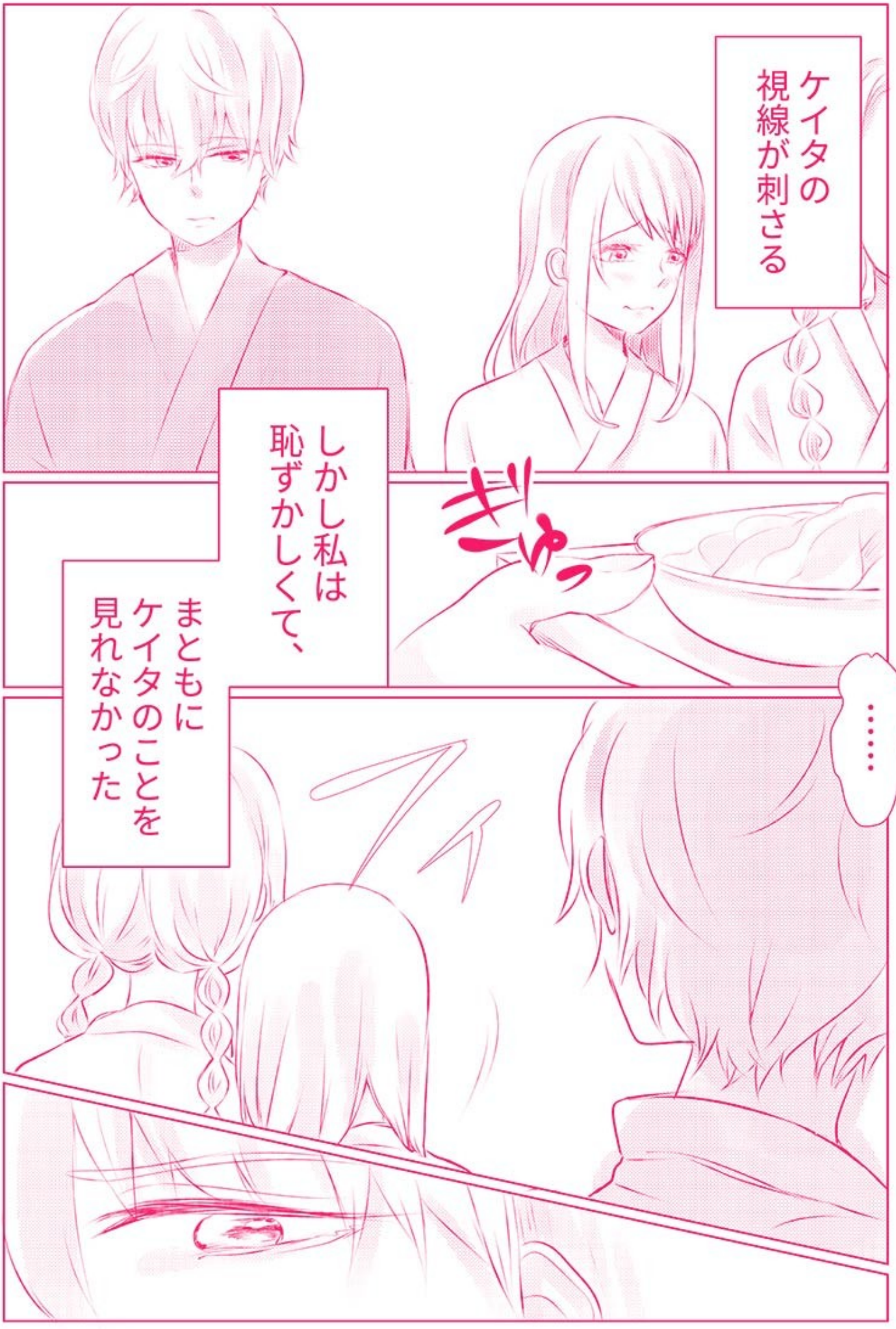

んんっ…♡
ちゅ
どうしてだろう
一番感じてる…
ドキン
ドキン
あんなに濃密に
絡み合った後なのに
ドキン
そのキスは
どの瞬間よりも
甘かった
レロ…


ちゅ…
ンっ…
ちゅぱ。
ドキン
早く…
ケイタから
離れないと…
ドキン
ドキン
ドキン
それは
わかっていたが
レナたちがこちらに
戻ってきてしまう
ドキン
私たちはいつまでも
離れられないのだった——

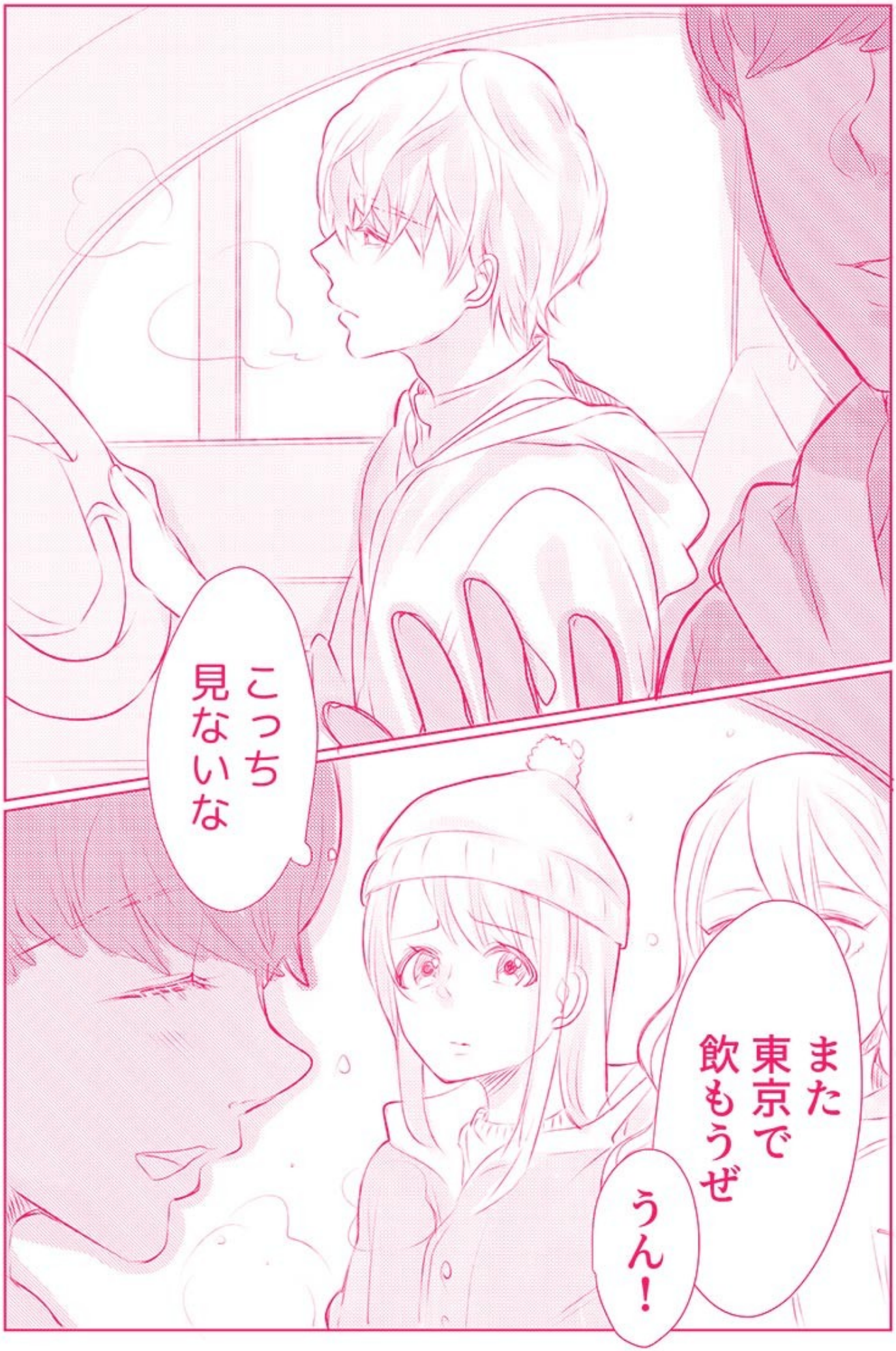

何事もなかったように、
朝は訪れた
わぁあ
朝から
豪華だよ
…
ふわぁあ


昨夜の自分に
私は衝撃を受けていた…
ぽわわん
みんなには
バレてなかった
みたいだな
でも…
マイ？
えっ
どうかした？
あせあせ
ううん
なんでもない
あ、この
サラダ美味しそぉ～
あ、
レナ
おは…よ
お、おはよぉ


俺は
あんまり
寝れなかったな
！
ドキッ
おお
びっくりした
ケイタおはよ
おはよー
ニヤニヤ
私はもう
ぐっすりよ
雑魚寝したのに
身体も全回復！
あはは
気持ちよさそうに
寝てたね
まじかぁ
ニヤ
どこでも
寝られるの
私の特技に
しようかなぁ
…


ケイタの
視線が刺さる
しかし私は
恥ずかしくて、
まともに
ケイタのことを
見れなかった
ぎゅっ
……

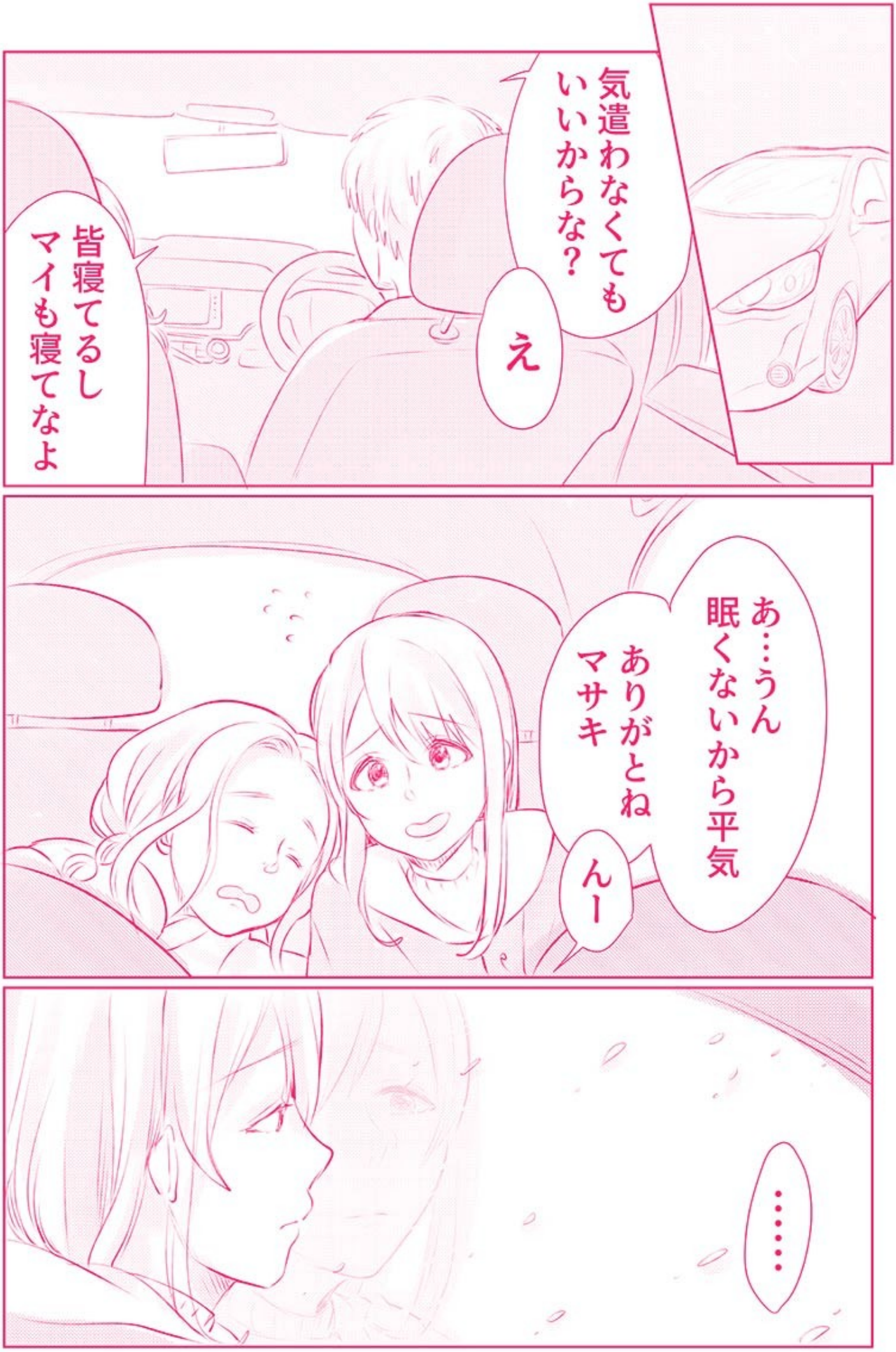
ホラ
もう出るぞ
扉閉めて
バタン
ブロロ…
ハーイ
じゃあ、
みんな
気をつけてね
うん、
ありがとー

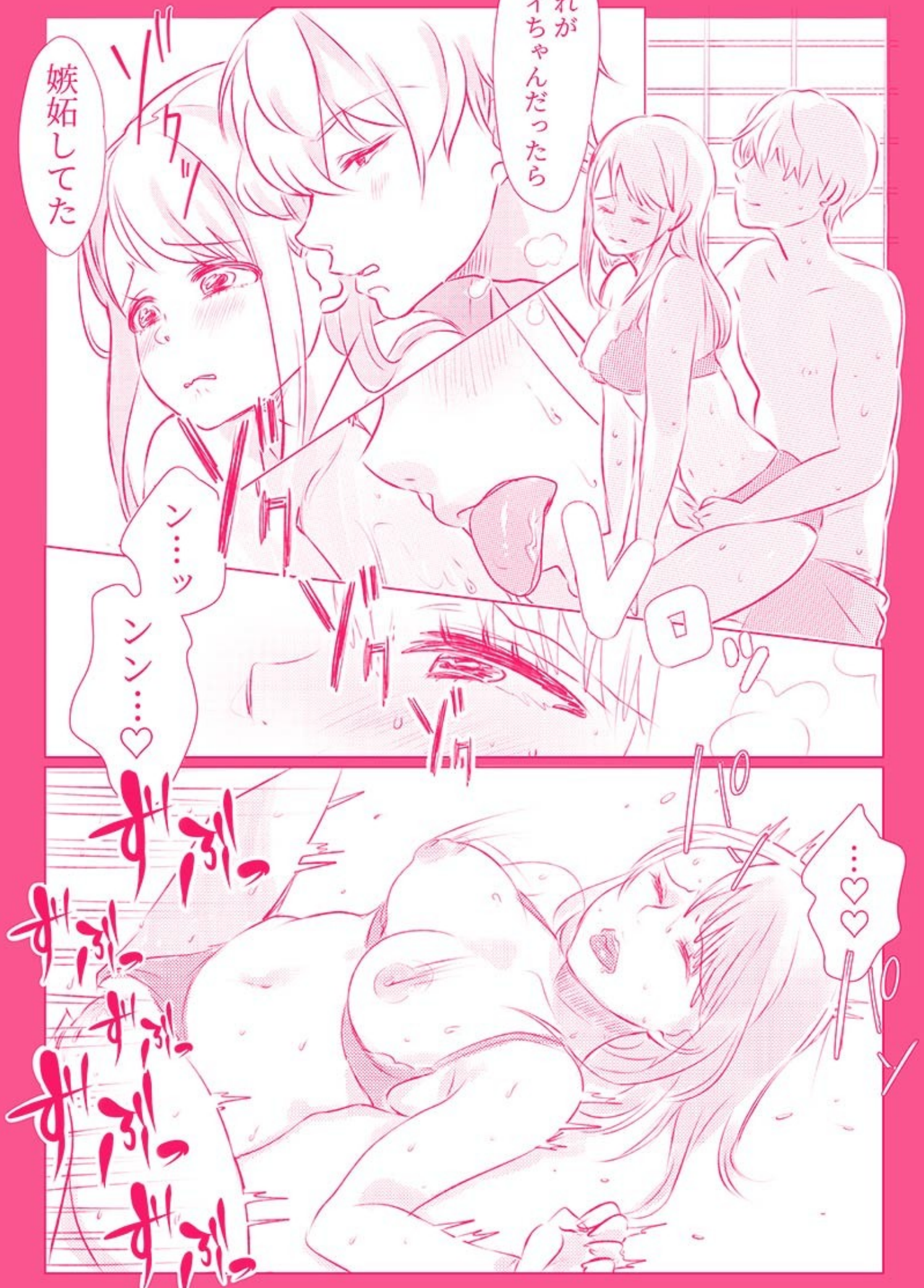

こっち
見ないな
また
東京で
飲もうぜ
うん！

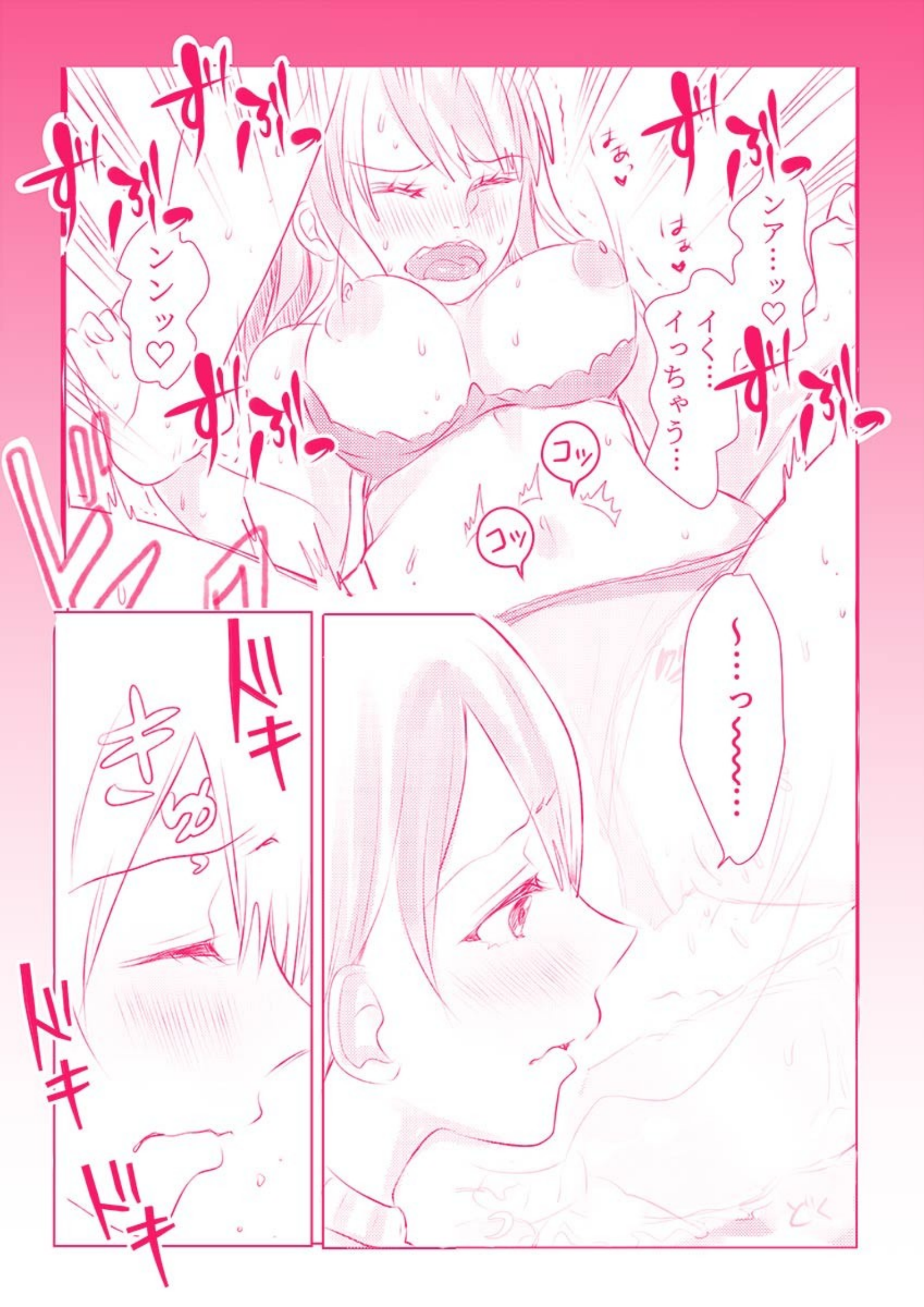
ばいばーい！

行っちゃった…

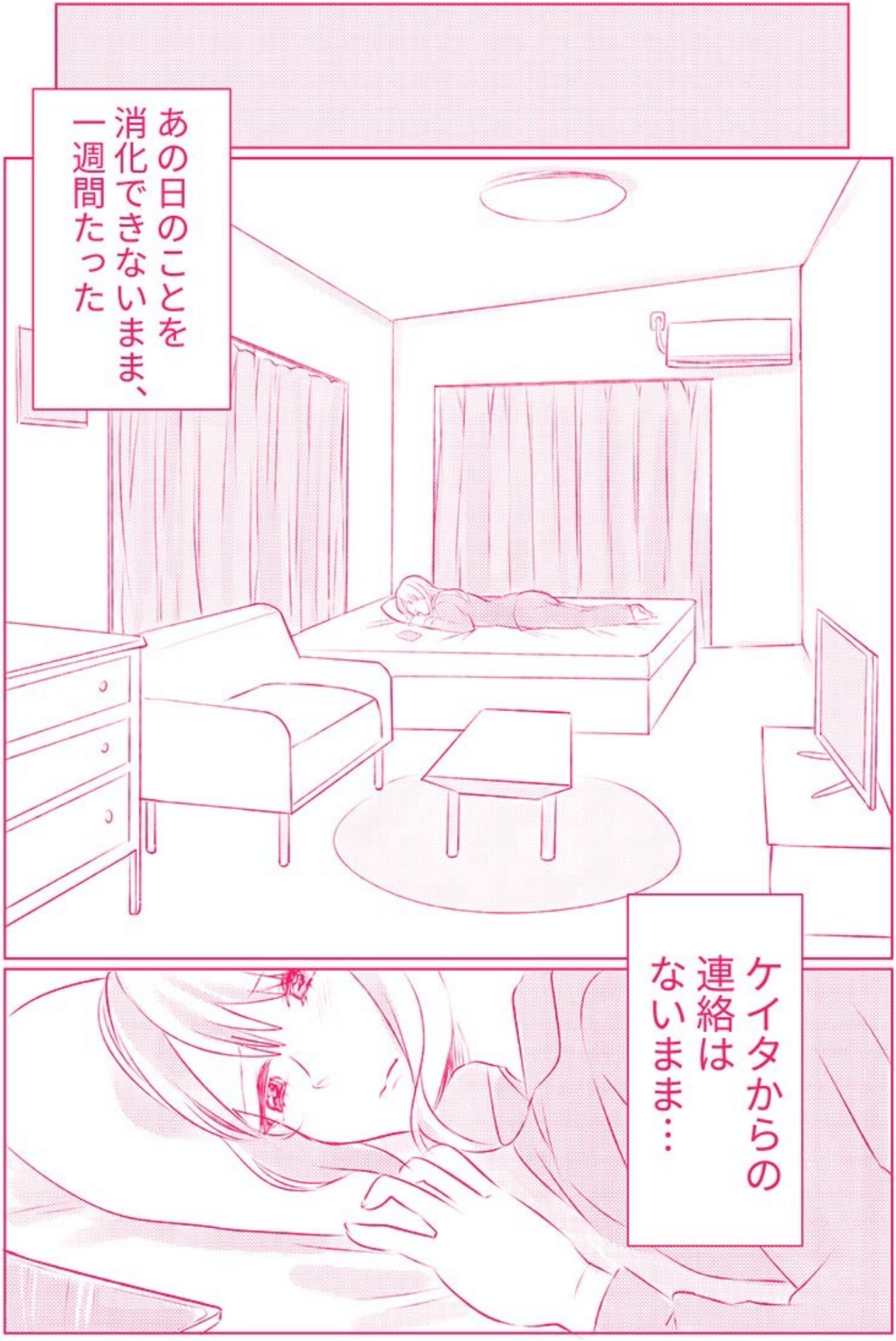
結局、
言葉を交わすことなく、
ケイタは帰ってしまった
俺たちも
行くか
つかれたー
帰ろ帰ろー


気遣わなくてもいいからな？
え
皆寝てるしマイも寝てなよ
あ…うん眠くないから平気
ありがとねマサキ
んー
……

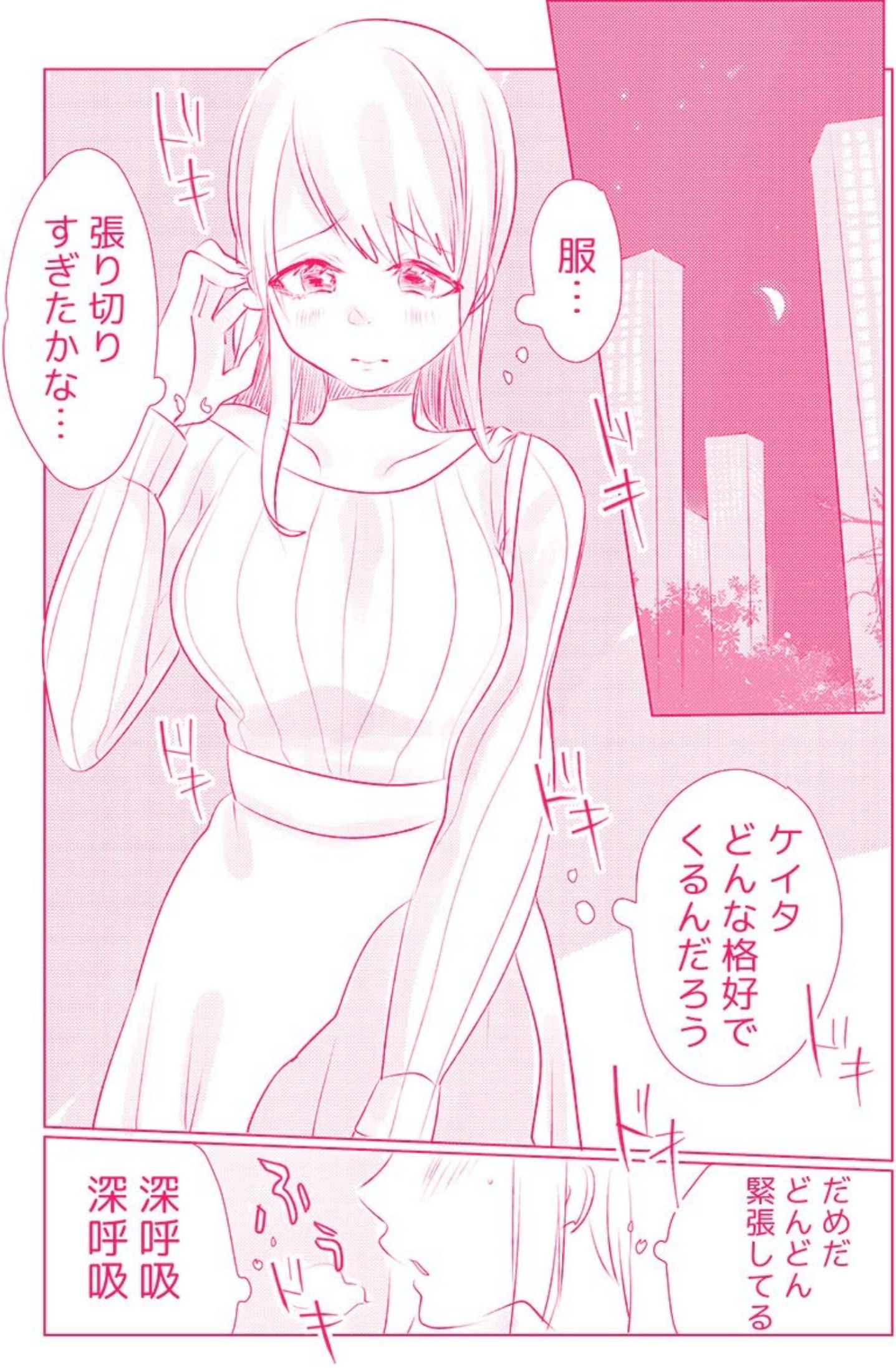

あれがマイちゃんだったら
嫉妬してた
ゾクッ
ン……ッ
ンン……♡
すりっ
すりっ
すりっ
すりっ
すりっ
……♡


すりっ
すりっ
すりっ
すりっ
すりっ
ンンッ♡
はぁ♥
あっ♥
ンァ…ッ♡
イく…
イっちゃう…
コッ
コッ
ビキ
ビキ
ビキ
…っ……

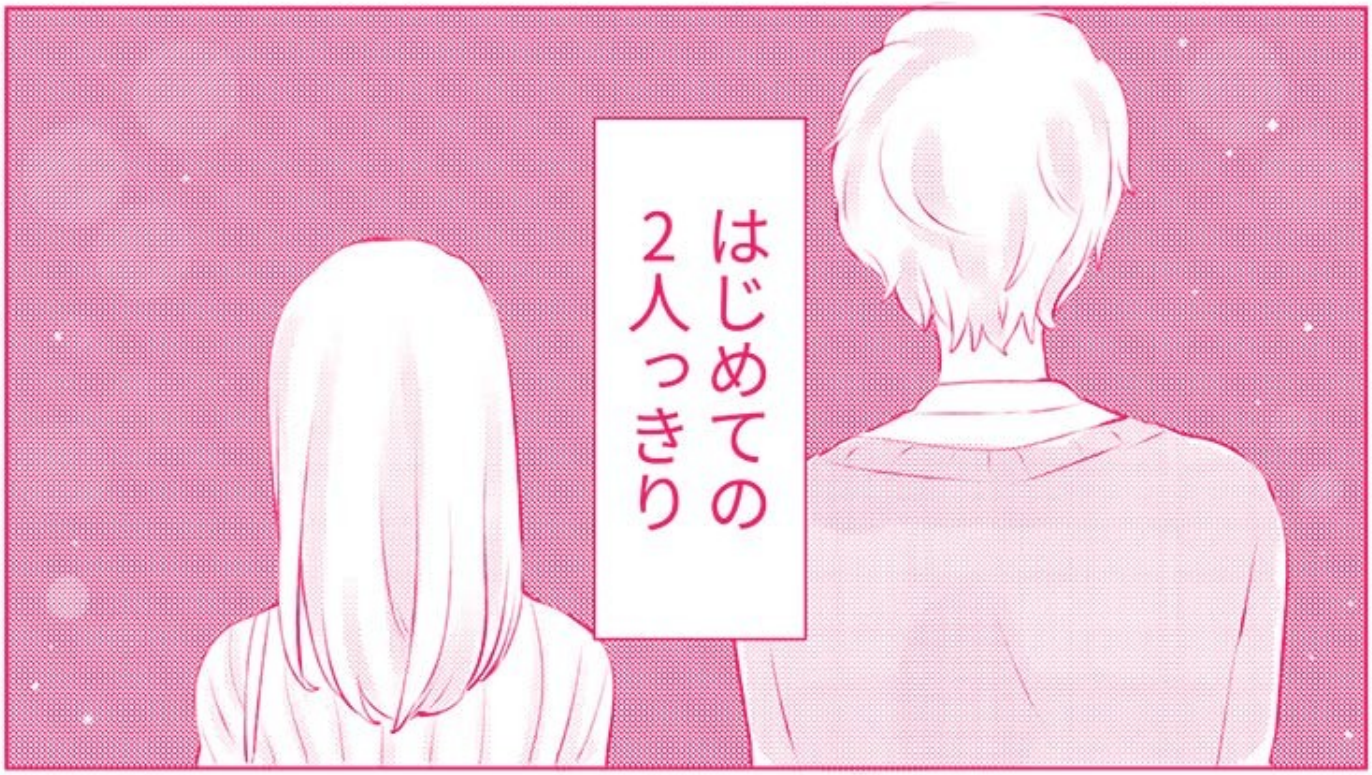
もしかして
昨日のことは
夢だったりして
ドキ
ドキ
ドキ
ムカー
そう思ったけれど、
目をつむると
熱い感触が
リアルに蘇った
スノボの時の
ケイタ
旅館での
ケイタ
まだダメだよ…
ケイタ…


あの日のことを
消化できないまま、
一週間たった
ケイタからの
連絡は
ないまま…

ピコン
LIOE
ケイタ
ごはんでも行かない？
え、え、
ケイタからだ
うそ…
体がふわふわと
浮いたような
感覚だった

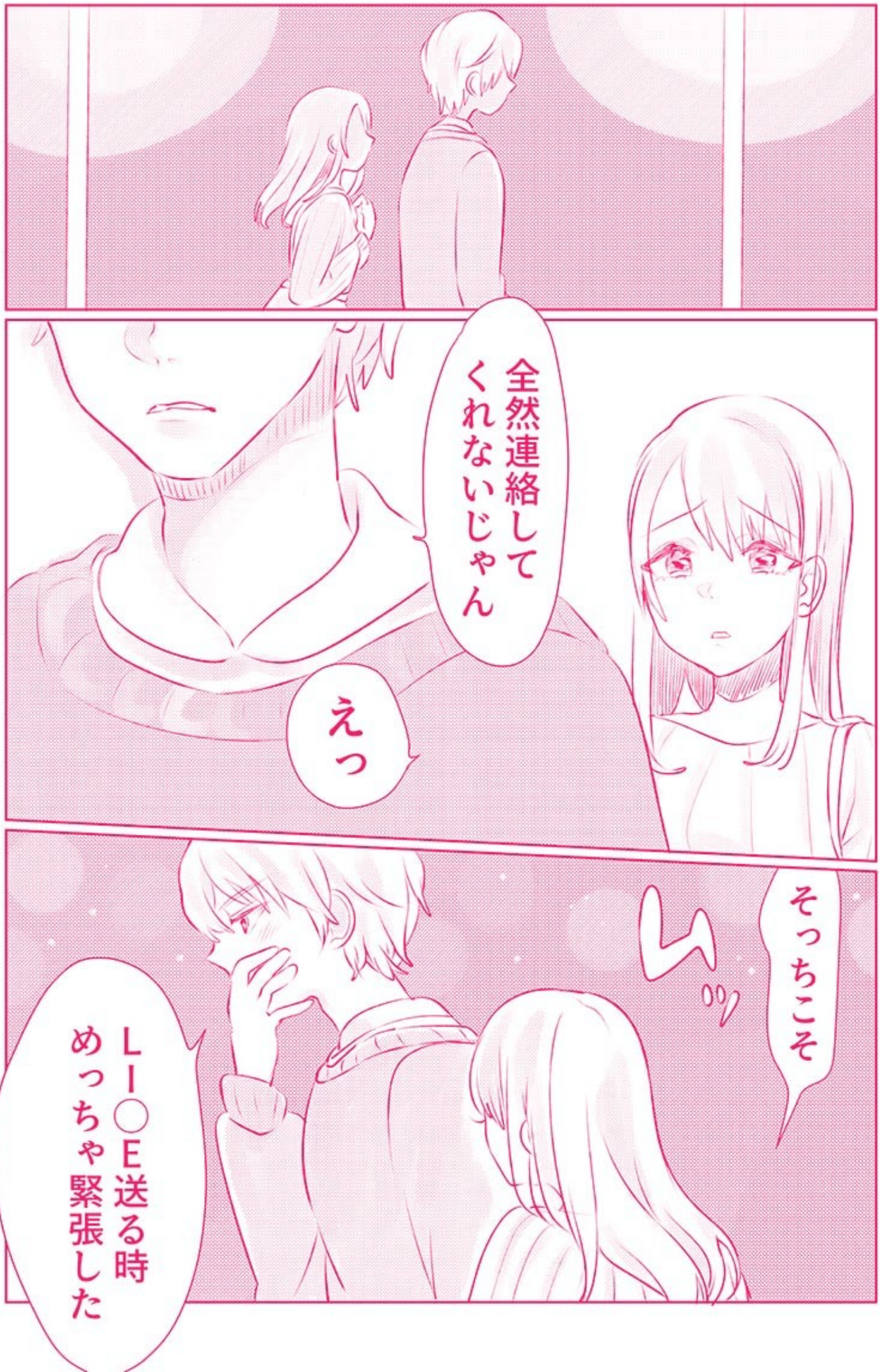

服…
張り切りすぎたかな…
ケイタどんな格好でくるんだろう
だめだどんどん緊張してる
深呼吸
深呼吸

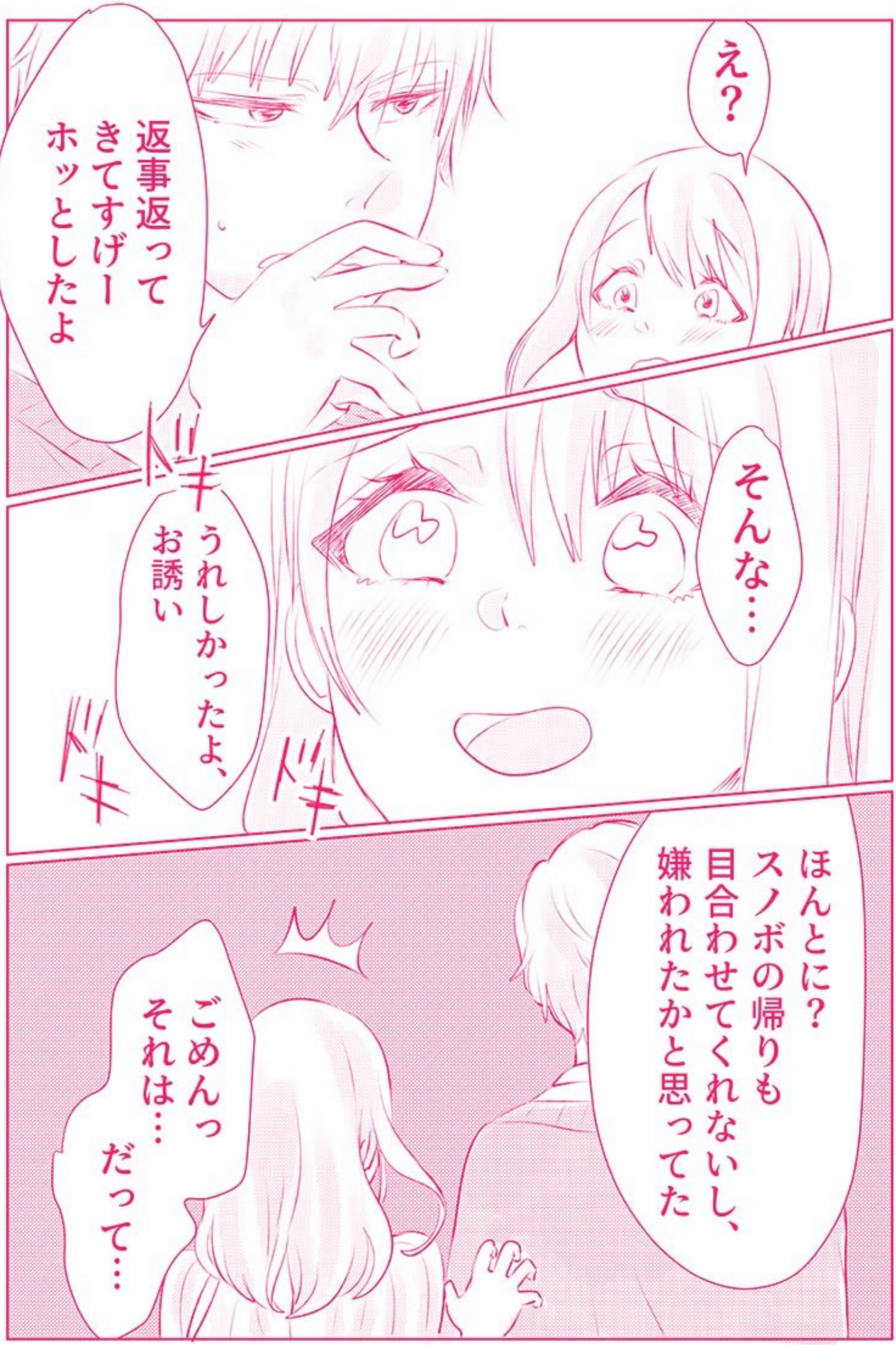
マイちゃん
良かった
居た居た
！
久しぶりっ
ひ
久しぶり！

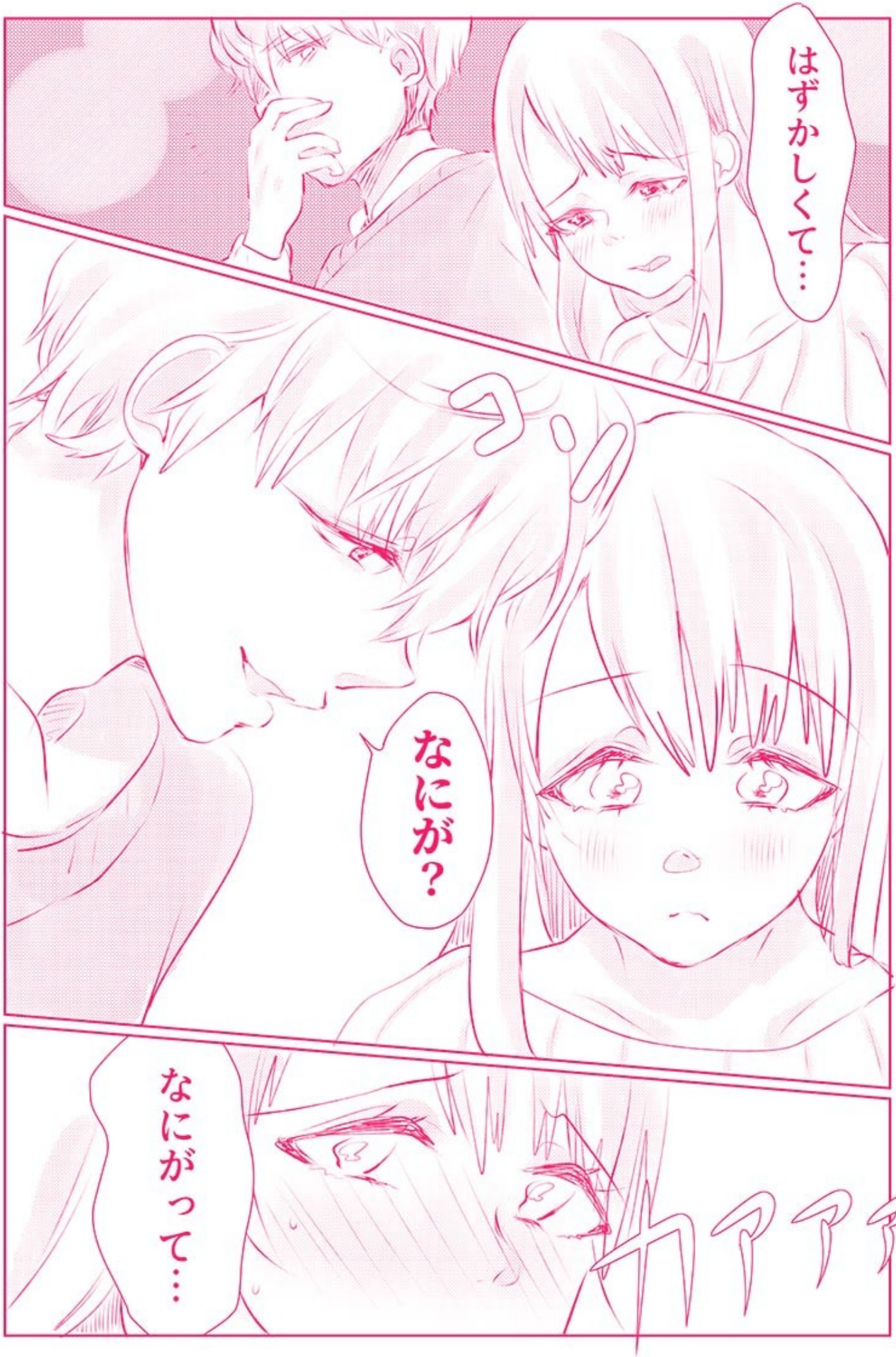

はじめての
2人っきり

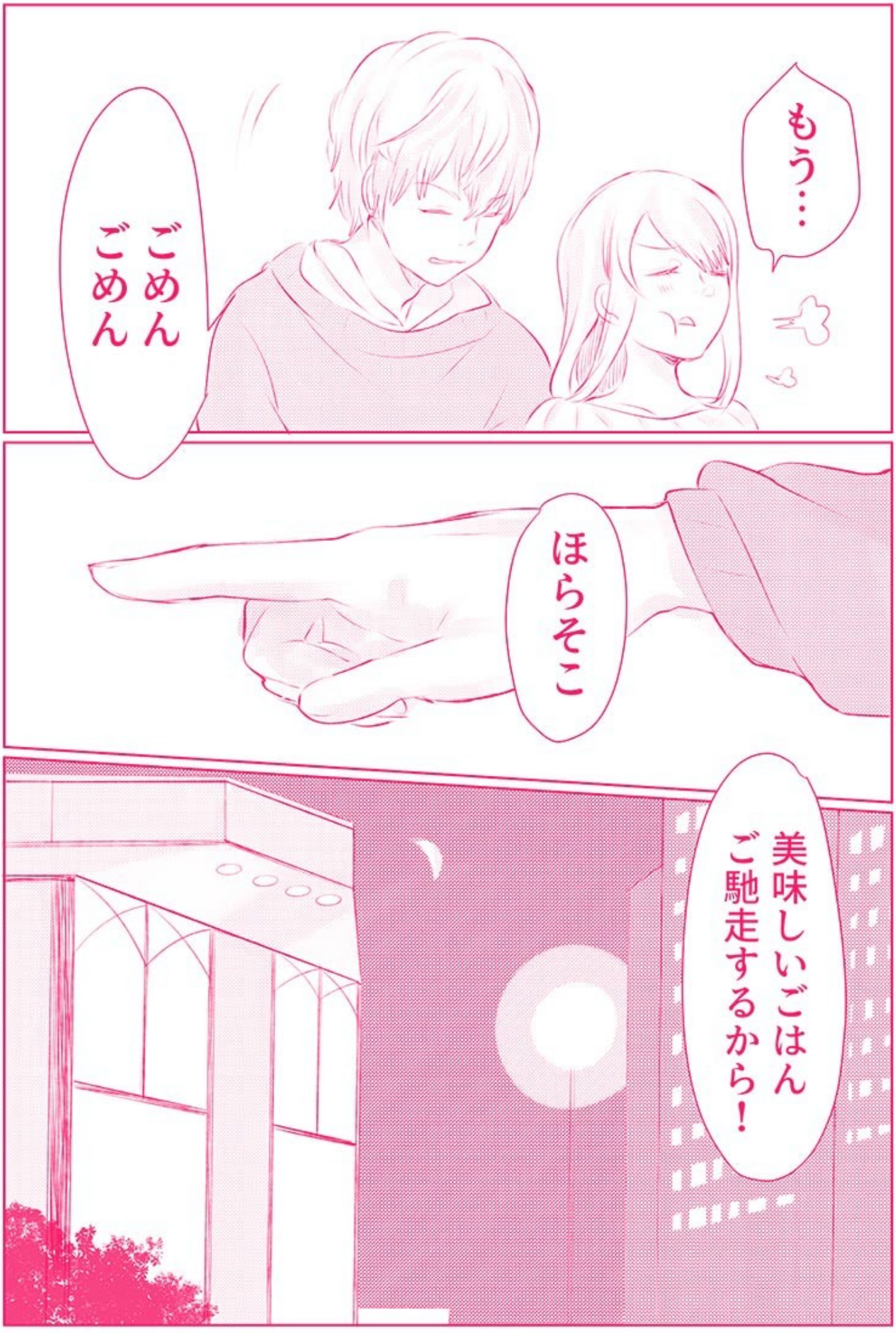
こっち
雪山とはまた違う
ケイタにドキドキ
してしまう

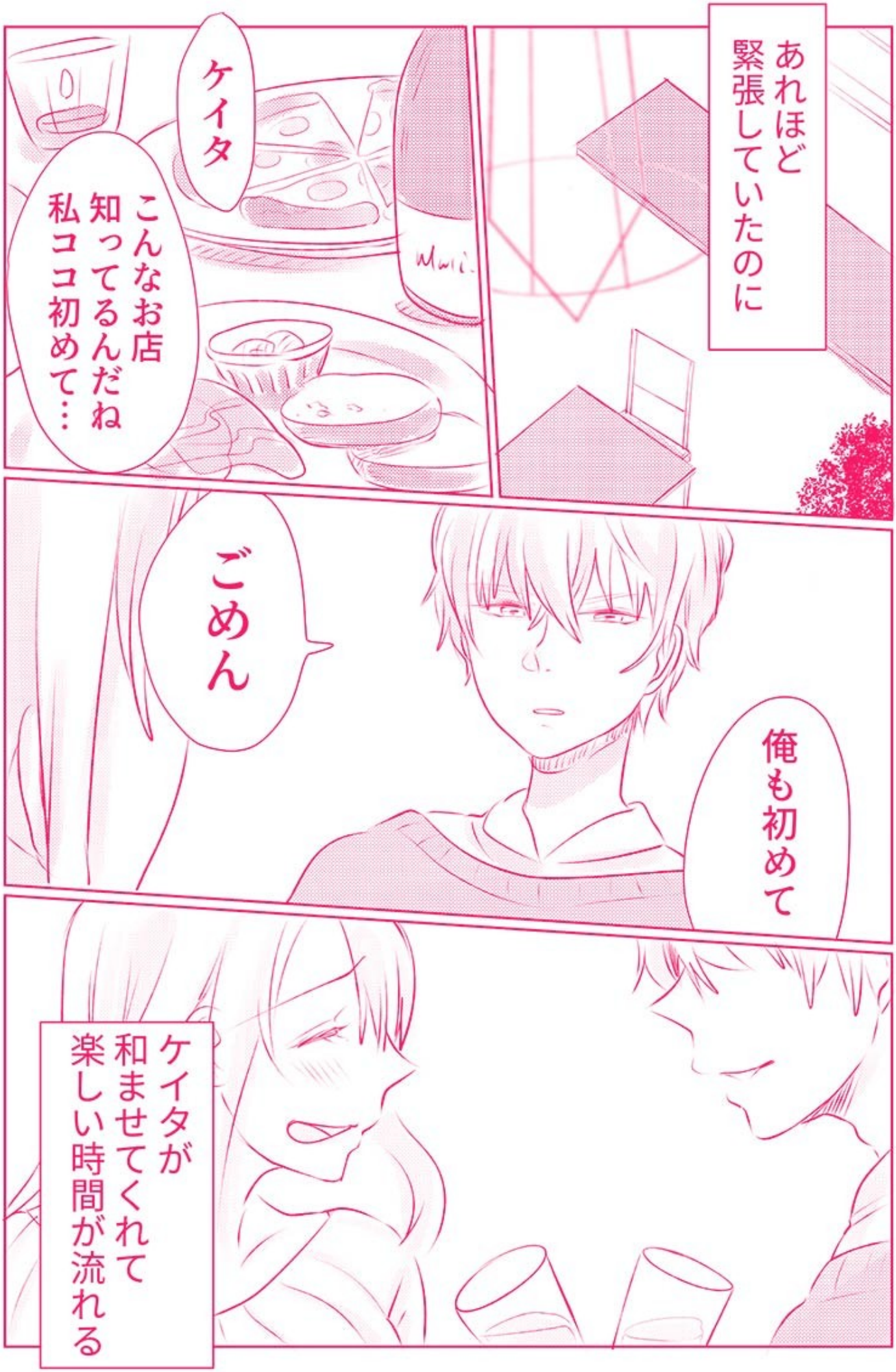
うん


全然連絡してくれないじゃん
えっ
そっちこそ
LINE送る時めっちゃ緊張した

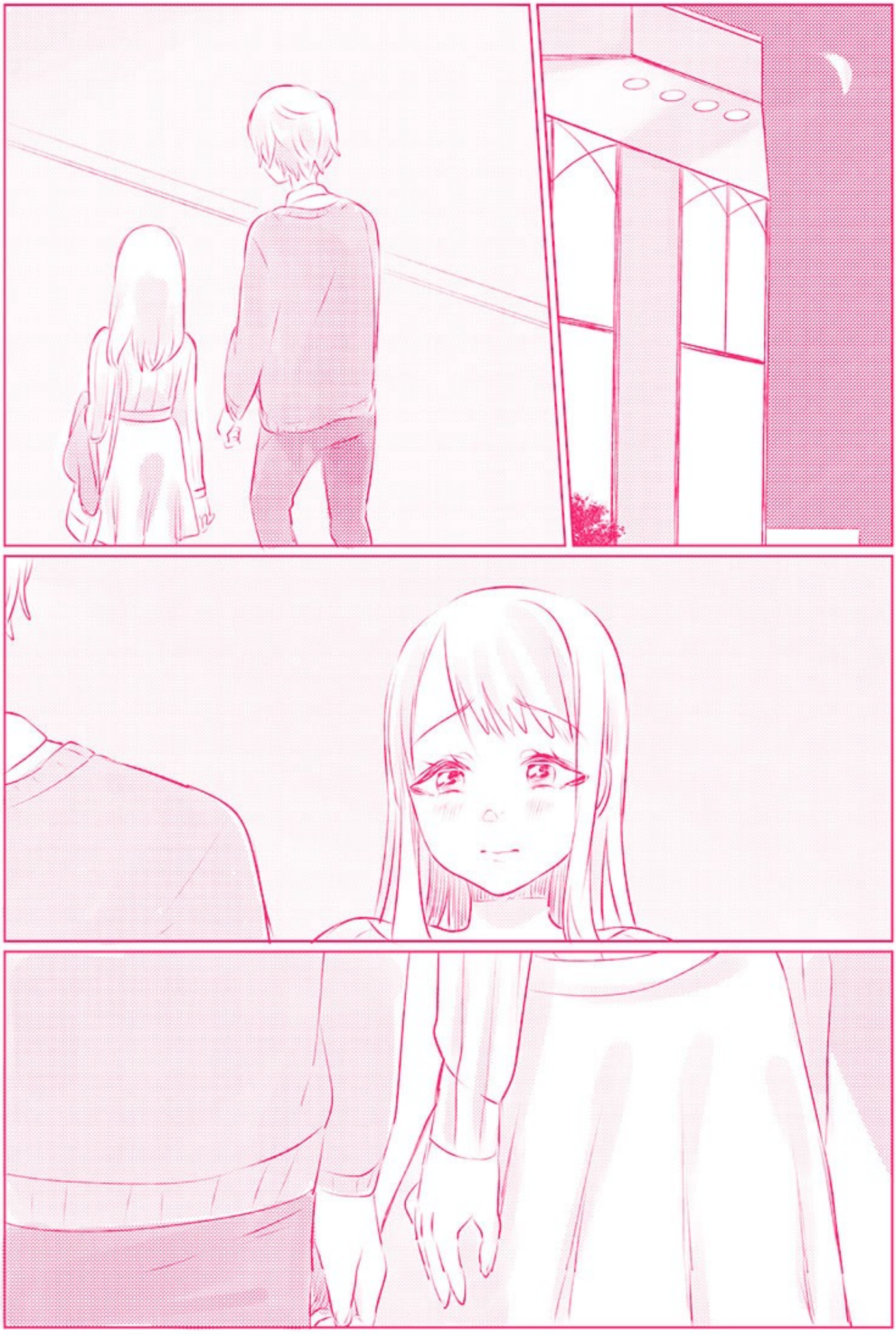

え？
そんな…
うれしかったよ、お誘い
返事返ってきてすげーホッとしたよ
ほんとに？スノボの帰りも目合わせてくれないし、嫌われたかと思ってた
ごめんっそれは…だって…

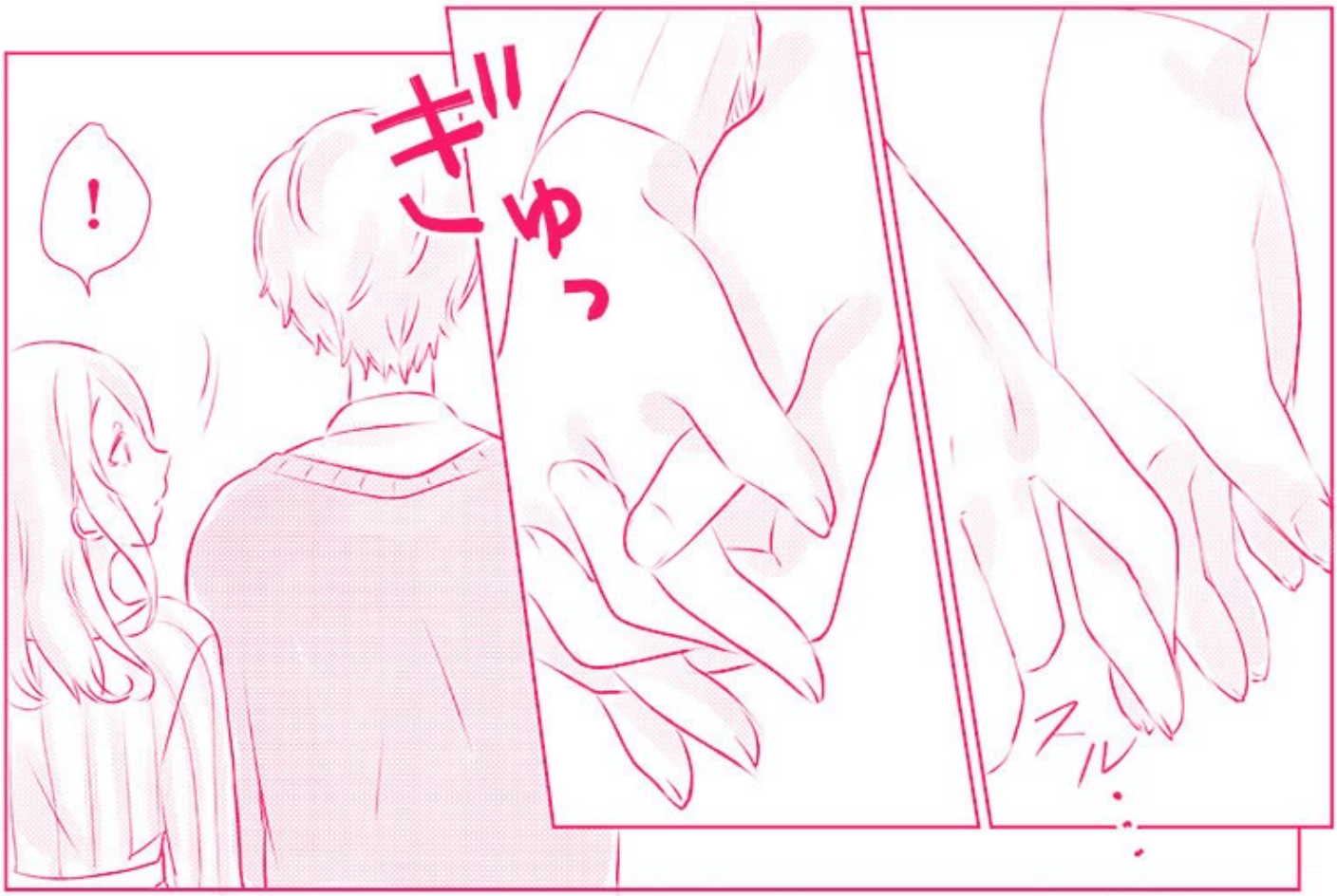

はずかしくて…
なにが？
なにがって…
ハアアア


もう…
ごめん
ごめん
ほらそこ
美味しいごはん
ご馳走するから！

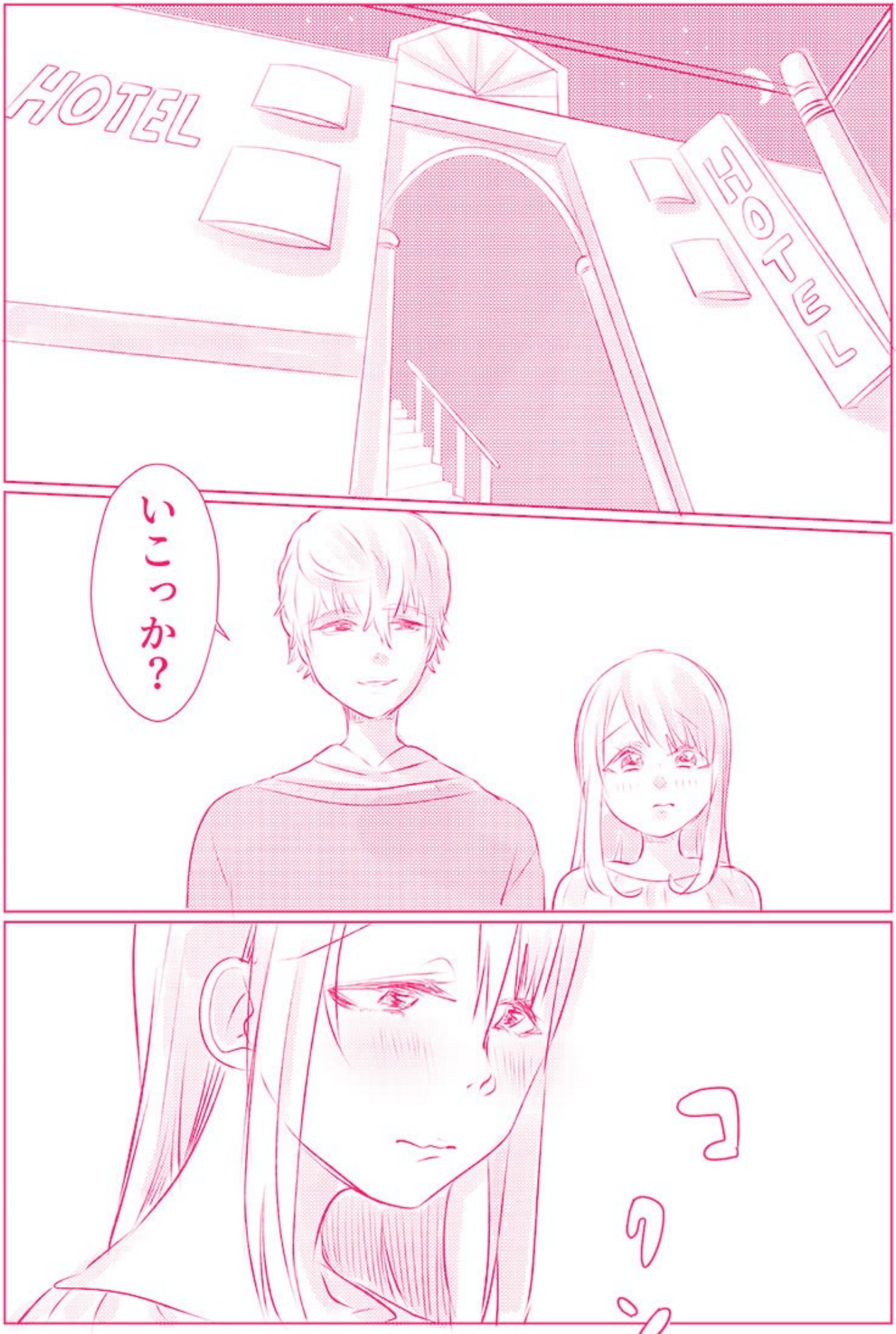

あれほど
緊張していたのに
ケイタ
こんなお店
知ってるんだね
私ココ初めて…
ごめん
俺も初めて
ケイタが
和ませてくれて
楽しい時間が流れる

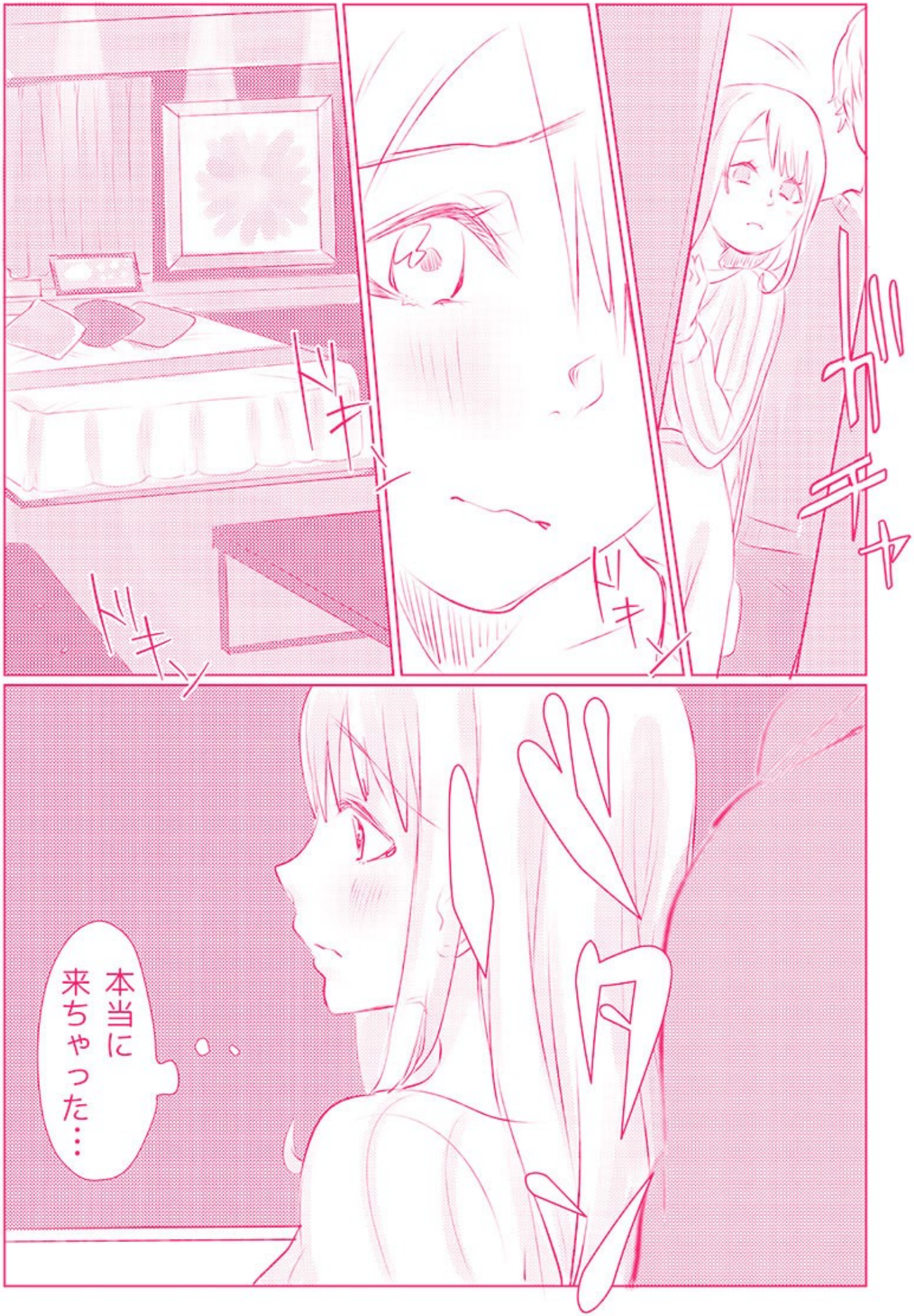
ケイタの雰囲気
ひとつひとつの仕草
私は
どんどん夢中に
なっていった

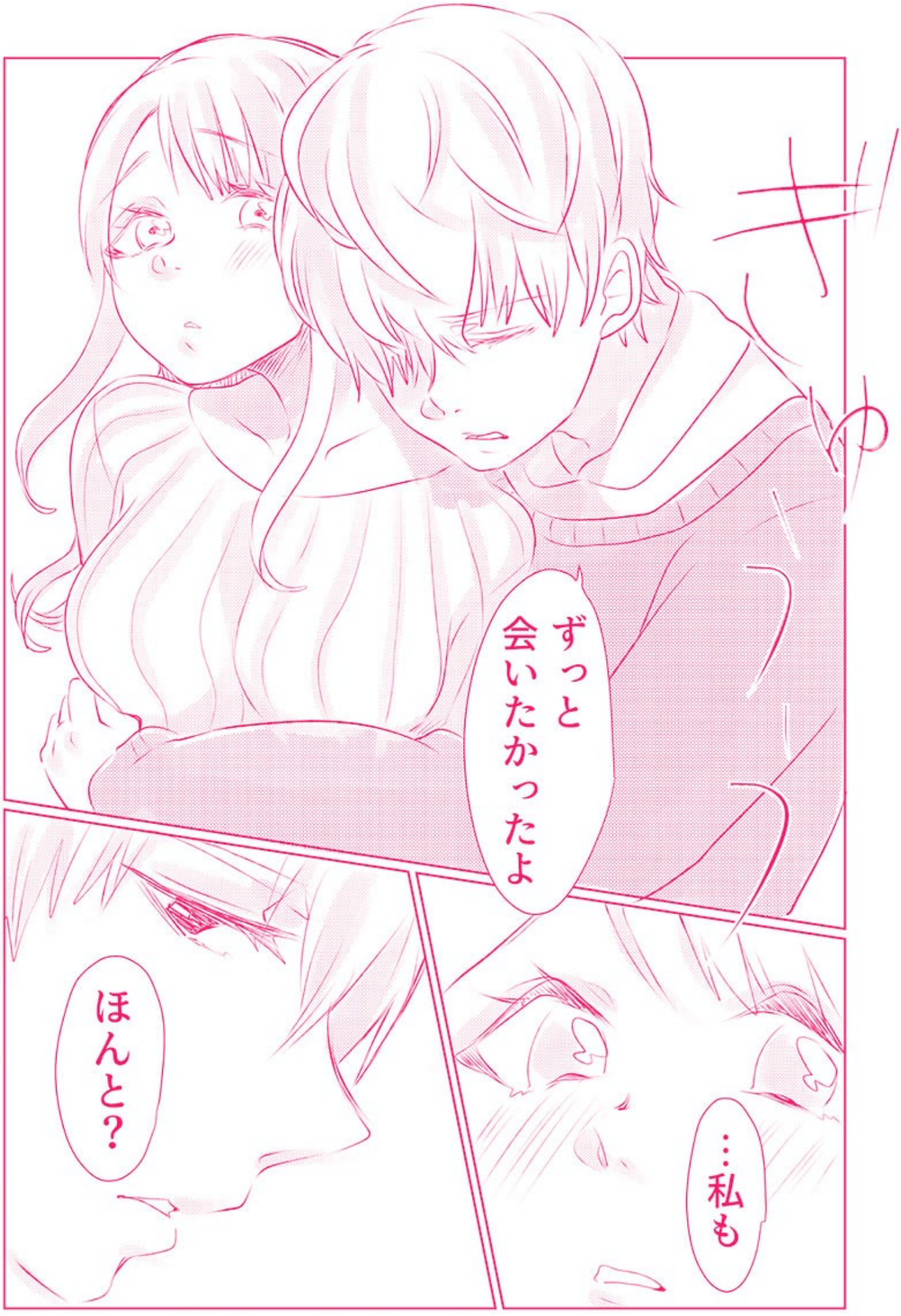


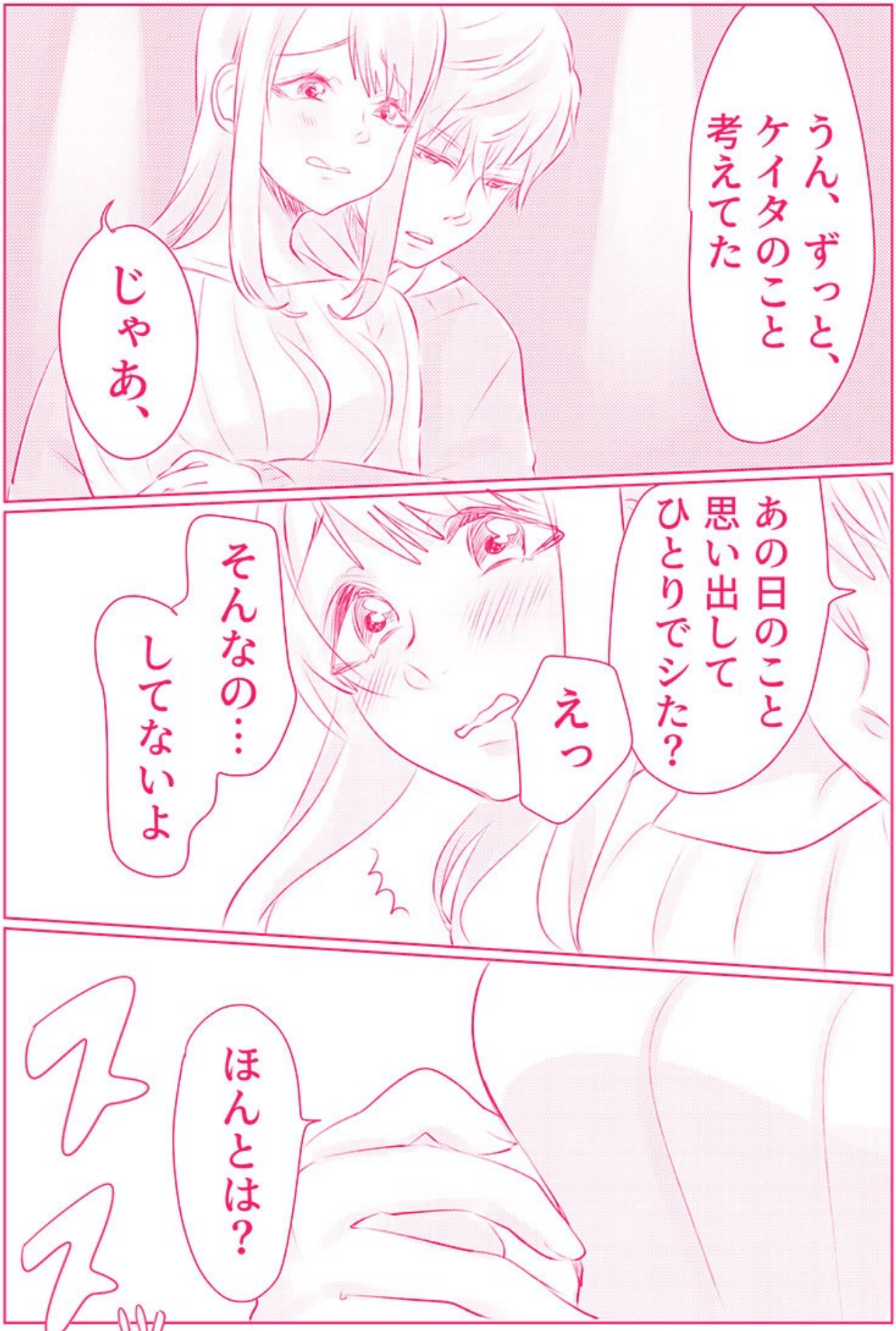

ギュっ
！
フル…

ケイタの
手が触れると、
心臓がキュッとした
今までずっと、
私はケイタに
触れて欲しかったんだ

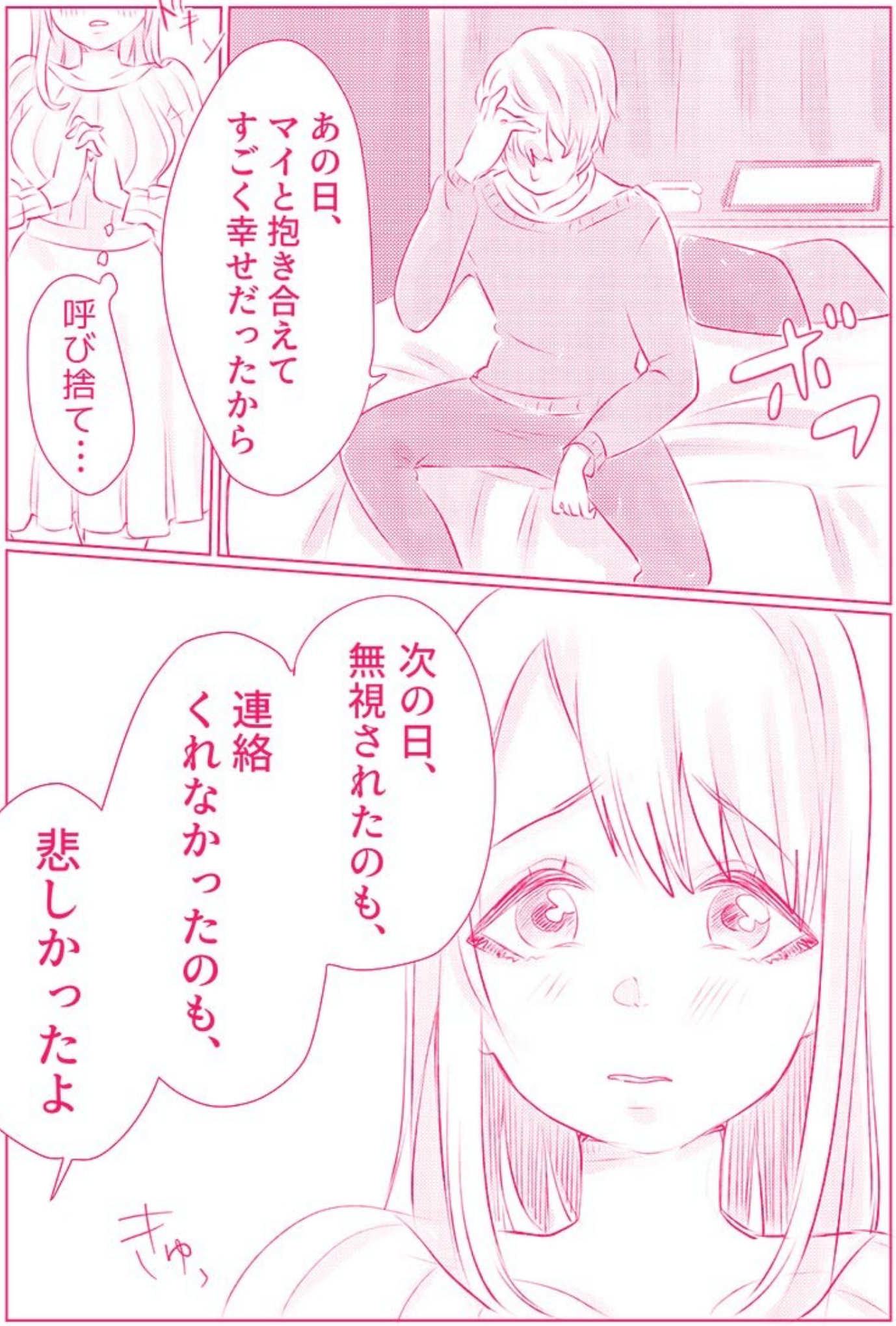

HOTEL
HOTEL
いこっか？

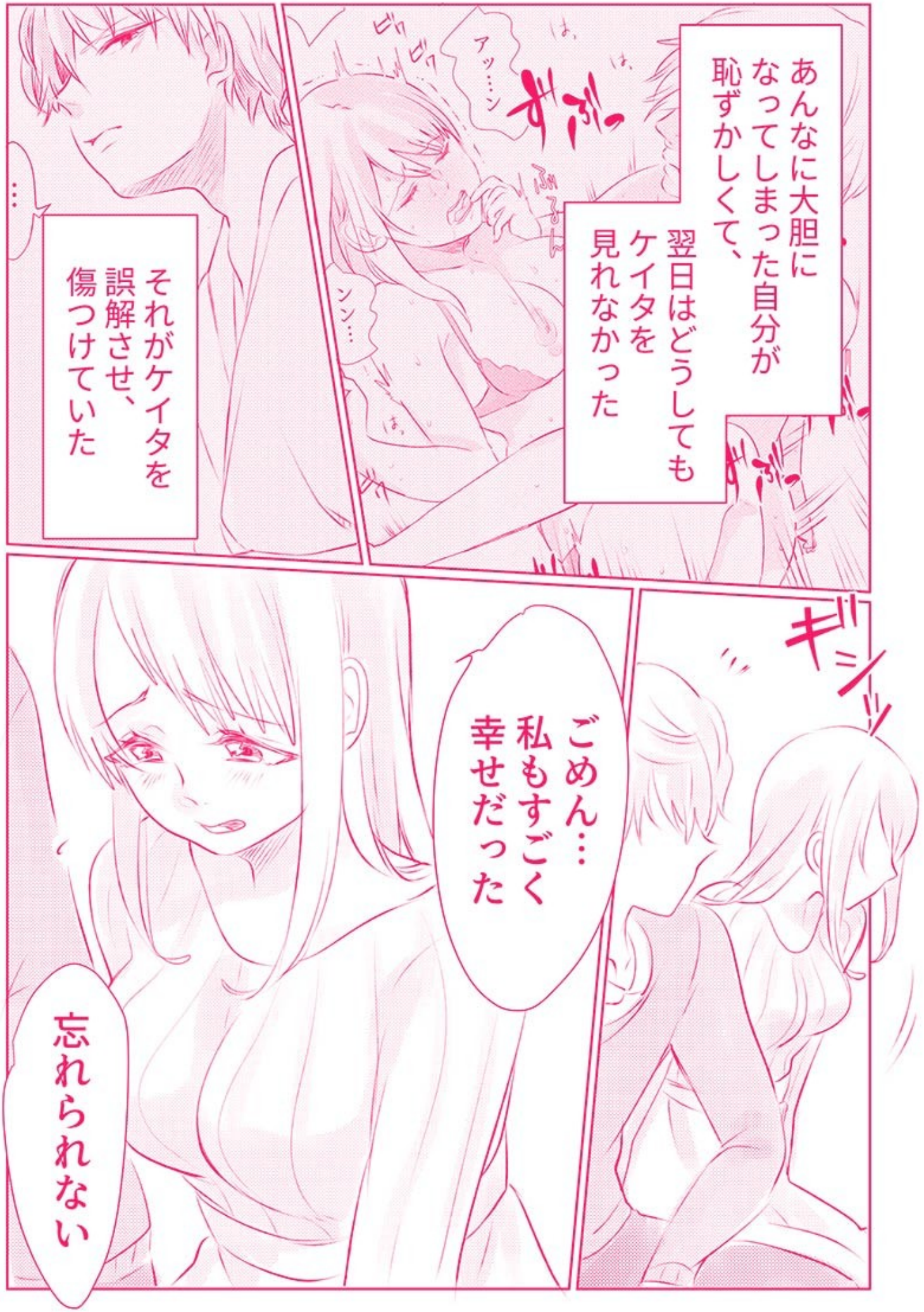

ドキッ
ドキッ
ガチャ
ドキッ
本当に来ちゃった…

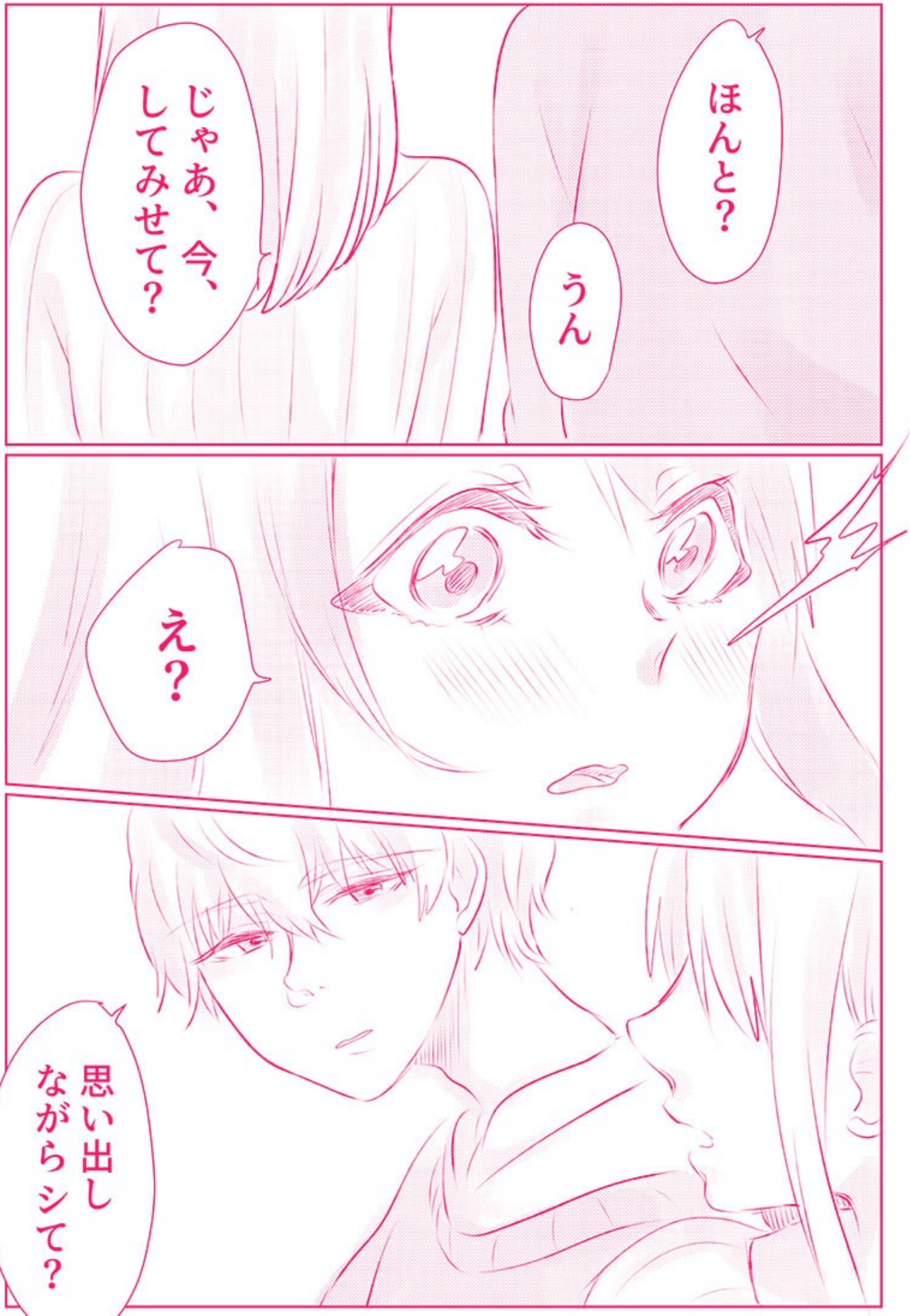

ずっと
会いたかったよ
…私も
ほんと？

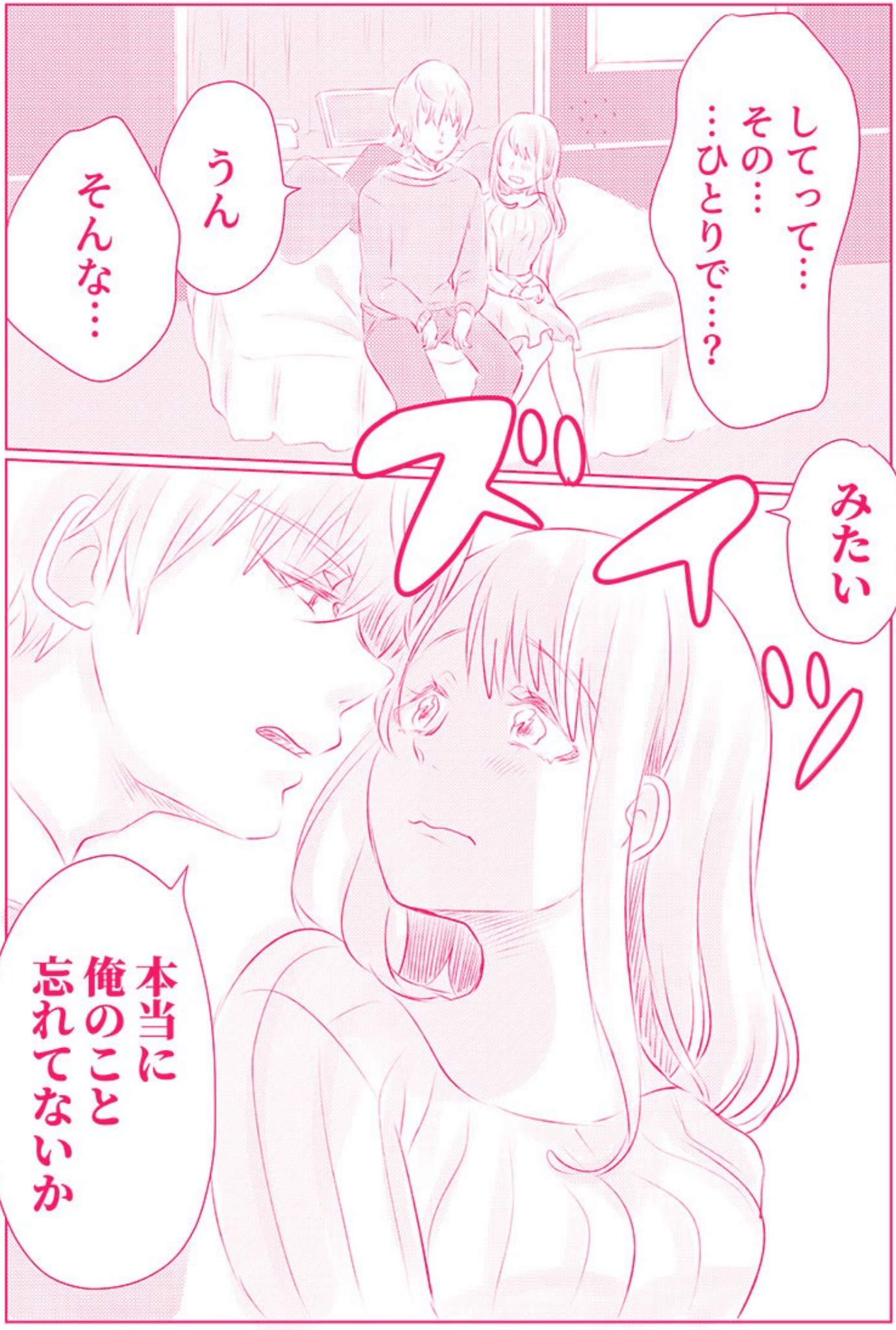

うん、ずっと、
ケイタのこと
考えてた
じゃあ、
あの日のこと
思い出して
ひとりでシた？
えっ
そんなの…
してないよ
ほんとは？

してないって
ケイタは
私をすぐからかう
でも
ちょっとムキになって
私が強い口調になると、
急にしおらしく
なるからずるい
なんだ…
悲しいな

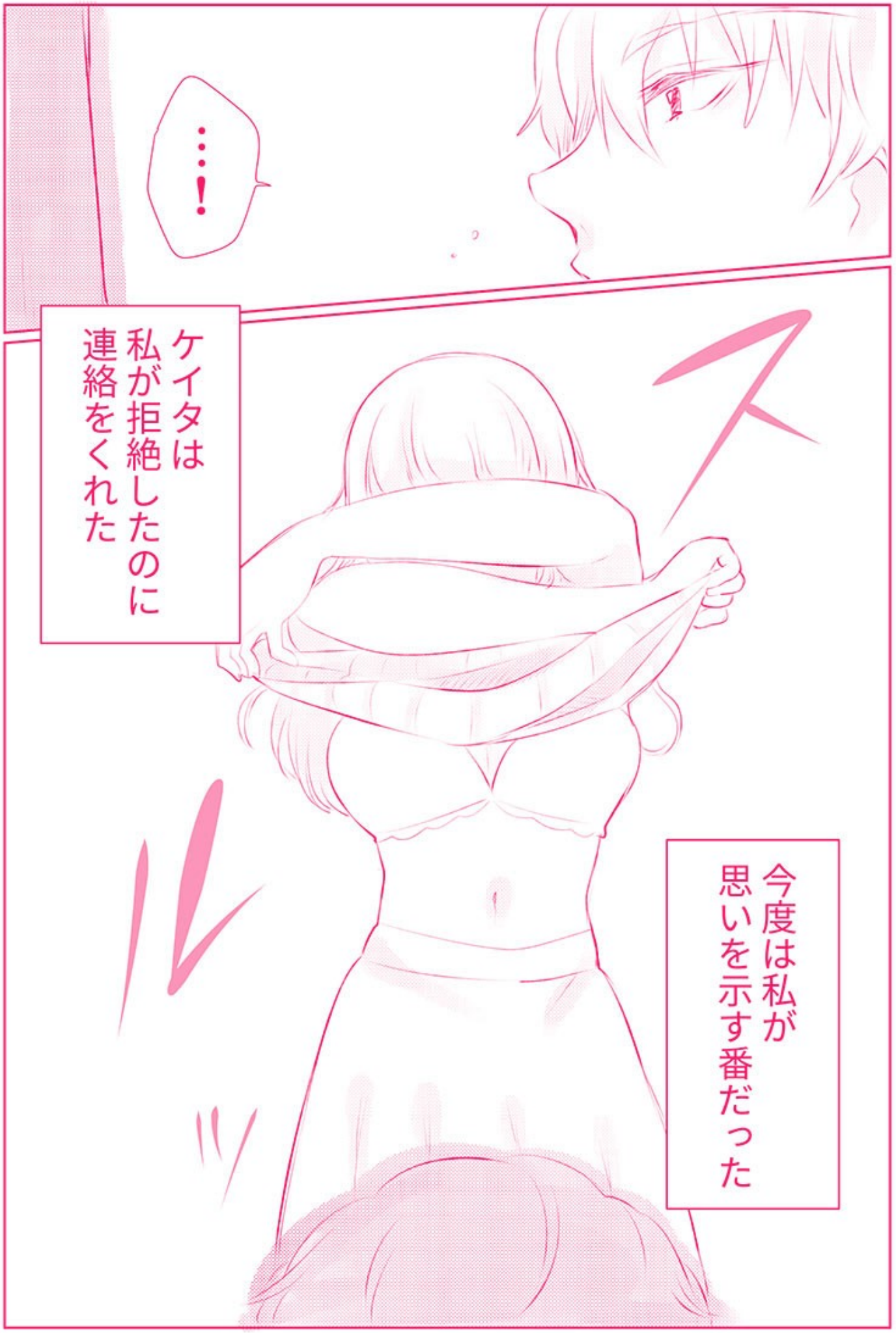

ドキン
あの日、
マイと抱き合えて
すごく幸せだったから
呼び捨て…
ボフ
次の日、
無視されたのも、
連絡
くれなかったのも、
悲しかったよ
きゅっ


あんなに大胆になってしまった自分が恥ずかしくて、
翌日はどうしてもケイタを見れなかった
それがケイタを誤解させ、傷つけていた
ビクビク
アッ…ン
はぁ、はぁ
ずぶっ
ふるふる
ンン…
…
ギシッ
ごめん…私もすごく幸せだった
忘れられない

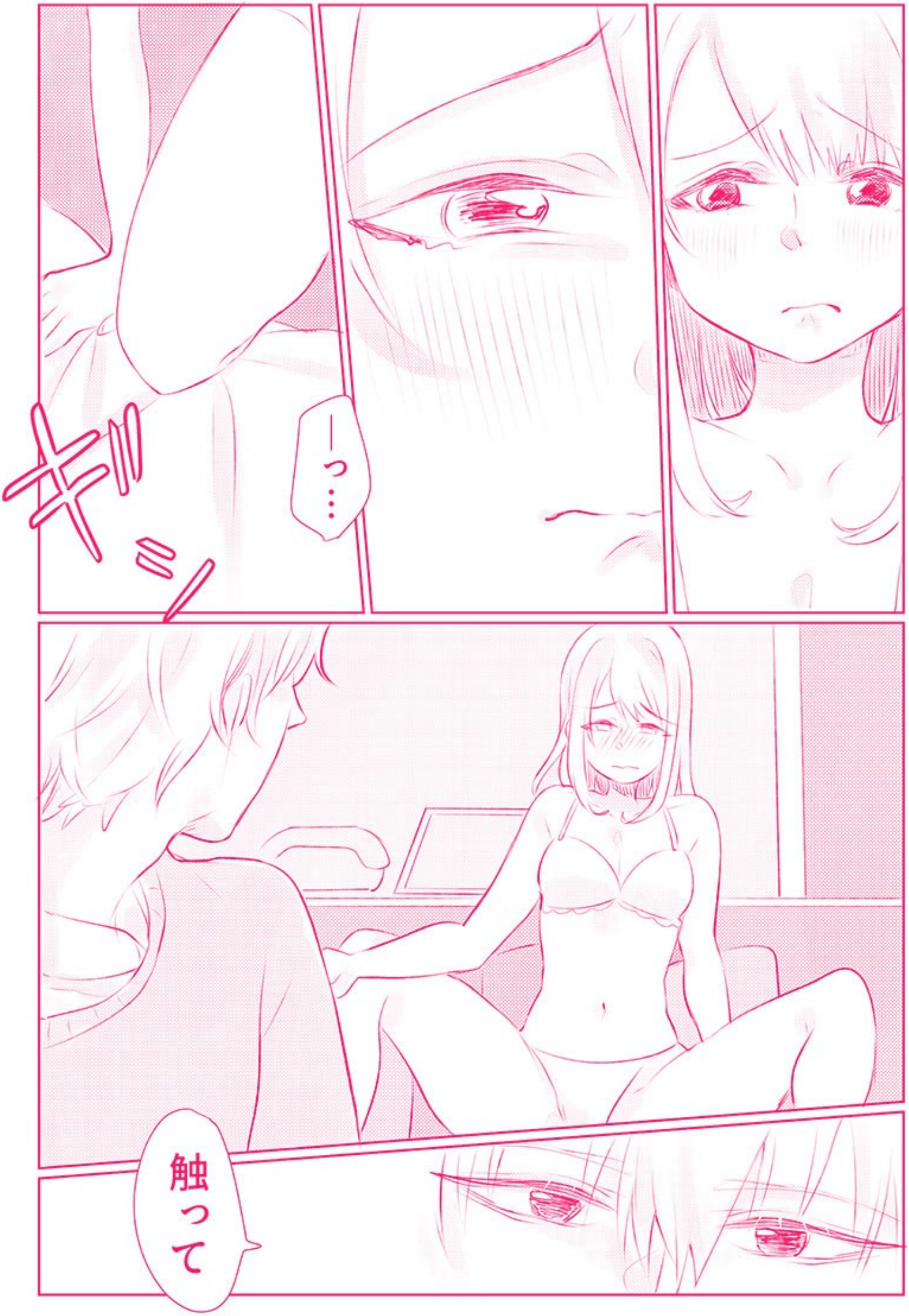

ほんと？
うん
じゃあ、今、してみせて？
え？
思い出しながらシて？

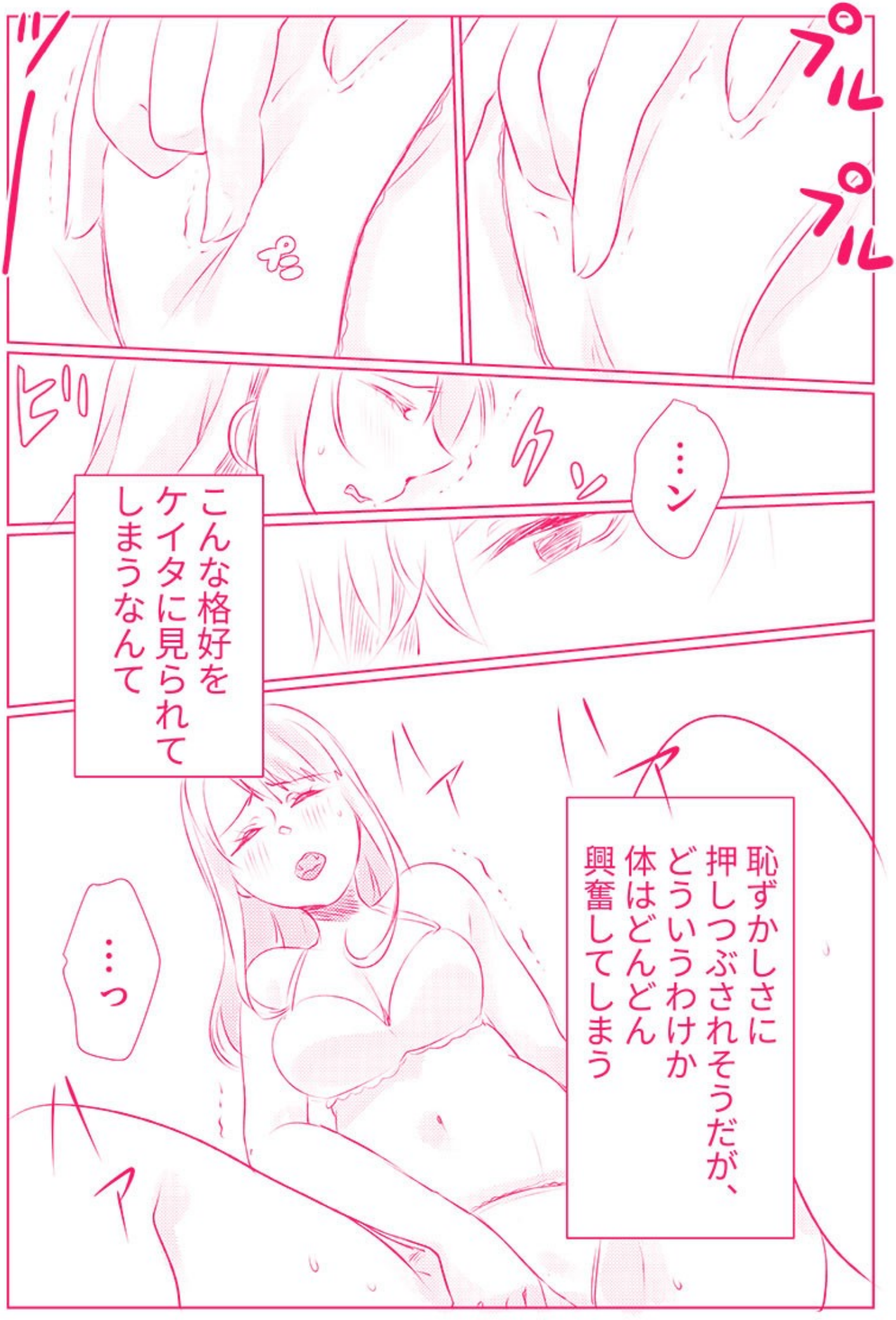

してって…
その…
…ひとりで…？
うん
そんな…
ズイ
みたい
本当に
俺のこと
忘れてないか

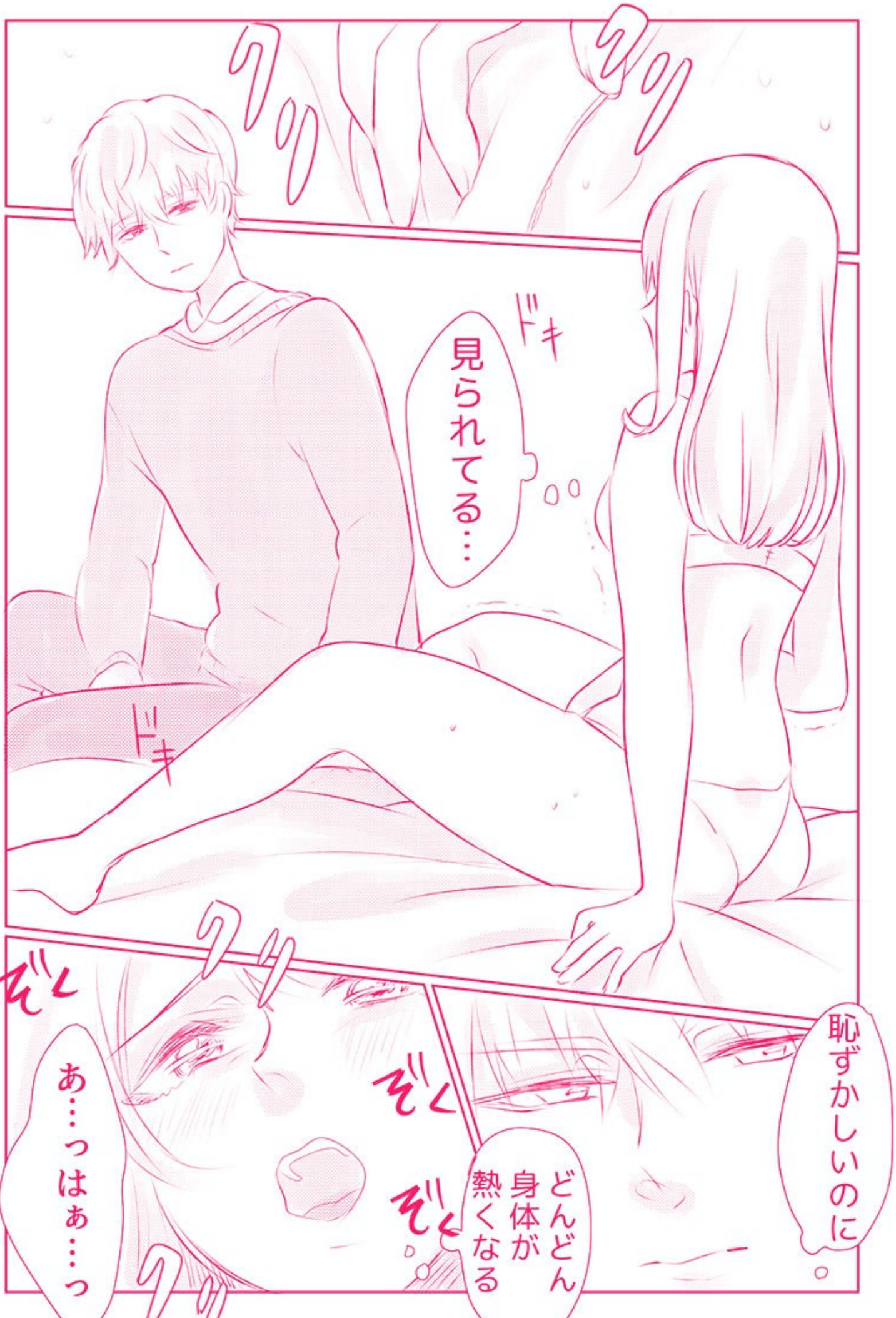
そんなの無理
でかかった言葉を飲み込んで、
私は…
ギシ


…！
ケイタは
私が拒絶したのに
連絡をくれた
今度は私が
思いを示す番だった

ドキン
ドキン
ドキン
…
足広げて
ここ座って


ギシ
ー
っ…
触って


プル
プル
ツー
ビク
…ン
こんな格好をケイタに見られてしまうなんて
恥ずかしさに押しつぶされそうだが、どういうわけか体はどんどん興奮してしまう
…っ


ドキ
見られてる…
ドキ
恥ずかしいのに。
どんどん身体が熱くなる
ぞくぞく
ぞくぞく
あ…っはぁ…っ

『スノボ旅行で友人のSEXを覗いた話』
©鹿こぶちゃ/ひつじ子/Vコミ2021